

¥1500

譚奇俗風

9月号

サド・マゾ・プレイに陶酔する男女
キリンタン 責め苦の中に昇天した人びと
迫害画譜



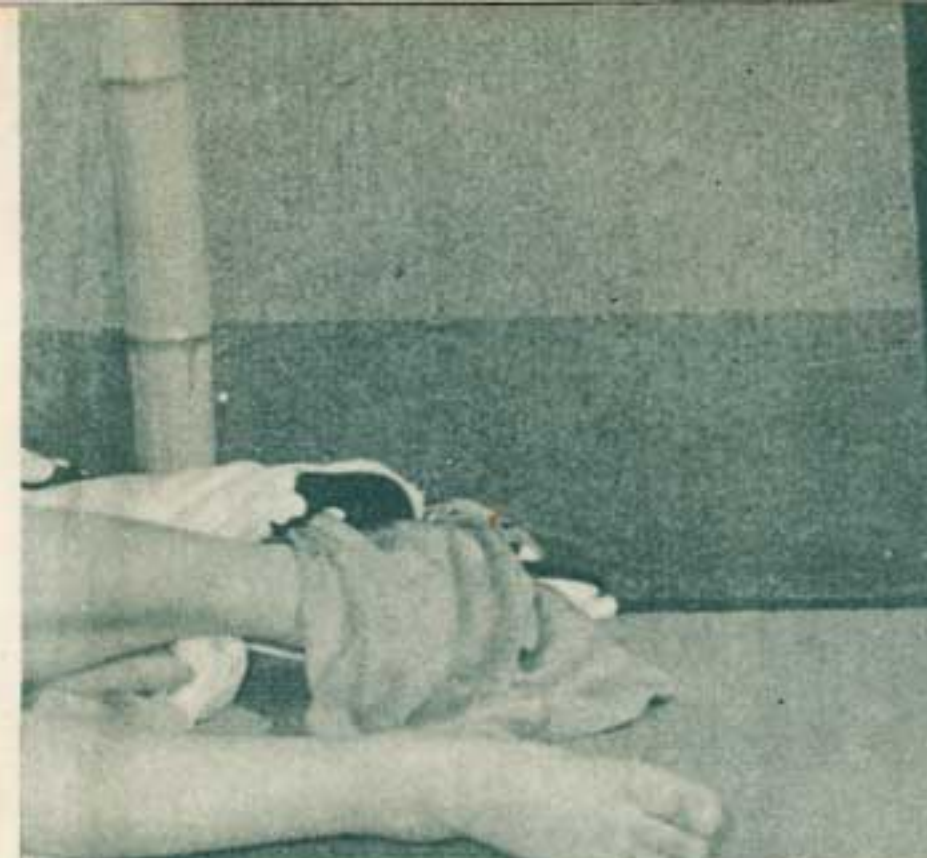
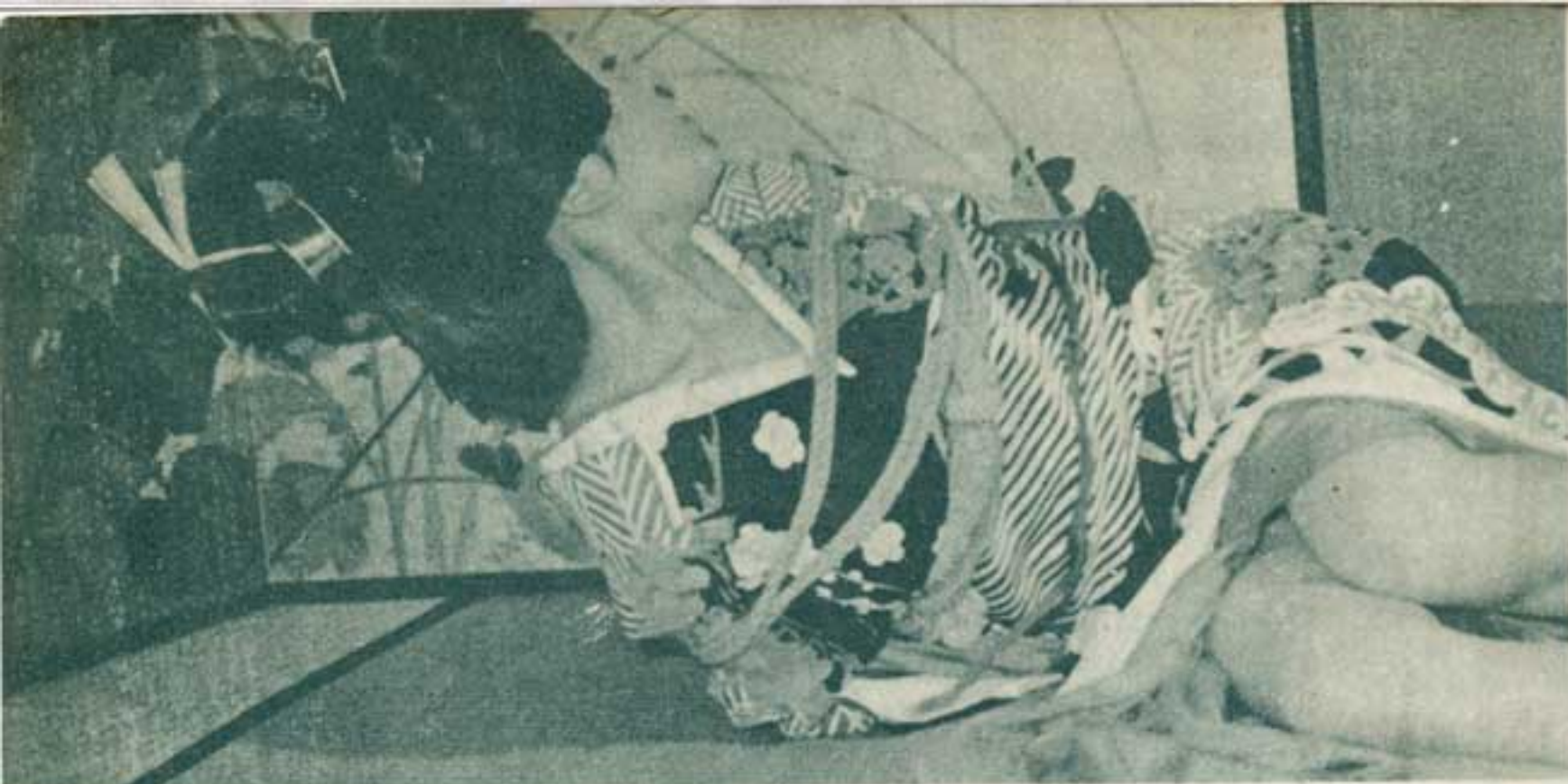
〈風俗の粒より話題の探究〉

定価 150 円



costume design
by drako

表紙…土井啓子
さしえ…江馬美久
小田利美
田上恵子
古正英生



グラビア
縛悶のポーズ

すだれの上で 川岸の無残絵 顔を包む
マキの山を背に ネグリジェ姿 木と六尺禪の男(三)
水が冷たい 庭園の縛女 男の全裸像
珍妙なハリツケ 痛められる白肌 障子にはさまれ

(モデル)
村上ユキ 島崎ユカ 南郷次郎 霧島茂樹
さつきみち 西牧えり子 望月まり子

絵 女学生

口 責め絵巻

・縛られた女学生……田上恵子(五)
・竹責めの女学生……古正英生(五)
・蚊責めの女学生……江馬美久(四)
(色刷り口絵)竜責めされる風早中尉……小田利美(折込)
ルイ・アビラ作品(ハイヒールの魅惑・ベッドの上の拘束……(四))
縄の奏でる苦痛・とらわれの姿

特集 サド・マゾ・プレイに陶酔する男女

小説 痴戯 狂 凶……獅々村 裕(五)
格闘のもつプレイ的楽しさ……栗橋慎吾(六)
アブ・プレイの効用……大達欣治(五)
(写真)女の格闘……ヌートリクス社提供(四)
狂熱のSM交響楽……一ノ瀬悦子(六)
ぼくは女に飼われている……瀬沼英一(七)
白い肌にお灸をすえる楽しさ……笠原光夫(六)
浣腸同好会5つのプレイ……簡野千代子(四)

サルダナバールの虐殺 血潮の饗宴……及川 湜(六)
小説 盗 髪 日記抄……羽井鯨亭(二八)

マゾの女王ベティ・ペイジ……ヌートリクス社提供(二八)

秘帖(上) ソドミアのソドムの意見……かびや・かずひこ(二七)

ホ モ の 窓……(二六)

サロン・マゾキスチカ……(六三)

マゾヒストの手紙から(最終回)……谷 貫 太(三)

キリシタン 迫害 責め苦の中に昇天した人びと 千石仙太郎(九)

女装マニア銘々伝……西 塔 哲(四七)

女装者同士の往復書簡……北原由紀子(五)

あたしの「女装の恋人」……真崎伸一(一五)

(女装のための講座)カッラについて……西 塔 哲(四九)

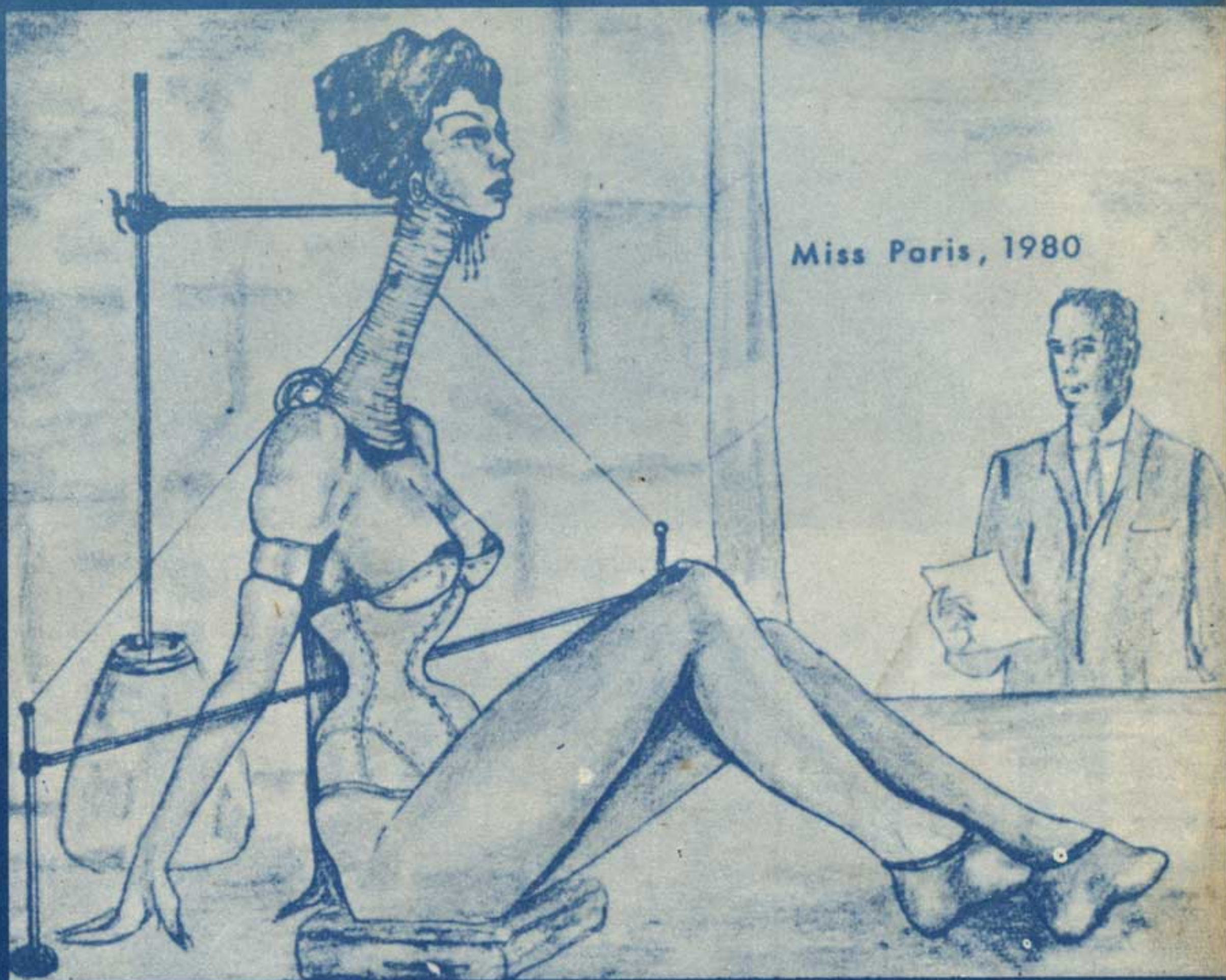
女装愛好の部屋……(六)

☆編集集だより……(九四)

☆読者サロン……(六三)

☆原稿募集……(九四) ☆代理部だより……(六八)

好評連載 炎帝廟⑤ 坤章……芦立鋭吉(二八)
悦虐の彷徨⑤ 傷あとのある女……青山三枝吉(七)



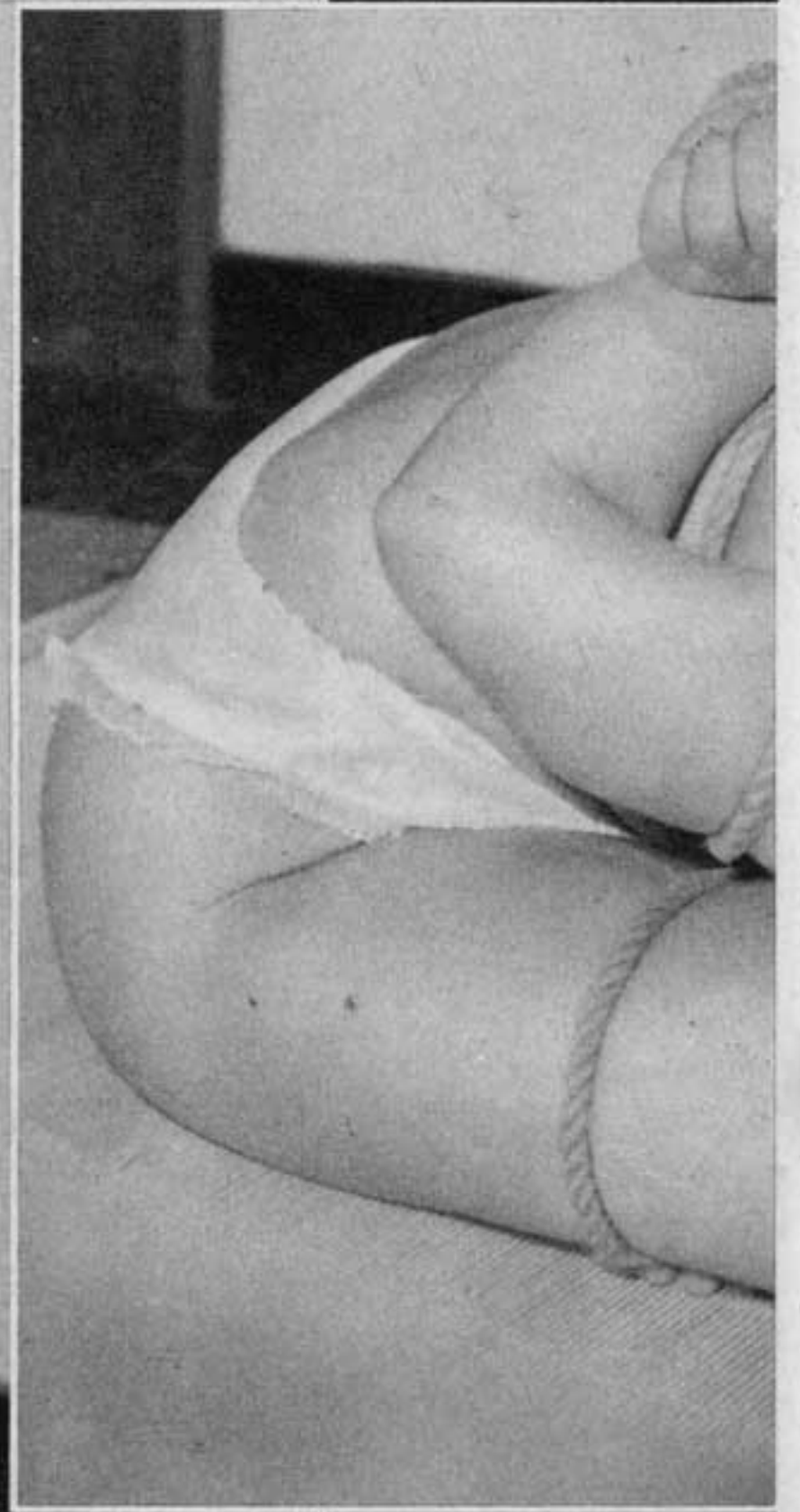
1980年のミス・パリ

縛悶の ポーズ

女は もたえるとき 妖しい色気をまきこぼ
す 陶酔のなかで 法悦のなかで 縄がから
み ムチがうなり 残虐な仕置きを加えられ
るとき もたえは 最高に燃えあがるものだ







すだれの上で

スノコの代わりにスダレの上で 縛られたり顔を
水をつけられたり〈モデル・さつき みち〉





マキの山を 背に

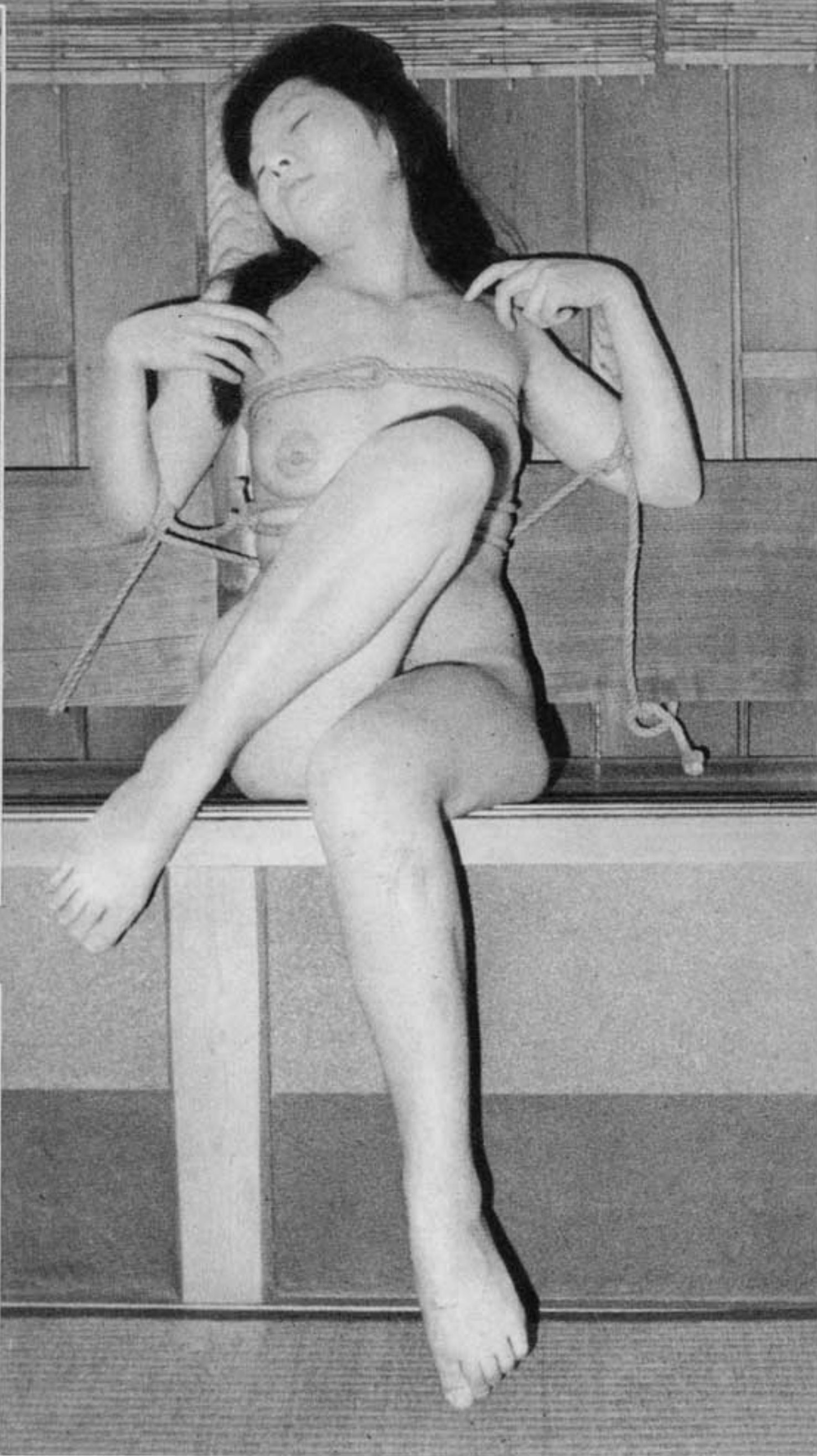
村はずれの うらぶれた小屋の前
に積んであるマキの山 荒縄でゆ
わえられているので へたに動け
ばマキが頭から降りかかるし よ
ろめけば肌に雑木が痛い 無人の
責め苦だへモデル・西牧えり子

水が冷たい

縛られた身を 川に追いこまれると 朝
の水が 冷たくしみとおり からだの奥
まで冷えてしまう 冷たさがからだじゅ
うをしびれさすへモデル・望月まり子







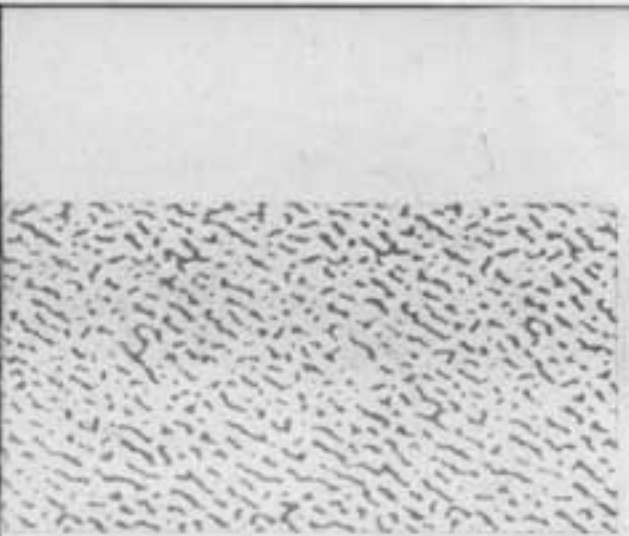
珍妙なハリツケ

窓に腰かけた姿勢で 両ひじと胴中を
めくらべいにくくりつけられ 両手を肩
にあげたポーズは 文字どおりお手あげ
の姿だ じわじわと疲労が押しよせて
身動きもままならない女は しんしんと
嗜虐の淵へしずむ〈モデル・村上エキ〉



川岸の無残絵





素裸にむかれた身を、寝かされたりすわらせられたり、小石まじりの
川岸で、責められるひととき、受縛の時ノ〈モデル・西牧えり子〉

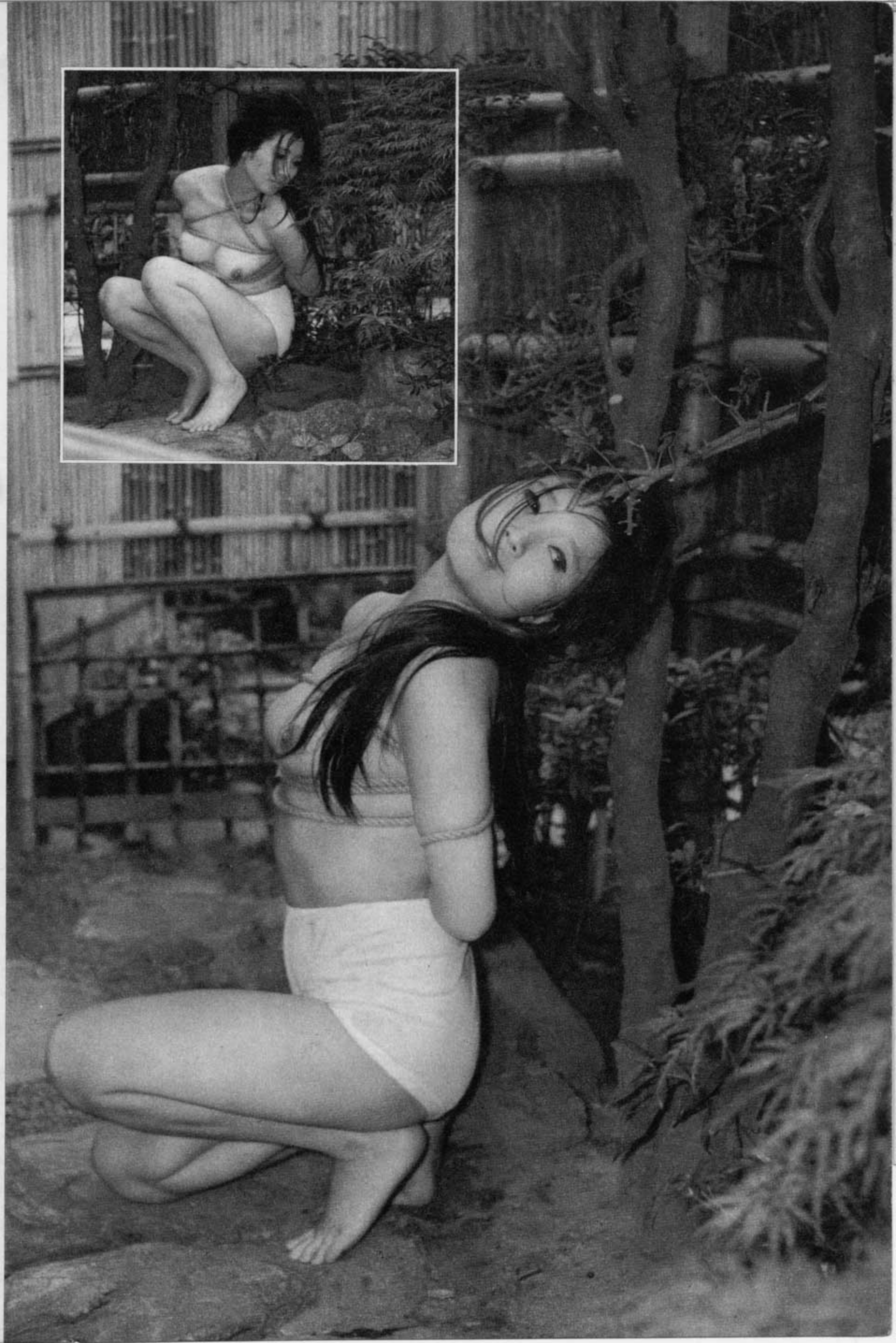




ネグリ ジェの 姿態

ネグリジェ一枚の姿で縛られて もだえても
かいた抵抗 あられもない乱れが 女の
からだに 羞恥をよぶ〈モデル・望月まり子〉

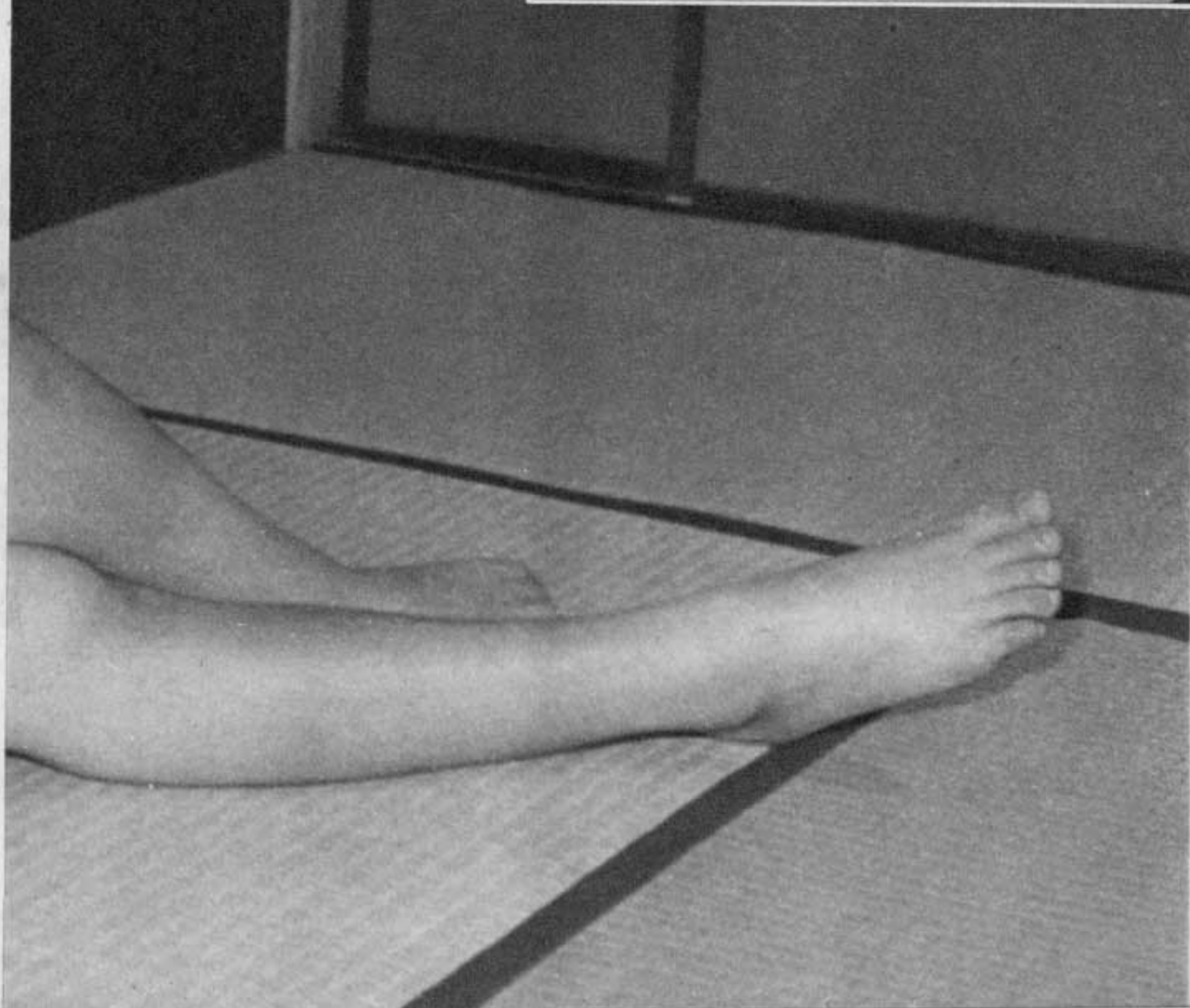
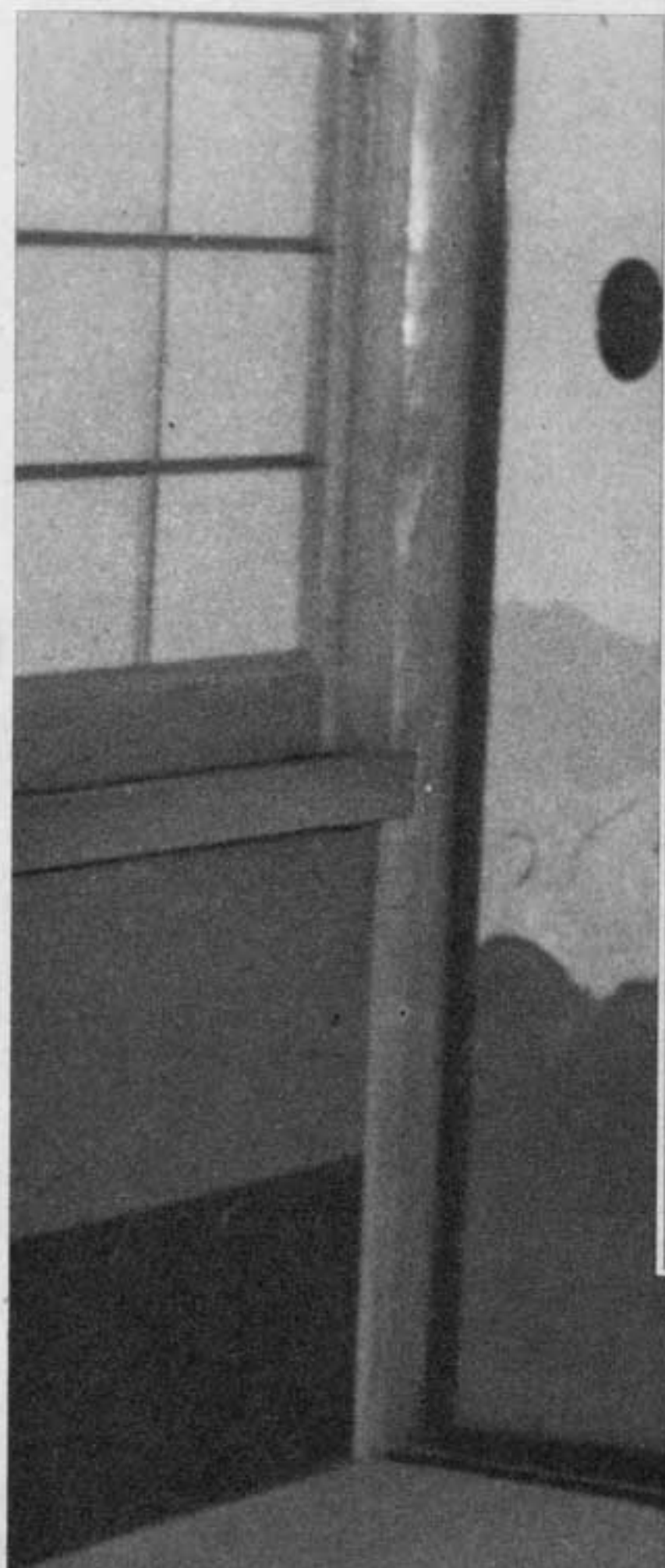




庭園の縛女

こんなところをだれかに見られたら恥ずかしい
そんな気持ちで 女を 縄の苦痛とともに
責めさいなものだへモデル・島崎ユカ





豊満な白い肌に縄がくいこみ 乳ぶさをかむ 髪も
 乱れて 身を投げ出し 女はひっそりといる やが
 て 放心は興奮に変わり 官能が燃えあがり しび
 れるような陶酔が目をさますへモデル・村上ユキ

痛めつけられる白肌





顔を包む

海水帽で顔をおおわれると
息のぬけるところがなくて苦
しいし オムツカバーは 鼻
ただけだして好個の責め場所を
露呈する うしろ手に縛られ
た姿勢だから どうにもなら
ない残酷ないたずらを甘受す
るへモデル・さつき みち





女学生
責め絵巻



縛られた女学生——あわれ セーラー服のスカートをむしりとられた姿態で<田上恵子・え>



で 情け容赦のないムチが 肌をさいなみ 赤い筋の縞模様を描いて 無残! <田上恵子・え>



ころがされた女学生——縛られて 乳ぶさもあらわに 下半身はむき出し—この恥ずかしい姿勢



あられもない女学生——加虐のはての 哀れにも痛ましい女学生の白い肢体<田上恵子・え>



竹責め女学生——制服もむしり取られて 足をくくった竹がのどをしめる！<古正英生・え>



もあらわに 乳ぶさに縄が食いこみ 奇妙な風景に 放し飼いの牛が目をむく<古生英生・え>



牧場の柵にふたりの女学生——ハイキングの途中 青空の下でくりひろげられた緊縛図絵。肌

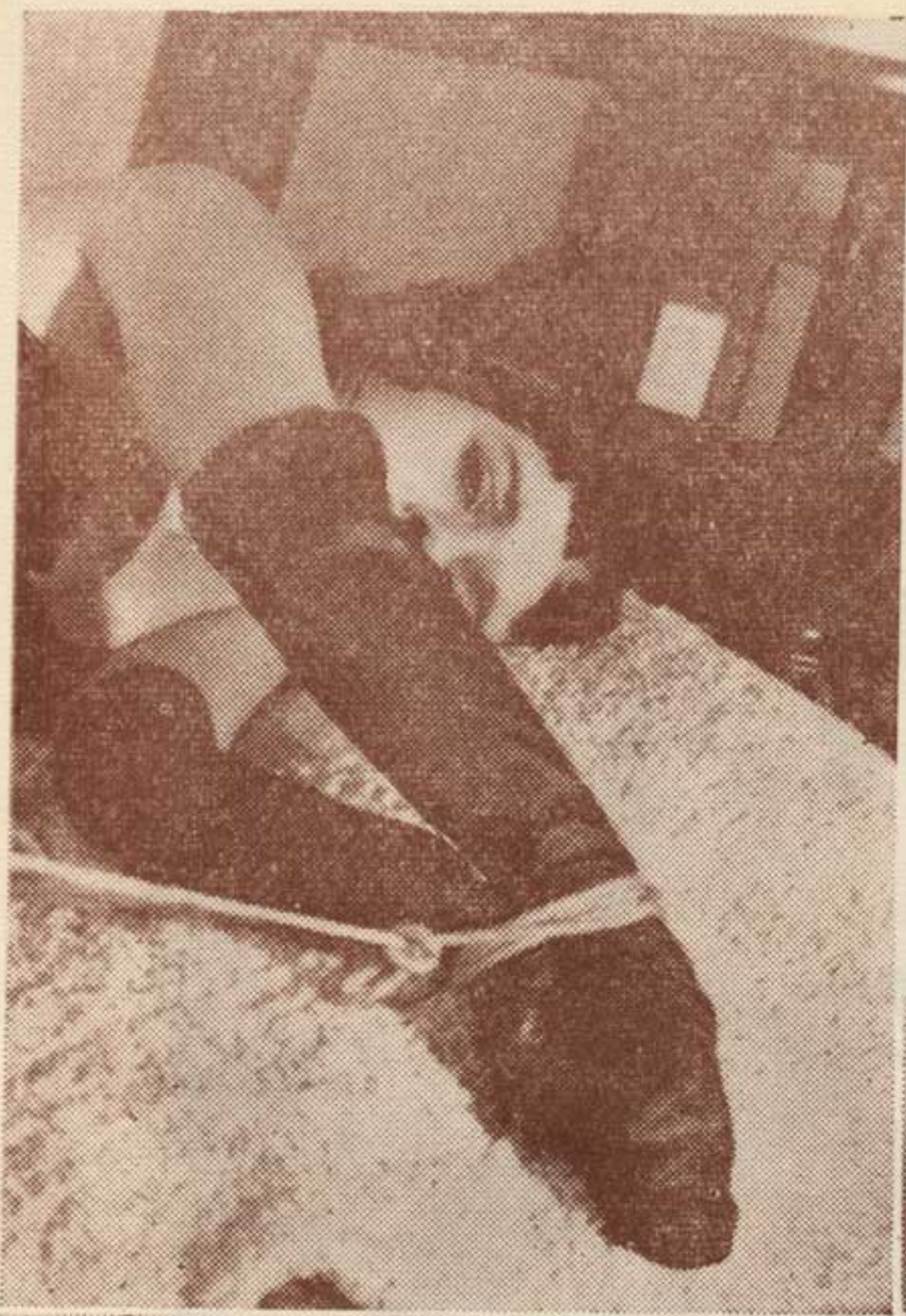


飛行機責めの女学生——^{ぎようすい}行水のタライに 竹を使つての むごい姿勢の緊縛<江馬美久・え>



蚊責めの女学生——あばら家に裸身を縛られ 蚊のたかるにまかされているく江馬美久・元>

ベッドの上の
拘束
表と裏と

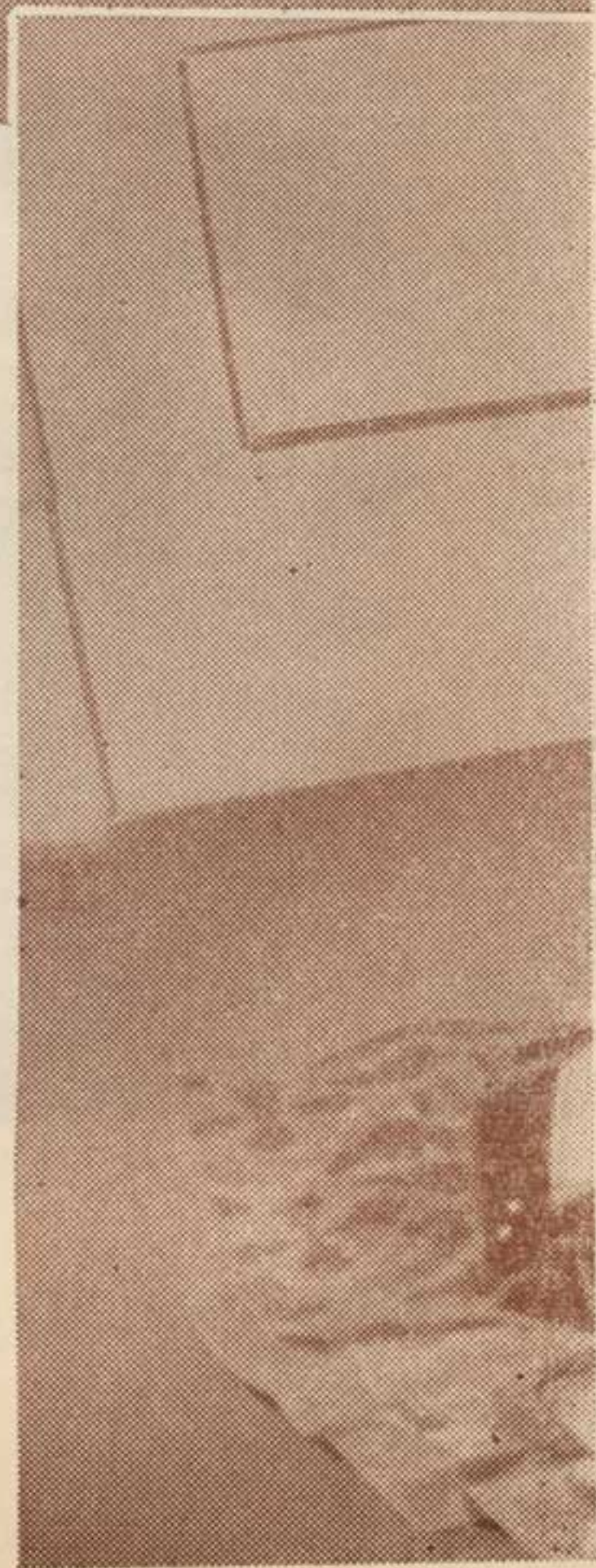




透けて見える 黒のブラジャーと 黒の
 パンティーと 黒のストッキング おま
 けに黒皮の長手袋とハイヒール これだ
 けお膳立てのそろった女が 手首と足首
 を それぞれ合わせてくくられて ベッ
 ドの上にころがされ さて 加虐者は
 この魅力あるいけにえを いったい ど
 んなふうで 責めさいなむのだろうか？

繩の奏でる苦痛





縄が 苦痛のシンフォニーを奏でる
 手を縛り 足をゆわえた そのうえに
 さるぐつわまでかませた姿勢で
 縄が 女体に 悦虐のメロディを吹き込む
 ピチカットとトレモロと
 アンダンテとアレグロと
 あるいは ペットのソロまで織り込んで
 ああ 女体がかもしだす 陶酔の交響詩



とらわれの姿態

金髪娘の緊縛姿は エキゾチックなふんい気をもっているが
ある種の人びとには 万国共通の魅力となっている なまめか
しく 魅惑的で 哀れで 痛ましくて それでいて 美しい!

譚奇俗風

1961年9月号

特集

サド・マゾ・プレイに陶醉する男女

アブ・プレイの効用

大達欣治

サディズムにしろ、マゾヒズムにしろ、一般的な社会通念からいって、アブチックな性向とされている。もちろん、それが、社会に害悪を流すことになる——たとえば犯罪に走ったりすると、絶対に許されるべきではないばかりか、その根を断たねばならない。

しかし、サディズムやマゾヒズム、あるいはフェチズムの傾向は、だれの心の中にも、その度合いの濃淡こそあれ、眠っているものなのだ。ただ、それが、良識により、理性によって、自由奔放に走りださないように押えつけられているだけなのである。

とすれば、それが表面にあらわれる場合は、ブレイキがきかなくなったとき、ということになる。これは、なんとしても避けねばなるまい。

それなら、そういったアブチックな性向をもった人びとは、何によって、その昇華を計ったらいいか、ということが問題である。外国で発行されているこの種の読み物や写真、本誌ならびに類誌を読んだり見たりするのも一つの方法であるが、もう一つ、“同好の士”を求めてプレイすることによって、鬱勃たる心情を発散するのも手段であろう。

その意味で、ペアで、あるいはグループで、この種のプレイをすることは、少しも社会的に迷惑もかけなければ、害毒も流さない。むしろ、そういったことでサッパリとし、社会的な活動に励むとなれば、かえって、その効果を認めるべきであろう。

サド・マゾのプレイは、そういった効用があるのだ。

「あたしは悪い女ですから、犬のようにつながれたまま食事をするのね、こんな恥ずかしい格好までして……」

痴

戯

諷

狂

凶

獅々村 裕

古正英生・え

露出する太もも

小椋は筋骨質で、プロ野球の選手のようにふといたくましい腕をしている。風貌も大毎オリオンズの山内選手に似ていた。そのかれが、ロープを使い始めると、その手先は、おどろくほど器用に動き、まるでロープが生きて踊っているようだった。

小椋はかすかに鼻息をたて、かれ自身の男くさいにおいをぬりこめでもするように、たんねんにロープを夏絵のからだに巻いている。浴衣の前がはだけ、太ももが白々と露出している。

それを二本きつくあわせて縛りあげ、さらにロープは足首の部分をつききりと無残にかんでいた。桜貝を五ツずつならべたような指をつ





けた夏絵の足が、足首にロープを食いこませたまま、かわいらしいきものようにヒクヒクと動いた。小椋はロープの末端を片手で握ったまま、いきなり、畳の上にヒラグモのようにはいつくばると、夏絵のその足の部分にくちびるをあて、指のあたりをチュッと吸った。それから、しっかりかみあわせた歯のあいだから押しだすような調子でいった。

「きみがムスメのときに縛りたかった。縛って縛って——恥ずかしめてやればよかった——」

「それをいわないで」

といって、夏絵が、畳の上に倒れたままのけぞった。足もとにはいつくばっている小椋の角度から見ると、夏絵のつきだした胸のむこうに、白いのど首と、それにつづくアゴがみえた。さらに、まぐれなくちびるがあり、二つの鼻の穴があった。

夏絵のかたちのいい鼻の穴は、肉が桜色に透けてみえるようだった。そしてそれは、口をきいたり声をあげたりするたびに、はげしくひらいたりしぼんだりした。それは、夏絵の感受性の強さをしめしているようだった。夏絵は泣くときも、鼻の穴で泣くのがあった。鼻の穴をヒクヒクさせて——。

それは、下から見あげると、なんともいえない性的な構図になっていた。それを見ているうちに小椋は、不意に凶暴な衝動にかられ、大きな手で夏絵の太もものいちばん肉づきのいいところを、くだけよとばかりにつかんでゆすった。

「ア、ア」

という悲鳴がもれた。八の字にしかめられた眉。ひらき切った鼻孔。きつくかまれた下くちびる。そして、そんな表情のからだ全体か

ら、夏絵のもっている女くさいにおいが、一時にどっと、あふれだした。

夏絵は苦しい呼吸の下から、

「そんなにしないで、そんなにしないで……」

ウワごとのようにいった。それは、女が、からだのいちばん深いところに触れられたときに出す声だった。しかし夏絵は、それをいやがっているのではなかった。

「縛って」

といったのは、夏絵のほうだった。

「小椋さんのお嫁さんにならず、よその男のお嫁さんになった夏絵をしばって……」

刑罰のロープをかませてくれと、からだを投げだしてきたのだった。そのために、わざわざ奥湯河原の温泉宿に出かけてきたふたりだった。夏絵の夫が二週間ほど出張に出ている。その留守中のことだった。たとえロープやそのほかの痕跡が夏絵のからだに残ったとしてもそれは、彼女の夫が出張から帰るまでには消えるはずだった。

小椋が手痛くあしらうと、そのたびに夏絵は、

「そんなにしないで……」

からだをのけぞらせ、乱れた頭髮を畳にこすりつけるようにしてもがいた。そうやることで、自分に加えられる刑罰を、より甘美なものにしようとするようだった。

夫もしないこと

△△△

「お夕食お持ちしてもよろしゅうございますか」

宿の女中が顔をだしたとき、ちょうど責めは一段落ついたところだった。

小椋は、死んだようにぐったりしている夏絵を横に、モロ肌脱ぎの大あくらでタバコを吸っていたが、

「ああ、願いますよ」

と野ぶといバスで答えた。

体力をしぼったあとは、きもちがいい。男らしさが全身に充実しているのが、自分でもわかった。男と女のたたかいは、いつも全身的な体力と体力のぶつけあいなのだ。先にへばったほうが負けにきまっているのだが、勝ったほうだってフラフラだった。なにしろ女というのは、無抵抗でいるくせに、まるで底なしの沼のように男の体力を吸い取ってしまうのだった。

小椋は、女中の目をゴマかすために、縛られたままころがっている夏絵に毛布をかけ、頭の下にはまくらを入れてやった。そんな夏絵の様子は、いかにも乗り物づかれで横になっているという感じだった。

膳部ぜんぶをはこんできた女中は、向こうむきに寝ている夏絵を見て、

「アラ、おかげんでも……」

と、心配そうな顔をした。

「いや、なんでもないんだ。ちょっと疲れただけなんだ」

しかし女中は、部屋へやの中によんどんでいる、変に熱っぽい空気を敏感に嗅ぎつけたらしく、

「そうですか。それならよろしゅうございますけど……」

意味ありげな笑いをもらしてさがっていった。

女中が部屋から出てゆくと、小椋は夏絵のからだからパツと毛布をはいで、

「やっこさん、毛布の下がこんな仕かけになっているとは気がつくまいな。フフ」

と不敵な笑いをもらした。

それから夏絵のからだに食いこんだナワ目を、いとおしそうに指先でなでるのだった。

夏絵は、小椋にそうさせながら、じつと目をつぶっていたが、ねむっていたわけではなかった。目をつぶったまま口を動かすと、

「あなた、水をくださらない」

といった。そういつてしまってから、小椋にむかって、あなた、と呼びかけた自分に気がついてハッとした。そして、

「夫のほかに、あなたと呼ぶ人があるなんて、あたしはわるい女だわ」と思った。

小椋にも、そんな気分はつたわったらしい。コップで水をもつてくると、夏絵がそれをのむのをしゃがみこんで見ていたが、ニヤリと笑って、

「きみのだんなさんもしないようなこんなこと、なんだかわるいみたいだな」

責めのことをいっているのだ。

「あの人のことをいわないで」

と夏絵がそれをさえぎった。

「あたし、何もかもわすれようとしているのに、思い出させたりなんかしちゃいやよ」

「ああよしよし。ぼくにはぼくのやり方があるからな。たとえばこんなふうにするのだって、ぼくの愛情さ」

小椋はまたしても、夏絵の太もものききどころをギュウツとつかん

だ。すごい握力があるから、たまらない。夏絵は、

「ウィッ」

とおかしな声をもらして全身をのけぞらせた。そのはずみに頭がまくらからはずれて、どしんと音を立てて畳の上に落ちた。女は、すぐまくらをはずしたがる。まくらをはずして畳の上にジカに頭をこりこりとこすりつけていると、いかにも女らしい屈服の快感の中へ落ちこむことができるのだった。

小椋は、夏絵に二、三度悲鳴をあげさせると、やっとな手をはなした。自分の指の力の強さをたのしんでいるようだった。それから、

「どうだい、飯を食うかい？ もっとも、きょうは、きみはナワつきだから、飯だってナワのついたまままたべるんだぞ」といった。

「ええいいわ」

と夏絵はこたえた。

「あたしはわるい女だから、犬のようにつながれたまま食べるわ。うんと恥ずかしいようにしてちょうだい」

「よしきた」

不思議なさしむかいの夕食がはじまった。

夏絵の下半身は自由になったが、両腕と胴は堅くしばられたままだった。そんな姿で夏絵は、お膳ぜんの前に横ずわりになった。うまく据すまえをつくらってすわろうと思ったが、両手がつかえないのでうまくいかない。それでも下半身をいろいろねじって太もものあたりを隠そうとする。

「いけない、そのままだ」

小椋が命令するようにいった。

「よろこんで恥ずかしめを受けるといったじゃないか。いまに、きみの心臓まで恥ずかめてやるよ。ももが出ているくらい、なんでもなじいやないか」

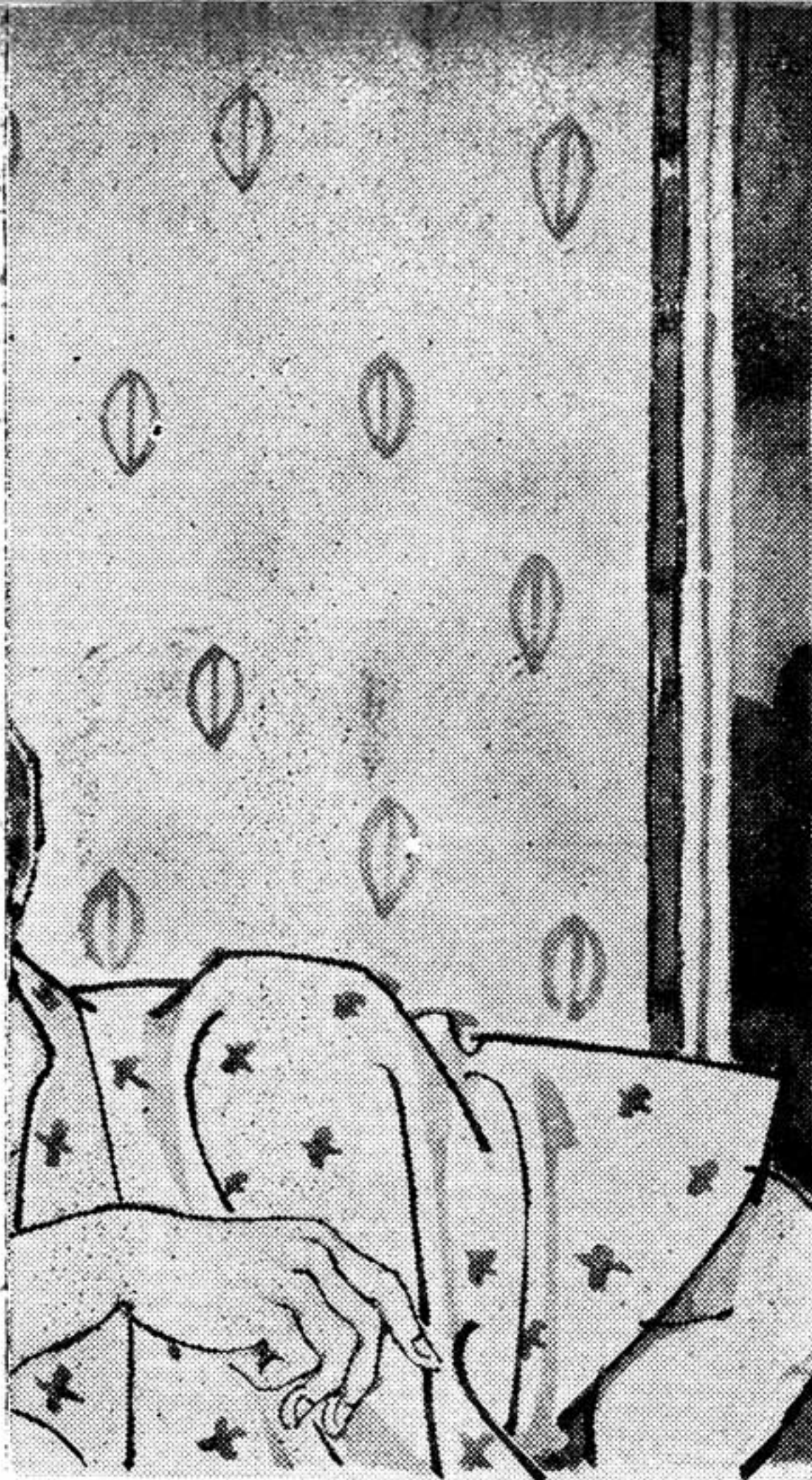
夏絵はあきらめてべたりと尻をおとした。

すると、乱れた裾前が大きくわれて、太ももが、ひとまわり大きくなったようにはじけ出た。

それが、この上もなく、みだらな絵になっていた。小椋は、それを見ながら一気にビールのグラスをほし、うまそうにノドを鳴らした。

夏絵は、夫の前でも、そして世間的にも、美しく貞淑な若妻だった。見せかけではなくて、ほんとうにそうだった。

小椋の前でそうやっているのは、もうひとりのちがう夏絵だった。



しかし、貞淑な夏絵を思ってみることで、いまの夏絵のみだらさが、いっそう生きてきた。もし彼女の夫がこんなところを見たら、どうだろう。からだから精液を吐きながら、腰をぬかし、気をうしなってしまうかもしれない。

▽▽▽ 尻はしより、祭り姿 △△△

夏絵は、手の自由をうしなっているの、たべ物も飲み物も小椋が口へはこんでやらなければならぬ。

「あーんしてごらん」

そうやって小椋は彼女に口をあかせ、たべ物をはしでたべさせてやったり、またビールのコップをあてがってやったりした。

そうやってみると、女の口というものが、どんなに性的な表情をもっているかがよくわかった。ビールのコップを傾ける速度が早すぎると、そのコハク色の液体やあわは、よくしまった、かたちのいい夏絵のくちびるからあふれだして、ふしだらな感じを強調した。

小椋がそれをふいてやろうとしないので、夏絵は舌をペロペロとやって、くちびるのあたりをナメまわしたり、アゴを胸にこすりつけたりするのだった。それをみながら小椋は、声を立てて笑った。そのうち夏絵は、

「あたし、自分でたべてみるわ」

といって、からだを膳の上にかがめ、口を皿にちかづけて、たべ物をくわえこむようにする。お吸い物などはうまく吸いこむことができたが、固形物はなかなか手ぎわよくいかない。

「きみのようなきれいな人が、そうやっているところは、なんともいえない見物だね」

小椋はそういって、自分の裸の胸を平手でぴしゃぴしゃたたきなが

よろこんだが、

「よし。おもしろいことをするから待っていたまえ」
いきなり立ち上がると、夏絵の背後にまわった。



何をするのかと思うと、かれは、夏絵の下半身にまといついている寝巻きの浴衣ゆかたの裾すそを高々とうしろへまくりあげ、尻しりはしよりにしたのだった。そのあたりから、小椋の目がいきいきとかがやきだした。「まてよ」

と、かれは効果を考えている様子だったが、「うん、そうだ」

何かひとりうなずくと部屋を出てゆき、しばらくすると女の白たびを持って帰ってきた。女中に借りてきたらしい。夏絵は洋装できたのだから、白たびの準備はなかったのだ。

やがて後ろ手に縛り上げられ浴衣ゆかたの裾すそは尻しりはしより、ふたつの足はラッキョウのように根もとからムキだしになり、しかも白たびだけをはいている、という奇妙な姿の夏絵ができあがった。

ビールの酔いにしびれた小椋の頭の中には、神田明神の夏祭りにみる芸者の神輿みこしかつぎの姿が浮かんでいた。

おそろいの淡い水色のはんてんに豆絞りの手ぬぐいのはちまき。腰にまいた細帯もイキな芸者衆は、一心太助いしんたすけのようにびっちりした白のサルマタで股間こかんをしめあげ、目にしみるような白たびで土を踏みながら神輿みこしをもんでいた。

重い神輿があちこちへとゆさぶられるたびに、それをくい止めようと踏んばる彼女たちの尻しりのあたりが、サルマタの下でなまめかしくねじれるのがわかった。みんな、ふとくて短い、肉づきのいい脚あしをしていた。あの脚は、お座敷着の下でいつもきちんと二つに折られ、重い尻しりをのせてシビレに耐えている足だった。

なまめかしいことだけにふさわしいその足は、神輿かつぎのような重労働になると、なんとなくモタつきが感じられた。それだけにかえ

って、ゆがんだなまめかしさにあふれて見えるのだった。

小椋は、暑い日の下で、魅入みいられたように立ちつくしたままそれにながめた。そして、神輿が移動すると、それについて移動する見物の子供などにまぎれて、かれも神輿のあとを追った。

はじめ純白だったたびが、しまいには土にまみれたムゴたらしい様子になり、どうかすると、まっしろなふくらはぎのあたりにまで、犯されでもしたように泥の跡がついたりした。

そして、重い神輿に押された白ブタどものぎょうぎょうしい悲鳴。男の場合はワッショイワッショイの喚声かんせいであり、ピンチになると、その喚声はピンチにいどむようにいっそう高まるのだった。しかし、白ブタどもは、つねにキイキイ声の悲鳴だった。神輿の重さが肩にこたえてくると、彼女たちは暑い日さかりの路上で、まるでいまにも押しつぶされそうな声をあげるのだった。

そして小椋は、そのはらみブタが裂かれるような悲鳴に魅了されたように、どこまでもどこまでも神輿のあとをついてゆくのだった。

小椋はいま、あの神田祭りの芸者の姿を思いだした。ねむっていたあこがれが、夏絵の白い肌にさそわれてよみがえってきたのだった。

はんてんもなかった。股間をキュツとしめあげるサルマタもなかった。しかし白たびはあった。豆絞りの手ぬぐいのかわりに白いタオルがあった。サルマタのかわりは夏絵自身がつけている白のパンティーがあった。このさい夏絵が、色物のパンティーなんかでなく、白いパンティーをつけていてくれたことに、小椋は感謝した。

小椋が、夏絵の浴衣ゆかたの裾すそを尻しりはしよりにまくりあげると、夏絵は自分の下半身を見おろして、「ひどいかわいそうだわ」

といった。

それから小椋のするままになりながら、いったい何事がはじまるのかと、なかばおそれならば期待をもって見まもっている。

「はい、これでいいんだ」

夏絵の身ごしらえを終わった小椋は、ポンと祝福するようにその尻をたたいた。そして、たべ終わった膳の上の物をさっと片すみへよせると、

「どれ、この上につけてすわってごらん」といった。

夏絵は、いわれたようにテーブルの上にのり、とまどったように立っていたが、すぐ片ひざをつき片ひざを折ってポーズをつくった。すると、太ももが押されて、ふだんの二倍ものふとさにふくれあがり、いまにもはじけそうな肉の緊張を見せた。

「ム、こりゃあいい!!」

思わず小椋の口から嘆声もれた。

それは、神田まつりの神興芸者が、そのままの姿でキリリと後ろ手に縛りあげられた一幅の無残絵になっていた。すばらしい効果だった。

小椋はそれに見とれながら、なかば無意識に、かたわらのコップに残っていた飲みさしのビールを口へはこんだ。ところが、それを不用意に食道へ流しこんだので、カッカッ、とむせてしまった。

「ウム、こりゃあいい、これは……」

かれはまっかになってむせながら、しきりとそれをくり返した。

夏絵百たたき

「いの豆を口でひろってあるくんだ」

小椋が、酔ったような調子でいった。

ほんとうに酔っていたのだった。ビールに酔い、そして痴戯するシビレたようなよろこびに酔っていた。

座敷には、ビールのおつまみのフライビーンズが、夜空にまかれた星くずのようにちらばっている。それを、あのいましめのままで、あのいでたちのままで、夏絵にひろってあるけというのだ。手ではなくてその口で――

「江戸時代にね。密通とかよくないことをした女に対して、百たたきの刑というのがあったんだ。群衆の前で女の尻を出させ、それに百たたきのムチを加える。また、豆ひろいの刑もあったんだね。きみは、坂本夏絵は、小椋三郎と不義密通をいたしたるかどにより、これから豆ひろいの刑に服するんだ。いいかね」

小椋は、テーブルの上に大アグラを置いてそっくり放つと、自分の太ももをビシャリとたたき、それから

「アッハハハ」

と愉快そうに笑った。

が、すぐ笑いをおさめてこわい顔になると、

「わかったかね。わかったら、いまぼくがいったことを繰り返してごらん。さあ――」

「坂本夏絵は――」

夏絵が口をひらいた。

「坂本夏絵は、小椋三郎と不義をいたしたるため、これから豆ひろいの刑を……」

「刑を、じゃなくて刑に服します、だ」

「豆ひろいの刑に服します」

「よしッ。それじゃさっそく始めッ」

あわれな被告人は、後ろ手に縛られたまま畳の上にひざまずいてホッとした息をついた。

それは、じっさいの話、かなりしんどい作業だった。手が自由になり、四つんばいになれるのなら、そうむずかしいことではなかった。しかしそれができないので、それは腹筋と背筋、そしてひざ関節に過大な負担をかける作業になった。

夏絵はいろいろくふうしたあげく、ももをひらいて地面にひざまずき、上体をあおりながら、胎児を産みおとすエスキモーの女のように思いきりももをひろげて畳の上の一粒の豆に正対した。

それから、反動をつけるようにして上体を少しずつ前にかがめてゆき、おそろしくつらい肉体作業のはてに、やっとその口が豆のところまでたどりつく。

ひゅっとな音を立てて豆をくちびるで吸いこみやっとな上体を起こしたとたん、ねっとりした汗が一時に全身からふきだした。そして顔じゅうを汗だらけにしながら、夏絵は豆をかみ、嚥下するのだった。

「ひどいことを考えだすのね。とってもツライわ。これ……」

いくつかの豆を嚥下しおえたとき、夏絵は思わず小椋にうったえた。

「刑罰だもの。つらくなかったらどうかしている。しかし、ぼくは、暴力によってきみに、これを強制しているんじゃない。いいか。坂本夏絵は小椋三

郎と密通したかどにより——だからきみは、きみの良心にしたがって、この刑罰を甘んじて」

「わかったわ。それ以上いわないで！」

夏絵がさげんだ。

「そうよ。坂本夏絵は小椋三郎と密通しているのよ。だから、その罪ほろぼしに豆を三十も食べなきゃいけないんだわ。食べりゃいいんでしょ、食べりゃ」

彼女はそういい放つと、両ももをひろげたひざあるきで、おそろしいいきおいで次の豆にむかって突進しはじめた。

それはまるで、女のイザリ勝五郎みたいなへんてこなかつこうだった。

が、このときはもう彼女の下半身は疲れて、シビれたようになっていたので、意気込みほどには脚が動かず、すぐ、ひざの運びがもつれ



て、畳の上に前のめりにつんのめ
ってしまった。

「うっ」

という声がきこえた。

小椋がかけよって抱き起こすと、
夏絵の右のほお骨のあたりに血がに
じんでいた。畳の上で顔面制動をきか
せてしまったのだった。

小椋に抱き起こされた夏絵は、かわ
いたくちびるでニッと笑いながらいっ
た。

「これでひとまずおしまい——ね。ナワを
ほどいてあたしを抱いて。たべ残した豆は
いつかたべるわ。だって、あたし、もっとも
っと豆を食べる、わるい女になりたいんです
もの」

夢魔の触感

夏絵は夢魔にうなされていた。

湯河原から帰って三日めのことだ。

夫はまだ出張から帰ってこない。

小椋三郎も、仕事がいそがしいのか、あれから電
話もかけてこない。夏絵のひとり寝の夜がつづいてい
た。そして夢魔——。



その夢は、おそろしい夢のようでもあるし、ヌラヌラとした艶夢のようでもあった。

へんにぬめぬめとした軟体動物が吸盤きゅうばんのように夏絵の下半身に吸いついていた。

「おまえのからだの中にいっぱいまっているドロドロのわるいものを吸い出してやる。それをみんな出してしまえば、おまえはまともな女になれるんだ」

その、触感だけがあって姿のない不思議な怪物はそういうと、夏絵のからだに口をあてた。

女がドロドロの女の毒を吐きだす口は一つしかないのであった。

夏絵はそこに口をあてられながら、まるで叫び出そうとするように口を大きくあんぐりとあいていた。叫ぼうとするが声がでなかった。口がパクパク動いただけだった。そして心の中で、

「あたしが吸いとられる。あたしが吸いとられる」とさけびつづけた。

しかし、それとは反対に、その姿のない軟体動物のようなものにしかりかみついていた。

不意に夢が人間くさくなって。

「夏絵、おまえという女は——」

という声がきこえた。

「あっ夫だ」

と思った。
いつのまに帰ってきたのだろう。
出張から帰ってきて、じっと夏絵のまくらもとにすわって夏絵のウ
ワごとをきいていたのかもしれない。出張から帰るまでにはまだ日が

あったはずだ。急に予定が変わったのかもしれない。が、それだってまだ現実のできごとなのか、夢の中のできごとなのか、夏絵にはハッキリわからないのだ。

不意に夏絵の意識がハッキリした。だれかが彼女の肩のあたりへ手をかけてゆすっているのだ。

目をひらくと、黒々とした輪郭をみせて、ひとりの男がすわり、じっと夏絵を見ていた。

はじめぼんやりとしていたその姿は、夏絵の視線の焦点がさだまるにつれて、だんだんハッキリしてきた。その人を認めて夏絵が、

「ああ」と声を出すのとほとんど同時だった。

「会いたかったけど、どうしてもからだのつこうがつかなかったんだ。今夜思いたったら、ヤもタテもたまらずやってきたんだ。それに、こんなふうにしてきみの家に忍びこんでみたいというのも、ぼくのひとつの夢だったからね」

それは夢ではなく、なつかしい男の、たしか現実の声音だった。それから男は、

「こないだのつづきだ。縛ってあげる。それから——」
夏絵は二、三度、ゆれるようにはげしくうなずき返した。

二人だけが楽しむ大人の絵本？

好き人の筐底に隠された夜の秘密！

秘められた名画と

禁じられた場面集

この場面をマネしないで下さい！

夜のムードにマッチした
新形式の秘芸画入

千共 五〇〇円

▼カタログ切手30円封入申込の方に急送す

東京都世田谷局二十一号口

福寿会

ハサロン・マソキスチカ番外版V

変態性欲を扱った

最近の二つの本格的小説

文芸作品に、変態性欲が、しかもその深奥について書かれることは、わが国でも、谷崎潤一郎や稲垣足穂らの作品に見られることは、人のよく知るところである。

しかし、それらは、比較的文学愛好家の間にだけとどまったのであるが、このごろでは、週刊誌に堂々と連載されるようになった。それだけ、人間を深く掘りさげるようになったというのか、とにかく、だれでも読もうるチャンスが与えられていることは、そういった性向を理解するうえに喜ばしい。

一つは『週刊文春』連載の、円地文子の『男の銘柄』で志村里枝というレジャー・マダムが無気力な夫に反発して、外で情事をつづける。そして、デザイ

ナーの花輪喜一郎という変態性欲者の手によって、さまざまテクニクが施され、里枝の肌の下に眠っていた『女』が急激に開花するというわけだ。

ムチの下に呻吟し、足を愛撫されるフェチズムに陶醉し、しかも情人の情事をのぞいたり自分のあいびきを相手に気づかせずに情人にのぞかせたりと、多様のアブチックな世界を展開し、読む者の目を見はらせる。

もう一つは『週刊現代』連載の外村繁の『濡れにぞ濡れし』でこれは自叙伝の形式をとっている。作者はつい先日物故した。主人公の『私』は、子供のころから美少年と騒がれ、中学時代には上級生の『少年』にされ、いつか変態的な感情が生まれる。

そして、上顎ガンのため放射線による治療を受けた結果、性不能者となってしまふ。

その結果、よく夢の中で、変態的なシーンを見るばかりでなく現実の上でもかなり好色的となる。道を歩いている女の和服のすそからこぼれる白い脛や、タイトスカートの下でゆれる女の臀部や、あるいは、青空の下で物干し台に干された洗たく物の腰巻きとかパンティーに心をそそられる。いわばフェティッシュな傾向を示す。

ある日、夢を見る。——雨天体操場のような殺風景な部屋で妻の素子が、黒タイツをはいた背の低いふたりの男に、十字架のような柱に縛りつけられる。そうしておいて、ふたりの男はいきなり乳首を指でつまむ。強く押す。そのあとで、羽刷毛を持って、素子のわき下をなで回す。次第に力が加わっていきにつれて、素子は顔をゆがめ激しくからだをうねらせる。

——続いてもうひとりの男が素子のかたわらに寄ってくる。

手には黒い手袋をはめている。今度はその手袋の手で、素子のわき腹をくすぐり始める。やはり素子は無残な格好になる。

男が素子に何かを言う。妙なことに素子は微笑さえ浮かべてうなずいている。ふたりの男はまるで素子から快い承諾を得たように、左右から素子のわき下をくすぐり始める。

たちまち素子の顔は醜くゆがみ、からだをくねらせもがき苦しむ。素子は腹部を突き出し、からだをそり返らせる。木の柱が激しい音をたてて揺れ動く。こういったサディッシュな場面も見られる。もちろん『私』の妻の素子は、それによって喜悅するのだから、マゾ的な性向を示しているわけだ。

『週刊公論』の、今東光の作品『ひとり寝』のなかでも、ツネツたりして女を痛めつける描写があった。女はそのアトを見せびらかすのだが、こうした好色ものの裏に、アブチックな面が顔を出しているということは、これまた現代の世相か。

格闘のもつプレイ的楽しさ

栗 橋 慎 吾

女のタイト ル・マツチ

東宝現代劇の『お鹿婆さん東京へ行く』の一場面。大阪からヒモといっしょに上京してきたパンスケが、ショバのことから東京のパンスケと衝突する、おたがいヒモがそばにいたので、気がつよい。いざとなったらヒモ同士が対決して話をつけてくれる。と思っているからだ。

ところが、東京のヒモ(有島一郎)も大阪のヒモ(井上孝雄)もいっこうにスケ同士のケンカをとりあわない。
「タイトル・マツチだ。好きなようにやってみな」



と傍観の態度をとる。ヒモからつつ放されたスケ同士は、アタマへきて絶望的につくみあいのケンカをはじめ。組んずほぐれつ、上になり下になり格闘だ。髪をつかんでひっぱりまわす。ひっかく。なぐる。踏んづける。乱れたスカートから太モもあらわに地べたをころげまわる。相手の攻撃が急所に及んでくると、
「キヤーツ」

と絶望的な悲鳴をあげる。その悲鳴のなかには、ヒモに対するSOSのアピールもふくまれているのだ。だけれど、ヒモ同士は動かない。

建物に背をもたせ、ズボンのポケットに手をつっこみ、横ッちょにくわえたタバコのけむりをよけながら、冷然とそのメス同士の格闘を見物している。

そのとき、大阪と東京のヒモ同士のあいだには、ことばにはだしていわないけれど、かえって一種の共感のようなものさえわいてくるのだ。おたがいパンスケのヒモであることの哀感。なんとない自己けんおのようなもの。

それは同時にまた、からだを売るメスたち、ひいてはメス全体に対する不信、さげすみに通じているのだ。そして、そのメス同士があさましい同士討ちをやっているのをまのあたりにみて、一種の残忍な快感さえもおされてくる。こんなステキなショウはないというわけだ。

人生の競り合い

男性の心のなかには、たしかに女性対女性のたたかいを見てたのしむ心理が伏在している。

ひところはやった女のプロレスもそうだし、また現実の生活でも、しばしばそうしたドラマが演じられる。たとえば、あるオフィスで、ひとりの男性をめぐって、ふたりの女性が競り合いする。



そういう競り合い点のなかったときは、ふたりの女性に仲のよい友だち同士であり友情の美德さえ発揮しあっていたのに、ひとりの男性をはりあうようになってから、様相はガラリと一変する。

それまで入念につつしみやたしなみ、教養めいたもの、また友情というもので偽装されていた関係がくつがえり、心理的な恥部が露出してくる。それはまた肉体的な恥部にもつながってくる。因果なことには、女はそんなときにいよいよ女くさくなる。

こんなバーレスクの場面を設定してみよう。一つの巨大なファルロスがほおづえをついてねころんでいる。それをめぐってふたりの女が死闘を展開する。勝った女が、そのファルロスをつかむのにできるのだ。そして、やっとひとりの女がもうひとりの

女を動けなくなるまでやっつける。が、勝った女もヘトヘト、全身傷だらけになる。

傷だらけの栄光をかちえた彼女は、フラリと立ち上がり、ファルロスにちかづいて感激をこめて接吻する。ところが恐ろしいのは女の執念だ。やっつけられて身動きもできなくなったもうひとりの女が、ひん死のなかから立ちあがり、勝利者である女にちかづく。そうして、うしろから髪の毛をつかむと、

「おまえに甘い汁を吸われてたまるか」とばかりひきずり倒す。悲鳴をあげて倒れる女。そしてまた格闘。

ふたりの女はそれを繰り返す。たがいに相手がファルロスにとりつこうとすると、死力をつくしてそれを後ろからひきずり倒すのだ。ジェラシーのかたまりと化したふたりのたたかいは、いつはてるとも知れない。そして、ついにはふたりながら力つきてしまい、かきなりあったまま動かなくなってしまう。たがいに相手の髪の毛をつかんだ嫉妬のゼスチュアのままで――。

このとき、ゆっくり立ちあがった孤独なファルロスは、われかえるような哄笑とど

もに天空高くザーメンを噴きあげる。やがてそれは春雨のように動かなくなったふたりの女の上にふりそそぐ。

女は恥部を責める

ある男性がとても魅力的な『賞』の提供者になれるなら、そんな女同士のたたかいを演じさせることもそうむずかしいことではない。自分で加撃^{かげき}する責めとちがって、このほうは純粋な観賞者としての立場をたのしめる。女と女が呪い^{のろ}あう執念のすさまじさはとても男の女に対するそれとはくらべものにならない。女は女の恥部を知り、その弱点を知っている。だからその攻撃は適切で、したたかである。その応酬は、見た目にはとてもおもしろいショウになる。

女同士のたたかいできわめて特徴的なのは髪の毛に対する攻撃である。長い髪の毛が、つかんでくださいといわんばかりにそこにあるからつかむのだ、ということ以外に、髪の毛は女の泣きどころ、ということをおもしめ知っている。それをつかんで引き倒す動作は、嫉妬^{しと}と憎悪の表現としては、このうえもなく完ぺきである。

る。

そんなときの女は、ふだんは思いもよらないような、おそろしい力を発揮する。

一方、そうした攻撃にさらされる側の女は、それまで阿修羅^{あしゅら}のようにたけり狂っていたのが、たわいもなくなって泣きさけぶ。攻撃されるままである。

しかし、そうされながらも、まったく反撃を断念してしまうわけではない。手をのばし空をまさぐりながら、反撃のチャンスをつかもうとする。そして、その手がうまく相手の肉のやわらかい部分などをさぐりあてると、そこから猛然と反撃に転ずる。

女同士のケンカは、男同士のそれのように一撃でノックアウトするといった切れ味のキメ手はない。ジクジクと末梢^{まっしやう}的な攻撃の応酬に終始するところ、女性自身のセックスを思わせるものがある。だから、一つのケンカのうちに、攻撃のツキがおたがいになんべんも回ってきて、たたかいは互角の死闘の様相を呈する。そこがまたおもしろい見どころとなるわけである。

髪の毛に弱いことはいまのべたとおりだが、組みしかれる体勢にも女は弱い。

あたりまえの話だが、女は人に見せられない私生活の奥では、組みしかれるポーズが普遍的なものになっている。つまり、そのポーズは、女の恥部にむすびついていく。また、そのポーズは屈服をも意味している。だから、女同士のケンカの場合でも相手の下に組みしかれたり馬のりにされたりすると、それだけで絶望的な心理におそわれ、手も足も出ないような気分になる。それなら、それだけでケンカはケリがついてしまいうようなものだが、そうもいかない。窮鼠ネコを噛むのたぐいで、そうした追いつめられた絶望的な心理から、捨て身の反撃に出ることがあり、それが案外成功することが多いということだ。

ドンデン返し秘密

それまで馬のりになっていた女が、たあいもなくコロリとひっくりかえる。だれが目にもハッキリしていた優劣が、一瞬のうちに一変する。

これについて女の心理に、スポットをあててみる必要がある。

早い話が、女はもともと、その種のポ

ズになれていないのだ。もちろん、ラーゲの一種としては女上位というものがあるが、それはあくまで男女の了解のもとに成立する変則位の一種である。交合のパターンはあくまでその反対であり、そのことは先天的に女のなかにしみこんでいる。

女同士のケンカで、相手をうまく組みふせ、その上に馬のりになったとたん、その女は、自分が不慣れな高みにつきあげられたような、なんともいえない不安な心理にかられる。ガラにもない大役をふられたようなもので、おっかなびっくりだから、心の動きも手足の動きも、どうしてもちかんだものになってしまう。そこに、一挙に優位をくつがえされるスキがあるわけで、不思議なほどのモロさを発揮する。

こんなことを念頭において、女のケンカを主宰し、観察してみると、なんともいえないサディスチックな快感を満喫できる。

ハンデをつけて

このプレイをさらに発展させてみる。両足を縛って手だけでファイトさせるとか、おたがいにくしをするとか、肉体の機

能に制限を加えてみる。がんらいはたらくべきところがはたらかないのだから、攻撃はいきおいギクシャクしたものになる。がそのために憎悪はいっそうかきたてられ、それが動作をさらにギクシャクさせる。生体がおのずからもっている動きがどこかでチョン切られる結果になるから、そのプレイには奇妙なおかしみがわいてくる。

次に、そうした組み合わせをすこし変えて、男性自身がファイトに参加する場合を考えてみる。女性ふたりに男性ひとり。あるいは女性と男性の対一。

この対一の場合には、男女の腕力差を考えて適当にコマ落としをやる。つまり将棋なら飛車角落ちといったハンデを男性のほうにつける。きき腕をからだに縛りつけて動けないようにするとか、両足を縛ることにする。これに対し女性のほうは全身フリーだ。いくら男性でも、そうした不自由な状態でたたかうのは骨が折れる。つまり、そこで互角にちかい状態がもされてくるわけで、勝負におもしろい起伏がつく。

男性が足を緊縛されている場合には、女性はずとめてアウト・ファイトをこころみ、

機を見て接近しては加撃する。これに対し男性のほうは、女性を手もとにたぐりよせて、グラウンド技に持ちこもうと、カニのハサミのように大きく手をひろげながら機をうかがう。相手をかいこんでしまえばいくら下半身はきかなくても、上半身の腕力がものをいう。しかし、そうやって相手を扼しこむことはできても、それ以上のキメ手をふるうことはできない。ここに女性の側が反撃に出るチャンスがある。そしてこのゲームは、微妙な差で、男性の側が敗北することがこのましい。

男性が力つきたとき、女性は自分の勝利をたしかなものにするために、残された自由な部分である腕をも緊縛する。自分より力劣ったものに自分を緊縛させながら、その倒錯した敗北感を味わうのはたのしい。そんな不逞な敗北者である男性に対して女性は、勝利者の特権を行使し、さらに徹底的に相手を痛めつける。贈答用にデパートなどで売っているカスター（薬味）セツトなどを使うのもおもしろい。その薬味がどんな部分に使われるかは、賢明な読者の推察にまかせる。

プレイ③>

エス・エム・シン・フ・オ・ニ
の S M 交響楽

— ノ 瀬 悦 子



みだらなる暴力

あたしが、モドモアゼル・マスクに伴われて広間へ戻った時、残った五人の女たちは、もう皆、相当酔って乱れていました。彼女たちがどんなことを楽しんでいたかは、同性愛に経験のある人なら、もうおわかりと思いますが、この人たちは見せ比べながら、刺激を求めているのですから、とても露骨でした。なかでもチャイナ・スタイルのミセス・ツレのように、あられもないうめき声をあげている人すらいるのです。

しかし、あたしの存在に気づいたエレナは、カラミティ・ジェーンとの愛戯のために、皮製のカクテル・ドレスの肩吊りをずらせて、豊かな胸元を露出させているのを、かくそうともせず立ち上がると、
「さあ、皆さん、きょうのパーティーの目的である、新会員のお嬢さんをじゅうぶんにかわいがってあげましょうよ」

とわめきました。

「OK」

と異口同音に叫んだ五人の女は、マスク嬢を除いて、グルリとあたしのまわりを取り囲みました。カラミティ・ジェーンが、ぶんぶん酒くさい呼吸をはきながら、

「かわいい日本の娘さん、どう、この会の気分は？」

と言いいい、あたしの左腕をつかまえ、逆を取りました。

あたしがそれに抵抗しようとかからだを曲げた時、白いキュロットに黒いエナメル製の皮長靴をはいた女が、拍車のついた靴で、イヤというほど、あたしの向こうズネをけ上げました。

「アッ」

ドサリと、あたしは横転しました。ドシンと、あたしの腹の上に飛び乗りました。先の鋭い長靴ハイヒールで、あたしを踏みつけるのです。あたしは、この支那服を着た女が、パンティーもつけてないのを、この目で確かめました。

次は鞭のあらしです。もちろん、マスクとコルセットをつけてますから、たいして痛くはありません。快いシビレが、あたしを恍惚

＜乗馬服を着ての

カ プ リ オ
狂 熱



とさせるくらいです。

でも、だれかが、あたしのスカートのチャクに手をかけた時、ハッと思いました。ふたたびバタバタ足を動かし、必死にその手をのがれようと思いました。

しかし、両手を押えつけられ、胸の上に尻を乗せられたあたしは、ただもがくだけででした。スカートは、女たちの嬌声（きやうせい）とともに、ずるずる下方に下げられました。その次には、パンティーも……。

あたしは、われを忘れて、上に乗っていた女をはね返して立ち上がりました。

「アハハハハ」

エレナをはじめ女たちの哄笑（こうしょう）が、広間に響きました。その声は、悪意に満ちていました。エレナは、その指先に、あたしのパンティーをつまんで見せ、

「どう、これ。スッカリ濡れていますわ。お嬢さん、ご気分はいかが？」

キラキラ光る、酔ったひとみで、あたしのほうを見返りながら、パンティーを振る。

鞭をふるう陶醉

カッと、熱い血が頭に來たあたしは、やにわに、落ちていた犬鞭を取り上げて、だれか

れなしに、ムチの返礼をしたのです。

女たちは、悲鳴を上げて逃げ回ります。彼女らは、あたしへのプレイのために、だれもマスクをつけていませんし、エレナのように肩吊りをはがしたり、トレナーのように、上半身を全然露出している人もいるのです。

なかでもあたしの怒りの鞭は、シツヨウにエレナを追いました。日ごろのゴム長責めの恨みがこもっていたのでしょう。六インチもあるハイヒール長靴では、逃げるのも思うにまかせません。ついに壁ぎわに追いつめたあたしは、エレナの顔面めがけて力まかせに鞭をたたきつけました。

「ギャッ！」

と叫んで、エレナはくずれ落ちます。美しい顔面が見る見る赤くはれ上がります。

もう一度、もう一度、エレナがつっ伏してうずくまるまで、あたしは鞭をふるいました。

フトわれに戻ると、あたしは、太ももの内側に冷たいものがタラタラ走るのを覚えませんでした。もう恥ずかしい気持ちなんかありませんでした。激しい陶酔的な気持ちでいっぱいでした。そして、さきほどのマスク嬢とちよっとしたプレイの続きをしたい気持ちが起こってきました。

あたしは、マスク嬢を求めました。彼女は、壁ぎわにもたれて、放心したようにあたしのほうを見つめています。

あたしは、泣きくずれているエレナをまたいで彼女に近寄り、いきなりくちびるを吸いました。マスク嬢の胸は大きくあえぎます。

あたしは、さきほど彼女にしてやったのと

同じ行為を、彼女にしました。抱き合っているのが、とても困難なくらいのうずきが、両足に伝わり、思わず、

「もっと！ もっと深く」

とうめきながら、彼女のグロテスクな顔をよく見ようとして、顔面に指をかけた瞬間です。スルリと、醜い赤アザが、彼女の半顔か



ら離れ落ちたのです。

「まあ！」

あたしは、全身がとろけるような官能の陶酔に酔いながらも、彼女のその美しさに見とれるくらい、それは大きなショックでした。次の瞬間、あたしは何もかも忘れて、マスク嬢をその場に押し倒してしまったのです。

新しい女主人

錯乱と快楽に終始した夜会の後、あたしはエレナに解雇を申し渡されました。エレナはあれ以後、極度にあたしを嫌悪して、寄せつけませんでした。そして、ちょうど、一週間め、彼女の傷がすっかり癒えた時、彼女はあたしに向かって、

「悦子、今晚かぎり、あたしの家から出て行ってください。もう必要でないから」

「……………」

「でも、あなたをたいへんほしがっている人がいるの。その人のところで働いてちょうだい。たぶん、お給料もいいはずだわ。今夜、夕食後、あたしの部屋に来るように」

と言が残して、久しぶりに乗馬服に着替えて外出しました。ほっそりくびれた胴、ふくらんだキュロット、みがき抜いた皮長靴、そ



れも、きょうでおしまいだと思ってあたしはセンチになって、ゴム長をはいて、シャワーを浴びながら、浴場をそうじしました。

さて、その夜、あたしは、エレナに伴われて、新しい雇い主の家を訪れました。雇い主は、だれあろう、マスク嬢だったのです。

彼女はヒルデガルト・モルガンと申しました。（あたしは、これから彼女のことを、ミス・モルガンと申します。）

エレナは、彼女にあたしを引き合わせるのと、すぐ帰りました。

あたしは、先夜狂態の限りをつくしたので、さすがにてれくさく、まったくマスクでもかけたい気持ちでした。

モルガンは、先夜と打って変わって、

「朝の八時から夜の八時までが勤務です。その間に、あなたにしていたくことは、朝の十時に、あたしの部屋のカーテンをあけにくること。それから朝食、午後の日光浴のあとで美容体操をする時、あたしにてつたうこと、それから、夕食の相伴（しょうばん）をすること、それくらいよ。それから週に二度、乗馬に出かけます。その時は、供をすること、わかった？」

「わかりました」

「今晚はもうおそいから、部屋に引き取るがいいわ。カギはここに。部屋の中のものはいっさい、あなたが使ってよろしい。というより、勤務中は、あなたの私物を使わないほう

「がいいの。わかった？」

「わかりました。お嬢様」

あたしは、うやうやしく頭を下げました。まったくそう言わざるを得ないくらい、高い気品と、毅然とした態度でした。(どうしてこの人が、あたしにクリーニングしたのだろう?)

皮だらけの部屋

あたしのあてがわれた女中部屋^{じよちゆうぐや}というのは、裏庭をへだてた土蔵でした。ミス・モルガンの邸宅は、大きな庭園内に建てられた日本風の屋敷で、彼女は、純洋式に建てられた応接室を例のパーティーに、二階の一部を洋風に改造して自分の部屋に、その他はほとんど、締めたきりで、ふだんは、使用しておりませんでした。

この大きな土蔵は、夏でもひんやりしているくらい壁が厚く、とびらも、大きなキリ戸のはいった三重ドアの本格的なものでしたから、梅雨時のむし暑いころでも、本宅よりも快適でした。

あたしの新しい女中部屋は、全くレザー・フェチのミス・モルガンの趣味で満ち満ちしていました。重いドアを押してはいると、プ

ンと鼻をつく皮革のにおい。それに、彼女の愛用しているシャネルの香水(あとでわかったのですが、この部屋は以前、モルガン自身で使用していたのです)、それにも増してあたしを驚かしたのは、床に敷きつめた豪華な皮張りのマットレスです。

壁ぎわには大きなロッカーが二つ、一つは衣装戸だな、一つは、靴入れです。

ここにも、彼女の趣味が濃厚に出ています。色彩もつややかな皮のブラウス、おそらく脚線美が出るくらい、びっちりするような皮のタイツ、それに、電灯の光にきらきら輝く純白の皮のイヴニング・ドレス、はげばものつけ根までほくろ黒皮の長手袋などが、あたしの目を刺激します。

靴のロッカーは、靴フェチのあたしをさらに喜ばせました。(このころは、エレナの影響で、あたしもすっかり靴フェチになり、つんのめるように高いハイヒールをはいたり、皮長靴に足を入れないと落ちつけない日々が続いていました。)

だから、このロッカーの中の一ダース以上のハイヒールや、特殊長靴を見た時、思わず、そのなかの一足を取り上げて接吻したくらいでした。

夜の食事衣装

こうしてあたしの第二のメイド生活が始まりました。エレナの時と違って、あたしたちは、お互いにレスボスであり、長靴フェチであり、マゾ・サドの関係がはじめからわかっているだけに、日々の生活は、ふつうから考へるとかなり奇妙であり、また深刻な不可解なものでした。

たとえば、あたしたちがほとんど毎夜のように繰り返すディナー・タイムと就寝前の美容体操について述べてみましょう。

午後七時、それはあたしたち、主人とメイドだけが盛装して、ふたりだけで夜の食事にはいる時間なのです。

あたしたちは昼間、午後一時過ぎからほとんど二時間ばかり、おのおのの個室で睡眠をとり、夜の生活に備えます。

ミス・モルガンは、昼寝からさめると入浴し、そのあと、三十分ぐらい、あたしにからだを踏ませるのです。

この時、あたしは、彼女に苦痛を与えないために、太もものつけ根まであるゴム長をはき、鴨居にぶら下がって、彼女に体重をかけないようにして、彼女の全身をふみます。

汗ぐっしょりになったあたしたちは、そのままの姿で、料理のしたくをし、それから入浴します。入浴後あたしは、全身にオードコロンをすり込み、イヴニング・ドレスに着かえるのです。

この時は、ミス・モルガンの命令どおり、からだには何もつけず、そのまま純白の皮のイヴニングを着込みます。そして、皮の長手袋、靴は、カカトが六インチもある、プラスチックの透明のハイヒールか、レース・ハイヒール・ブーツをはきます。

このイヴニングは、前がほとんど、太ももがあらわれるくらい割れていますので、エナメル黒皮長靴が、歩くたびに、大きく現われると、とても魅惑的なのです。

ただし、このレース・ブーツは、太ももまでもあるので、びったり締め上げると、ろくにひざもまがらず、ほとんど棒状になるので、その点窮屈でした。

一方、ミス・モルガンのほうは、プリンス・スタイルで、黄金色に輝くブラジャー・コルセットに、白皮のタイツ、それに、カカトの高い柔らかい皮長靴でした。

こうした、マゾ・サド、所をかえた衣装をつけて、夜の食事をとるのでした。

美容体操の仕上げ

ブランドイを好むミス・モルガン、ビールをガブ飲みするあたし。このふたりが、相当酔っぱらってから演じるのが、美容体操。

まず、ミス・モルガンが、あたしに裸体を要求します。この時までには、あたしは相当乱れていて、たいていイヴニングの肩ひもをはずして乳ぶさを半分ぐらい露出しているのがふつうでした。元来、露出癖の強いあたしは、彼女の要求に応じて、なんのためらいもなく、裸になります。

身につけているのは、長手袋と、太ももまであるエナメル長靴という、あられもない姿に平気でなれるのも、あたしが、ミス・モルガンを愛しているからであり、激しい愛の表現でもあるのです。

ミス・モルガンは、皮のマスクをつけ、あたしにすりよってきて、あたしとダンスを始めます。一曲か二曲、それも、スローな曲。

あたしは、次いで、皮鞭^{かわ}をとって、彼女の背後に立ちます。皮衣装の上から、思いきり鞭のあらし！

そして、彼女の快楽にあえぐ悲鳴をきいているあたしも、次第に熱してきます。

ひとわたり彼女をいじめると、あたしは、彼女の皮衣装をはぎとります。そして、長靴の代わりに六インチのハイヒールをはかせ、皮ひもでその足首を縛ります。そして今度は尻打ちです。ゴムのイボイボのついたヘア・ブラシで尻を打ち、股間をくすぐります。

苦痛にあえぐ彼女、身をくねらせても、足首を縛ってあるので、どうにもなりません。

そうこうしているうちに、ミス・モルガンはすっかり陶醉してあたしを求めます。が、あたしはなかなか許しません、でも、あたし自身熱していることがわかったと、プレイをやめ、立ったまま、次の行動に移ります。

あたしの指先が、ミス・モルガンのポニーテールの髪をひっぱり、皮マスクをかきむしる時、あたしの口から、初めて、楽しいうめきが漏れます。

そして、この美容体操の仕上げは、バス・ルームで行ないます。ビールで腹のふくれたあたしは、生理的欲求を、モルガンの顔の上に浴びせるのです。モルガンは、あたしの舌の奉仕と、なまあたの液の放出によって、絶叫しながら、バス・ルームの床にのたうつのです。時には脱糞すらするくらいの興奮でした。

灸をすえる楽しさ

白い肌にジリジリと音を立てると

彼女の顔が苦しさにゆがんでゆく。

笠 原 光 夫

お灸の思い出

もちろん、ぼくがあんな非科学的なものを信じている訳ではないんですよ。……でも、こういったら、それを専門の職業にしている人たちからお叱りを受けるかも知れない。

・お灸の話である。このお灸は、ちゃんと日本では認められた療法として国家試験の制度まであるのですから……。

しかしぼくは、あのお灸とは、むしろ、日本古来からの私的な刑罰としての効果しか認めてはいない。

ぼくの生いたった町（四国の寂しい漁村だが）では、科学の進んだ今日でも、お灸が信じられ、何かといえば、罰と健康法を兼ねて子供に灸をすえることが流行っている。

ひとりがしっかり動けないように抱き締め他のひとりがモグサと線香を持って後ろに立つと、

「あと、もう三つでおしまいや、こんなやいとぐらいなんやね」と身柱に灸をすえていた。

ぼくは、お灸の洗礼をうけたことがないので、どんなに熱いのか知らないが、だれでも声かぎり泣き叫び、手足をばたばたさせている。たいていふたりがかりであるが、母親ひとりで据える場合は、馬乗りのにりかかって据える。子供のほうは、声もかすれ、泣き声さえろくに出不いでいる。

また、学校で海水浴などに行って人の背中を見ると、十人のうち五人までは、なまなましい灸跡があり、なかには、ただれてウミを持っているのさえある。

こうした光景を目ごろまのあたり見て、胸をドキンドキンさせながら、自分がすえられているような気持ちになって、ある時など、冷や汗がからだじゅういっぱいに流れていた。

だけど、ぼくの優しい母は、少しぐらいヤンチャをしても、灸罰を与えてくれなかった。二、三度続けて夜尿をはずしたとき、

「おちんちの上に三つだけやいとをすえてあげよう、そしたらなおる。熱くないよう小さいのをすえてあげるよって」

と宣告はされたが刑の執行には至らなかった。



白い肌にお

た。いま思うと、恐ろしくもあったが、残念でしかたがない。

それから自慰を覚えるようになってからは美しいやんごとなき人に取りひしがれ、灸をされている痛さ、熱さ、苦しさを夢想しては満足していた。

そうして、こっそり人の灸跡を見ては、自分がすえられているかのような境地に到達した。ことに奇麗な女の肌に、目玉のような真新しい灸の跡を見た時などは、自分でも驚く

くらいの衝撃をうけた。

灸をすえたがる女

この時分に、本当の刑罰の苦しさを実験していたら、あるいは、灸と聞いただけでもおびえていたかもしれない。こうしたほうが、本当にお灸をすえられたのは、二十歳になってからのことであった。

それは、大学に通うようになって、知り合いの家に下宿しているときのこと、その家

の夫人によって、心ひそかな願いが達せられた。この家の主人というのが、ある大きな土建会社の技師で、ぼくとは句作の友であった。

一年のうち三分の二は現場に出張して、絶えず留守勝ちで、あとは夫人と十五歳になる親戚の豊子という女の子とふたりきりで、女ばかりではあまり寂しいから二階を借りてくれということになって、その家の家族のひとりに加わったわけである。



ところが、つい半年ほど前に、主人の技師は、現場の事故で忽然とこの世を去り、四十にはまだ手のとどかないこの夫人は、世間には隠しているで、もとは金沢で芸者をしていたそう、それだけにちょっとあかぬけたところがあった、背はやや高く、日本鬘がよく似合った。

性格的にはヒステリックなところもあってそれにはこんな話のあることも聞いた。

出張先で主人に女ができて、旅先が長くなりがちだという話を聞きこみ、くやしいとばかり現場に乗り込み、ダイナマイトを持ち出して、主人も女もあたしもいっしょに死んでしまふのだとび出したが、一足さきに知らせをうけた主人は、驚いて裏木戸からはだしでとび出し、間一髪ことなきを得たということだ。

平常は実にしとやかで、まめまめしく世話をしてくれ、毎日食事がすむと、長火ばちをはさんで芝居の話や芸者の話をきかせてくれる。

われわれ学生にとっては、こういった女性は何一つ魅力的でないものではなく、楽しい小半時であった。試験もやっと済んでホッとしていた時、

「まあ、ほんとにやつれなされたのね、勉強が過ぎたのでしょう。疲れのとれるお灸すえてあげましょう。ほんとにいい気持ちで、スーッとしますよ」

夫人は、何かというと、人に灸をすえたがり、豊ちゃんなど、ときどき被害をこうむるようであった。

主人の死後、灸点師になろうという下心があった、その方面を専門に研究しているということだった。

目の前で若い女が

「主人なんかもいやがるようにしていました、家に帰ってくると、おさえつけてすえてやりますの」

といったふうには、実に熱心で、なんだか催眠術にかかったような気持ちになる。

「じゃあ、やってもらいますかな」

と答えると、夫人はまことに満足そうな面もちであった。

「豊ちゃん、おまえからさきにすえてあげよう。さ、こっちへいらっしゃい。この子も、つい二、三日前から毎晩すえてやっていますのよ」

ぼくがいるので気まりが悪いのか、

「おばさん」

とためらっている。

「なんだね、おまえさん。ぐずぐずしないで、早くいらっしゃい」

と夫人の前に背を向けてすわらせられ、両肌をぬがされた。成熟しようとする女の肌が、いかに美しいか、見ていて、ぼくは思わず赤くなった。

夫人は、灸点師希望者であるだけに、なれたものである。モグサを器用にひねり、指をしめして背中にすえ、火をつけると、煙がゆらぎ、モグサのなつかしいにおいがただよってくる。

豊ちゃんとは見ると、両手でひざがしらをしっかりと押え、肩に、あるだけの力を入れ、目をつむって熱さをこらえている。

さすがに声は立てないが、からだじゅうをこまかくふるわせている。

次のモグサに火がついた。目はいよいよ堅く閉じ、口は一文字に食いしばっている。泣き出す一歩でまえという形相である。

「豊ちゃん、このくらい、熱くないでしょ」夫人はいっこう平気で、こんなことを話しかける。

豊ちゃんは、返事どころか、フウフウいっ

ている。

うしろに回ってみると、肩のカイガラ骨の下から、左と右に四ツずつ、黒豆のようにはれ上がり、ぐるりはポツと傘を着たようにまっかになっている。見るからにむごたらしく、今度ぼくだと思つと、二階へ逃げて行きたい気持ちになる。

その恐ろしさの反面、子供のときからひそかにこい願っていた願望が、十数年ぶりでとげられるのかと思うと、胸が高鳴り、自分の心臓の動気が聞こえるようで、夫人にもそれが聞こえるのではないかと心配した。

「豊ちゃん、あなたがあまり熱がるから、家間さんまでがこわがっていらっしゃるわ。さあ、家間さん、こちらへいらっしゃい。しんぼうのできなような大きなお灸はすえやしませんから安心してね」



「家間さん。本当におすえになるの、おぼさんのお灸は熱いわよ」

「さあ、肌を脱ぎなさい。豊ちゃん、いらんことを言わないで、あなたもおてつだいしてね」

夫人は、豊ちゃんとふたりで、両肌を脱がせた。

熱痛い感覚

「着物を着ていらっしゃるとお瘦せになっているようでもやっぱり男ね、太っていらっしゃるわ」

天花粉をポンポンと背中に打ち、平手でその上をなで、両手に力を入れて両肩を押し、「こっているわ」

と、そこに黒点をつける。ひやっとして、くすぐったいような、なんともいえない心持ちである。

夫人は、筆を口にくわえて、背中を上から下へ押しながら、六カ所に点をつけた。

「さあ、はじめますよ」

新しい線香に火がつけられた。

いまかいまかと目をつむり、豊ちゃんがしていたように、両手にあるだけの力を込める。

豊ちゃんは、いつでもおばさんのおてつだいのできるようにすりよっている。

プーンとモグサのにおいがしたかと思うと、ビリビリと、とび上がるほど熱く、「アッ」と声をたてたせつな、火が消えたらしい。

「なんですよ、このくらいのお灸」

夫人は、人さし指と中指で灸の両わきをしっかりと押してくれる。ホッと息を入れたとき、また次の灸が肌に食い込むように刺す。

「おばさん、家間さんのお灸は小さいのねえ。もっと大きなのをすえてあげなさいよ。今度はこれ」と、大豆ぐらいに堅くひねったモグサを出す。

「豊ちゃん、急にえらくなったのね。家間さんが済んだら、これを豊ちゃんにすえてあげるわ、ねえ——」

「いやよ、いやよう、おばさんのいじ悪。だって、家間さんのあまり小さいんだもの、男のくせに」

本当にすえられたらたいへんと思ったのだろう、逃げるようにして部屋を出て行った。

せっかくすえ出したのだから、一週間は続けなくちゃと、言われたばくは、毎晩、食事が終わって寝るまでの一ときが、実は何より楽しく、日が暮れるのを待ちかねた。

夫人はさすがに灸をすえる名人であり。灸穴^{キツ}のこともひととお心得ていた。へたな灸点^{キツ}など、夫人の足もとにも及ばないし、また、夫人もそれだけ自信をもっているようであった。点の数も毎日ふえ、一日二カ所ずつ新しい点がついた。そのかわり、休む点もでき、はじめの一火、二火が済むと、あとはよほど楽で、とび上がるようなこともなかった。

しかし、新しい点は、かなりこたえた。

なかでもひどかったのは、足の親指の先、爪と皮膚の間にすえられた灸で、その熱痛さといったら、それこそ本当にとび上がった。爪と皮膚の間へ木綿針をブスリと突き刺された、あの痛さだ。

だいぶ灸になれてからであったが、思わず声をあげた。そうしたときの夫人は、会心のえみをもらした。そして、火がつくと消えるまで、ぼくの指を強く持って上下にこまかく動かし、熱痛をまぎらわしてくれた。

「熱かったでしょう。息絶えた人でも、この点に小指大の灸を幾つもすえていると、息を吹きかえすといわれていますのよ」

もだえる女体

やがて暑中休暇がきて、豊ちゃんは、故郷^{ふるさと}

へ帰って行った。家の中は急にひっそりして、夫人とぼくとふたりきり、灸すえもあれっきり忘れたようになっていた。ぼくも勉強が一段落つけば郷里へ帰ることにしていた。

そうしたある晩、小用のため下へ降りるとおばさんの部屋で、ウーム、ウームとうめき声がする。あまり苦しそうなので、

「おばさん、どこか悪いの？」

襖^{ふすま}をあけると、目をつるし上げて苦しがりている。胃がいれんでも起こしているのではないか。あまり苦しみがひどいので、しばらく胸を押えてみていたが、なおりそうもない。「しんぼうしていらっしやい、いま、お医者さんを呼んできてあげるから、注射でも打っておもらいなさい」

立ちかけると、

「よし、いいの……お灸、お灸をすえて」半分うわごとのようにうめくので、大急ぎで見覚えのある灸箱を取り出した。

夫人は、夢の中にある人のように、指で「ここ」とみぞおちの下一寸ぐらいのところを押す。さらにその左右に間をおいて二点つこう三点と、ヘソの下一寸ぐらいのところの一点しるしをつけさせ、少し大きめにひねったモグサを「これすえて」と出す。豊ちゃんでも

いてくれたら、てつだわせられるのにと、すえながら心細くなる。

「もっとよ……もっとよ」

と命ぜられるまま、五十火もすえたらうか。お腹の中でグーグーと音をたてて、それがぼくにも聞こえた。

「ありがとう、だいぶ落ちついてきたわ」

おばさんの目には涙が浮かんでいた。

「ほんとにすみませんでした、もう一つ二つすえてね」といって、おヘソの中を自分で押して、「ここにねえ」という。

とっさの場合であり、ぼくも裸に浴衣の細帯姿で、夫人もねまき一枚で、しかもおヘソの中に灸を押し込んで火をつけるのだ。

書くといけないようだが、そう手ぎわよくいくものではない。ぼくも夫人以上にあわてており、うまくつけようと思えばこそむずかしいので、大きいのを少しぐらいゆがんでもかまわずすえれば、なんでもないが、すえられるほうは二倍にも三倍にも苦しいわけだ。

「いいのよ、もっと、もっと……早く」

というので、それならばとつづけざまに、かまわずすえる。夫人はいかにも満足そうですっかりけいれんがおさまったらしい。

「おヘソはそのくらいでいいの、今度はここ」

と腹巻きを取って下腹部を指でおさえて、「早くすえてちょうだい、本当に落ちついてきました。そこがすんだら寝かしてあげるわ、いいでしょう」

人の運命というものは、思いがけないところで思いがけない結果を見るもので、夫人によって心ひそかの灸をすえられる願望がかなえられて、言い知れない悦慮の境地を味わい、今また思いがけないできごとに出会って、へどもどしているのである。

この機会をのがしてはと心に鞭を打ち、言われるままにモグサをつけた。

「ダメねえ。そんなにこわがらないでもいいでしょう、もっと思いきったのをすえてちょうだい」

このくらいでどうと、豆粒ぐらいに堅くひねったモグサを出すと、じれったそうに、親指ほどもあるモグサをピラミット型にもんでこれをと出す。夫人の顔を見ると、三昧の境地にあるがごく陶然たるものがあつた。

白い肌に紫の煙

こうして、ぼくは、灸にそれ以外の楽しみのあることを知った。やっぱり、自分ですえてもらうのより、ひとを、それも、もっぱら

女性にすえるのが、たまらなくぼくの情感を誘っているのだということに気がついた。

白い肌に紫色の煙がまつわりつくようにのぼっていくと、ジリジリとモグサが燃えて、彼女の顔がゆがんでくる。それと同時に、ぼくのかからだの中を、たまらない快感がメラメラと突き抜けて行くような思いがする。

ぼくはそう思うと、もう、おばさんひとりでだけのからだでは耐えられなくなった。もっと若くて、ハリキッた白い肌がほしくなった。友人の細君や、妹、知り合いの女子事務員と、次から次へと説得してやらしてもらおうようになった。

「家間さん、あなたも灸点師になるつもり」おばさんにすら皮肉を言われるようになってきたが……。もうぼくは夢中だ。もちろん灸点師なんかになるつもりはない。

ただ、あのすまし返っているような女性の肌に火をつける、それだけが楽しいのだ。

実は、ほんとのことを言うと、モグサなんか火をつけるのがめんどくさいぐらい、いっそ、火のついた線香をそのまま、直接肌に押しつけて、ジュジュと焼けこがしてみたらどんなに楽しいだろうか……。そのうちきくと、ぼくはそれを実行に移すことだろう。

食塩水、空気浣腸と、あらゆる浣腸が、そこ
かで、一対ずつの男女によって行なわれた。／



浣腸同好会5つのプレイ

簡野千代子

拝啓、貴女ますますご清栄の段大慶至
極に存じます。さて今般、本会において
は、嚴重なる調査の結果、貴女を正会員
として適當と認めることとなりました。
つきましては、きたる八月十日夜の夏季
例会に、万障お繰り合わせの上ご出席く
ださいますようご案内申し上げます。

記

- 一、期日 八月十日 午後六時
- 一、場所 國際觀光ホテルロビー
- 一、服装 同封のバッジを必ず胸につけること。

浣腸同好会本部事務局 印

簡野千代子様

このような案内状が送られてきたのは、梅

グリセリン、石けん水、
では、クラブ員環視のな



雨もあがった七月二十日のことでした。いたい、浣腸同好会とはなんでしょう。もちろん、あたしは浣腸マニアですし、ひそかに夜ごと浣腸を楽しみ、浣腸に関する文献、器具写真などのコレクションも、人後には落ちないつもり。でも、若い乙女として、だれに、あたしは浣腸マニアですなどと口にする訳がありません。にもかかわらず、どうしてあたしのところに浣腸同好会などというところから案内状がくるのでしょうか。でも、心にひかれるものがあった、あたしは、八月十日を心待ちにしたのでした。

現われた美貌の女性

その日は、朝から真夏の日が照りつけ、午

後は、三十四度という本年最高の気温を記録しました。でも、あたしは、白のワンピースにサンダルといういでたちで、国際観光ホテルに、タクシーを乗りつけました。

ロビーの一隅に腰をおろしたのは、六時十分前でした。待つことしばし、うしろから、「簡野様でいらっしゃいますね、あたくし同好会の山城と申します。お見知りおきを」声をかけられて、ハッとしてふり返れば、黒のサングラスをかけているので、はっきりとはわからないが、三十になるかならずの、すらっとした美貌の女性だけに、まずホッと一安心するのでした。

「あの、あたくし、簡野でございますが、お手紙くださいましたのは——」

「ええ、あたくしたちの会ですよ。突然でびっくりなさったでしょう。でも、とても楽しい集まりなのよ。気の合った者ばかり。趣味を同じくする者、だれにも知られないで、そっと趣味を満喫するなんて、すばらしいことだと思いませんか。さ、七時から始まりますのよ、ご案内いたしますわ。車を待たせてありますから、ごいっしょに、どうぞ」

なるほど、ホテルの前には、ポンティアックが人待ち顔にとまっていた。身軽に運転台にすべり込んだ山城さんの運転で、車は矢のように、皇居のお濠端を渋谷方面さして進んでゆきます。

「今のうちにお約束を申ししておきますわね。うちの会は、だれもお互いに名まえも身分も何も知ってはいけないことになっています。ですから、今から、あなたは簡野さんではなくて、Wの5となってください。あなたのことを知っているのはあたしだけ。わかりました？」

山城さんの説明を夢中になって一語も聞きもらすまいとするうち、どこをどう走ったのか、とにかく山の手の豪壮な邸宅であることだけは確かな、洋風二階建ての一室に、あたしは導かれました。

マスクをかけて例席

「さ、いいですか。個人の秘密を堅く守るために、個人的なお話は絶対になさらないことを誓ってください。それから、顔をかくすために、皆さん、このマスクを着けていただきます。これで、だれがだれかわからないでしょう。あなたはW5号、この番号札を首にかけてくださいね」

やはりマスクをかけた山城さんに連れられて階段をおりる。地下室らしい。

ドアを明けて連れられた部屋には、もう来会者が、あちこちのイスに着いているように思われるのですが、壁にある赤ランプ一つのこの部屋は、ほとんどまっくらで、何がなんだかわかりません。

「皆様、お待ちいたしました。新入会者、W5号をご紹介します。と申ししても会則どおり、女子大出の才媛と申し上げるにとどめまして、さっそく例会にはいることといたします」

あたしは、おずおずと、そばのソファに腰をおろしました。まっくらと思ったのも、目がなれるに従って、わずか一個の赤ランプの光に、この部屋全体の様子がおぼろげながら

わかってきました。

およそ二十坪ぐらいはあるでしょうか、四方は黒いどんちゅうのようなものでおおわれ床はモザイク・タイルです。部屋の中央には一台のベッドが置かれ、よく見れば診察台、それも、ちょうど産婦人科で使うもののようなです。ソファがあちこちに置かれ、十人ほどの人が、ソファに身をうずめているようです。だれもひと言も発しません。だれかが緊張にフーッとため息をつくのが、はっきりわかる静寂さ。冷房が適当にきいて、温度湿度とも申し分ない快適さです。

「では、例会をはじめます。今夜は、一対一のプレイといたします。用具は、いつものとおり診察台の下にございます。グリセリン、石けん水、食塩水、グリセリン浣腸器、イルリガートル、エネマシリンジ、それに、鞭、さるぐつわ、おむつに、おむつカバー、差し込み便器、および緊縛用皮バンド、でございます。

さて、今夜の趣向は、先に申しましたとおり、一対一。組み合わせはM1号とW1号、M2号とW2号、以下その順で。では、M1号様とW1号様、どうぞお立ちになって、ジャンケンをしてください。MとWを代表し

て、勝った組が施術者、負けた組は被施術者といえます。どうぞ」

ふたり立ち上がる気はい。アッ、思わずもあたしは声をあげるところでした。一方は男性なのです、そうです、Mとはまぎれもなく男性です。

「ジャンケン、ポン」

「勝った」といったのは男の声です。

「あら、ごめんなさいね、負けましたわ」

一瞬、どよめきが起こって、

「では決まりました。今夜は男性側が女性側に浣腸することといたします。持ち時間は一組三十分以内。では、始めていただきます。どうぞ」

あたしは、胸がどきどきして、これから始まろうとする浣腸シーンに、もう手が汗でぬるぬるしてくるのを、どうすることもできません。

グリセリン二本を

W1号が診察台に上がります。瞬間、ライトがパッとベッドだけを照らします。ベッドの周辺だけがあかあかと照らし出されますがあたしたち観賞者のほうは依然として暗く、お互いの様子もよくわかりません。

「さあ、両手をのばして、縛りますよ。いいですか」

M1号にうながされて、両手はベッドに皮バンドで縛りつけられ、スラックスをぬがされ、パンティーがとられ、両足首は診察台の足乗せに皮バンドで固定されます。

M1号が台の横の取っ手をグルグルとまわすと、足乗せは静かに上がって、おお、みごとなまっ白い臀部が、あかあかと照明の下に照らし出されて来るではありませんか。

「おお」

一瞬、ため息ともつかぬ嘆息が、一同から起こります。W1号は観念しているのか、声一つあげません。

M1号はやおら、グリセリン浣腸器をとりあげると、グリセリンと水を半々に、こちらからみると恐らく五〇〇C入りと思われるのに、いっばいにすい上げました。

「さあ、いきますよ、いいですか、お腹に力を入れないで。そら」

「ウッ」

嘴管が挿入されたようです。わずかに身もだえする様子。一分、二分、静寂。

「どうですか？」

「ええ、あの、きいてきましたわ。何分がま

んすればよろしいのでしょうか」

「そうですね、十分にしましょう」

三分、四分と時間が経過するが、しわぶき一つなく、全部の目がただ一点、下半身を裸にむかれたW1号を注視しています。

「今、何分でしょうか」

「六分ですね、がまんできますか」

「ええ、でも、もう苦しくて」

「では、このへんで、もう一本浣腸しましょう」

「えッ。いけませんわ。とても、もうがまんできませんわ」

「そんなことないでしょう、そら……」

「ダメです、ダメ、許してください」

「ダダをこねないで……そうら、どう、苦しい？」

「あ、あ、もうダメです、許して、お願い、もれそうだわ。とても、もうがまんが……」

両手足は皮バンドでしっかり縛られているだけに、まっ白い腹部が激しく上下に波打っているのは、排便意をけんめいにこらえている証拠でしょう。

「あと二分……どうしました、そんなに痛いのですか」

「あ、あ……もう、とても……苦しい、許し

て……便器、便器……ね、あ、あーッ」

瞬間、ライトが消えて、便の下る音が、静寂を破ります。どこから出て来たのか、看護婦さんのような人がふたり、差し込み便器をあてて始末しているらしい様子が、まっくらななかに、ボーッとかすんでみえます。

もうM1号は席に戻り、W1号もやっとベッドから解放されて、ふらつく足どりで席に帰った様子。われにかえったあたしの両手は堅く握られていました。

鞭とイルリガートル

次にベッドに上がったW2号さんは、M2号氏に命ぜられるままに、うつ伏せになりました。近よったM2号氏は、まずW2号さんの両手をそれぞれ、ベッドの端の皮バンドに縛りつけます。

次に、両ひざを折り曲げさせて、お尻を高く突き出すように命じ、麻縄で、折り曲げたひざとベッドをしっかりと縛ったのでした。ちょうど、雑巾がけをするような格好。

荒々しくスカートとパンティーがずりさげられると、ああ、丸々とした臀部が、高く突き出されて、それに当たるライトがまばゆく光るのでした。

M2号が近よって、頭をグッとベッドに押えつけながら、

「もっと尻をあげろ」と命じます。

「こら、上げないか、ぶたれたいのか」

ピシッ！ 鞭がなって、一条、二条、まっ

白な臀部の二つの山に、赤い線が走ります。

「ああッ、痛ッ」

悲鳴とともに、折り曲げられたひざが、ベッドに深くもぐって、突き上げられたお尻に、

「よし、そうだ」

イルリガートルの嘴管が挿入されます。

一分、二分、まっ黒いゴム管が静かにゆれて、液面が次第次第に下がります。もう八〇〇CCも注入されたでしょうか。

「ああ、もう許して」

身もだえするW2号。

「あと、もう少し、がまんするんだ」

冷酷に宣言するM2号。

その間にも、メートルも高くつられたイルリガートルからは、情け容赦もなく、液は静かに注入されます。ああ、とうとう全部注入されてしまいました。

「どうです、もう少し入れましょうか」

「いや、いや。もう、とてもがまんできませ

んわ」

「よく平気でそんなことが言えますね、それならだいじょうぶ、じゃ、もう少し……」

やっとからになったイルリガートルには、

M2号の手で、さらに五〇〇CCが追加されます。

「ああ、もうやめて、やめて……」

叫べども、液面は次第に下がってゆきます。一二〇〇、一三〇〇――

「ああ、ああ」

動くに動けないひざをすり合わせ、突き出された尻をゆり動かしながら、非情な流入にたえてゆくW2号。

全部の注入が終わった瞬間、ライトは消えて、席に戻るM2号。介添えの女の人が走り寄って、W2号を部屋のすみのカーテンの陰に導き入れました。

エネマで三〇〇〇

「M3号さん、W3号さんを誘導願います」

また、室内がざわめいて、右のほうのイスからW3号と呼ばれた女の人と、左手のソファからM3号さんが立ち上がります。マスクが、年のころさえもわからないようにしています。

「裸になって、あおむけに寝てください。エネマシリンジを使いますが、よろしいですか」

「ハイ、けっこうでございます。お手やわらかに」

裸になったW3号は、前のふたり同様、両手両足をベッドに固定されました。

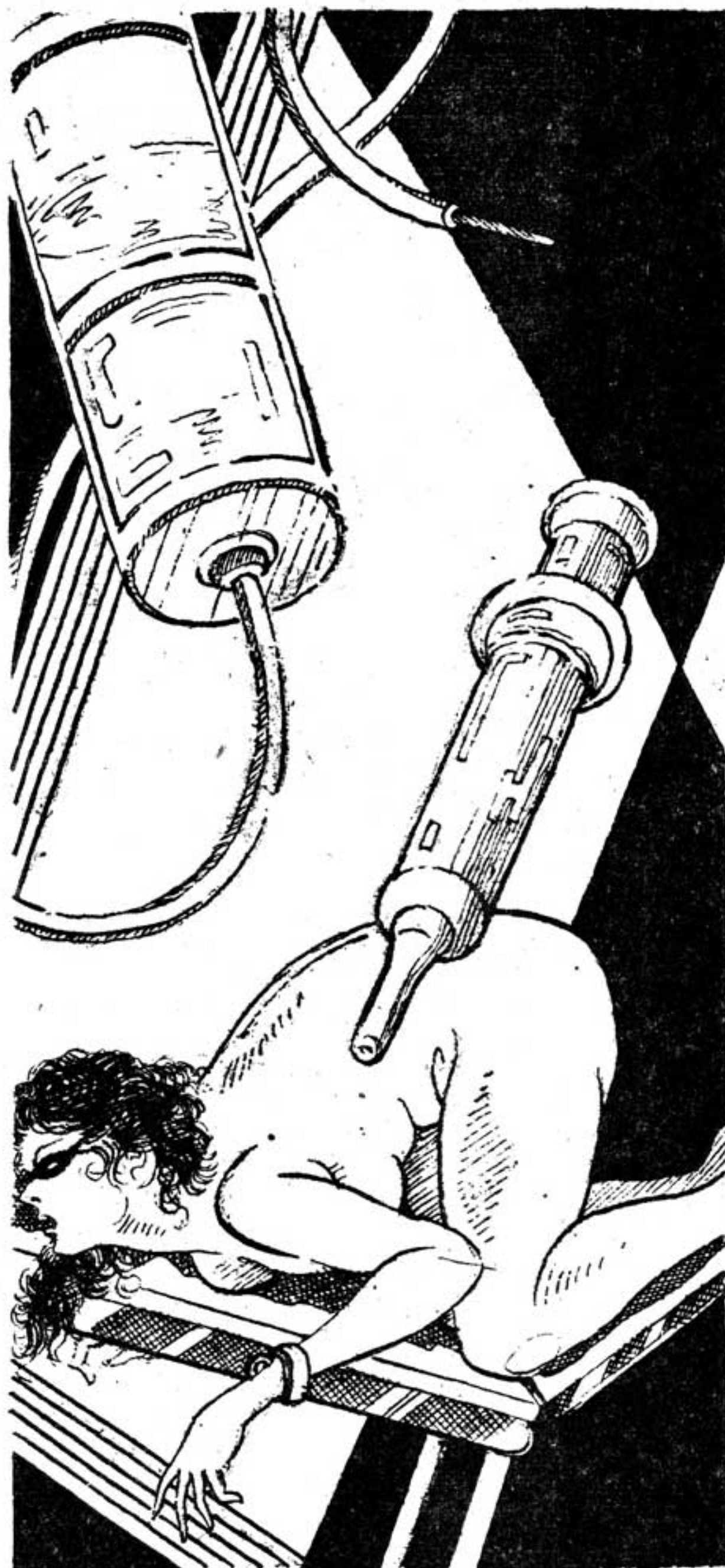
ベッドの足元の台には、なみなみと食塩水をたたえた洗面器、エネマシリンジを手にしたM3号氏は、吸入口を洗面器につけて、二度、三度と、ゴム球を握ります。嘴管から食塩水がシュッ、シュッとほとばしり出て、ゴム球には液が充満したことがわかります。

「さあ、始めますよ、がまんできるだけがまわんしてください。この洗面器には、三〇〇〇CCはいってます。全部注入しますから、覚悟はいいですか、だいじょうぶですね」

「まあ、あたくし、二〇〇〇CCまでは自分でやったことございますが、三〇〇〇CCなにかとても」

「やれるだけやってみましょう」

M3号氏の手は、静かに、それでいて機械のように間断なく、ゴム球を握ります。音もなく、洗面器の液面が下がり、かたずを飲んで見守るあたしたちの目に、W3号のまっ白な腹が、次第次第にふくれ上がってゆくのが



空気洗腸と

人工放屁

「続いて4号さんたちどうぞ」

4号同士も、エネマシリンジでした。

ところが、どうでしょう。M4号氏はいいました。

「皆さん、わたしは液体を用いません。あまり行なわれない空気洗腸を試みたいと思います」

「え、空気洗腸？」

はっきりとわかります。

「ああ、もういけませんわ。なんだか、胃が押し上げられるようで苦しくて。もうやめていただけませんか」

「だいじょうぶですよ、今までは少し早く注ぎ入りましたから、今度はもう少しゆっくり入れましょう。高圧洗腸の三〇〇〇Cは、医学的に可能ですからご心配なく。では、続けますよ」

もうほとんど洗面器はからっぽです。W3

号のお腹は、ちょうど妊娠七、八カ月のようにふくれ上がって、

「ああ、苦しい。胸が突き上げられて、ウッウッ、どうかなりそう……あ、もうやめて」「はい、なくなりました。どうです、はいでしよう。では、おしまい」

ふたたびライトが消され、身動きできないW3号には、すぐ差し込み便器があてがわれた様子が、まっくらな中にぼんやりと感じられます。

思わずW4号さんが聞き返します。

「そうです、グリセリン、食塩水なんかよりずっと楽ですよ。さあ、横になって」

やはり両手足を縛られたW4号のからだに、エネマシリンジの嘴管が挿入されます。M4号氏は、ゆっくりゴム球を握ってははなし、握ってははなしています。

「ああ、お腹が張って、気持ちが悪いわ」「では、いったん出しましょうか」

「えッ？」

「ほら、こうして」

有無を言わせず、M4号氏は、W4号さんのお腹を力いっぱい両手で押しました。

ブスッ——異様な音とともに、今まで直腸に張りつめられた空気が、せきを切ったように排出されました。

「ああ、やめて、恥ずかしいわ」

消え入るようなW4号さんの叫び。いわゆる人工放屁が行なわれたわけなのです。

「そら、もう一度」

ふたたびエネマシリンジが挿入され、ゴム球が握り続けられます。

「ああ、苦しい」

「苦しい？ では、出しましょうか、そら」

ブスッ——

「ではもう一度」

ふたたび、空気の流入、人工放屁、さらにもう一度。

こうして、三度、四度、M4号氏の手で、W4号は、空気流鞭をされては、強制的に放屁をさせられるのでした。

苦痛と羞恥と陶酔と

「さあ、皆様、本日のメエーンイベントといまして、今回、新会員としてお招きいた

しましW5号さんをご紹介いたします。この幸運なパートナーはM5号さん。さ、どうぞ」呼ばれる前から、あたしは、はじめての経験に胸が高なると同時に、恥ずかしさに身を堅くしていました。

M5号氏が立ち上がったようです。マスクでももちろんわかりませんが、いったいどんなかたなんでしょう。

いつか、あたしの肩にやさしく、さっきの山城さんの手がかかっていました。

「さ、5号さん、だいじょうぶよ。あなたがだれだか絶対秘密。皆さんだってお互いに、どこのだれだかわからないのよ。これがわが会の特色、だいじょうぶよ。さ、早く、皆さんお待ちかねなのよ。さ」

あたしは、おずおずとベッドに進みます。

「W5号さんですね、わたし、M5号です。さ、ベッドに寝てくださいね。あなたもお医者さんに、子供のころ、浣腸されたことがあるでしょう。あたしも医者なんです。お医者に浣腸されるんですから、なにも恥ずかしいことはないでしょう。さ、寝てください。そう、手は縛りましょうね。足を揃えて上にあげてください。恥ずかしい？ ちょっととの間のがまんですよ、あたしは医者ですか

らね。こうして縛ってしまえば、動けませんね。もう観念なさい。わたしは医者でもね。歯医者なんです。患者さんに浣腸する機会はありませんよ。だから、こうして、ここにね。わかりますか。さ、パンティーをぬがせてあげますよ、どっこいしょと」

両手を皮バンドで固定され、揃えた両足は上にあげられて縛られたまま、ベッドの頭部からひっぱられたひもに縛りつけられたあたしは、ちょうど、おムツを取り替える時の赤児の姿よろしく、浣腸には絶好の姿勢を取られるのでした。

まぶしいばかりのライト。参会者の目が、あたしの臀部に痛いように集中されているのが、はっきりと感ぜられ、全身、カッカッと燃えてくるのでした。

「きょうは、始めてのようですから、平凡にグリセリン浣腸で行きましょうね。でも、少し太いのにしましょう、一〇〇CCぐらいがまんですかね」

おお、一〇〇CC——あたしは、今まで六〇CCまでは日ごろ自分で行なっているが、一〇〇CCとは、どんなに苦しいであろう。でも、もうこうなっては、いやだと言って許してもらえない訳ではない。黙ってコックリす

るほかはありませんでした。

「ほう、いい子ですね。ちょっと苦しいかも知れませんが、がまんしましょうね」

なみなみと吸い上げられた巨大な一〇〇C C洗腸器を、これ見よがねにあたしの眼前にちらつかせてから、

「痛くないようにワセリンをたっぷり塗ってあげましょう。さ、お腹の力をぬいて、お口を大きくあけてくださいよ」

M5号氏の親指と人さし指が、くすぐったい、思わずも括約筋を引き締める。

「ほらほらそう堅くならないで」

いくら引き締めても、ワセリンの塗られた嘴管は訳なく挿入されて、ぬるっとした感。

チュルチュルチュルという音がするように直腸内に冷たい洗腸液がしみ渡る。

ああ、洗腸、ひとり楽しむわびしさに比して、他人に強制される洗腸のすばらしさ。恥ずかしさも忘れて、あたしはうっとりとその触覚を楽しむのでした。とたんに、はや迫りくる焼けつくような激しい便意。

「あ、もう」

思わず声を出して、一瞬恥ずかしさが鮮明にやみがえってきました。

「ききますか、そうでしょう、水で割らなか

ったんですよ。どうです、一〇〇%グリセリン洗腸は？ 何分がまんできますかな」

「あ、先生、もう、とても……」

「まだ三分ですよ。あなたもマニアでしょう、このくらいで悲鳴をあげては、クラブの名折れですよ。がまんなさい、がまんを」

生グリセリンの強烈な刺激、グリセリンと直腸が鳴って、腸の蠕動運動の強烈さが、なんとも言えない痛みとなって、猛烈な排便感をそそるのです。

「さ、お腹をさすってあげましょう、よくお薬がしみ渡るようにね」

いじ悪くも、あたしのお腹を、排便を促すようにM5号氏は、時計の針と反対に、グルグルとさすりはじめたのです。

「あ、もれそうだわ。やめて、やめて……ああ、もうがまんが……、お願い、許して」

のどがからからになって、いつかあたしは縛られた両手を強く握りしめていました。

「そう、まだ五分だけど、初めてだから許してあげましょうか」

それは、天の声かと思えるほどでした。

ところが、どうしたことでしょう。緊縛から解放されるどころか、M5号氏は、あたしの腰を持ち上げるや、お尻の下におムツを差

し込むではありません。何枚かのサラシが当てがわれ、あまつさえ、大きなおとな用のゴムのおムツカバーがピッタリと締めつけられました。

「さ、赤ちゃん、おむつしましたよ。安心してうんちしてちょうだいね。よく出ないと、もう一度洗腸しますよ」

もう一度なんて、とんでもない。もうがまんの限界に達していたあたしは、恥も外聞も忘れて、排泄するのです。

ゴムのおムツカバーの、ぬめぬめとした感触。軟便が、腰一面にまつわりついたそのじめじめした不快感。その瞬間にライトが消えて、助け起こされたあたしは――

ハッとしてあたしは目が覚めました。猛烈に便意を催しているのです。ああ、そうでした。さっき寝る前に洗腸したっけ。一応排出したのですが、液が直腸内に残っていたのでしょう。それが、寝ている間に直腸を刺激し、ふたたび便意を催させたに違いありません。

ああ、それにしても、たいへんな夢をみたこと。でも、今の夢をかみしめるようにしながら、あたしは、トイレにあたふたと駆け込むのでした。

キリシタン
迫害図譜

責め苦の中に昇天した人びと

千石仙太郎
古正英正・え



秀吉、26人を磔に

はりつけ

わが国の刑罰史上、残虐苛烈の点で忘れることのできないのは、キリシタン宗徒に対する刑罰である。

キリスト教を禁じたのは豊臣秀吉であるが、それから、徳川三代将軍家光が、天草の乱を契機に絶滅の政策をとるまでの六、七十年のあいだに虐殺された信徒の数は、非常に多かったと伝えられている。

当時、洗礼を受けた信者の数だけでも六、七十万といわれたから、洗礼を受けない信者をも合わせると二百万人は下らなかったろう。それが、ごく秘密に信奉するものがあつたのは別として、ついにはほとりの信者もいなくなったというのだから

ら、その追求がいかにきびしかったがうかがえよう。

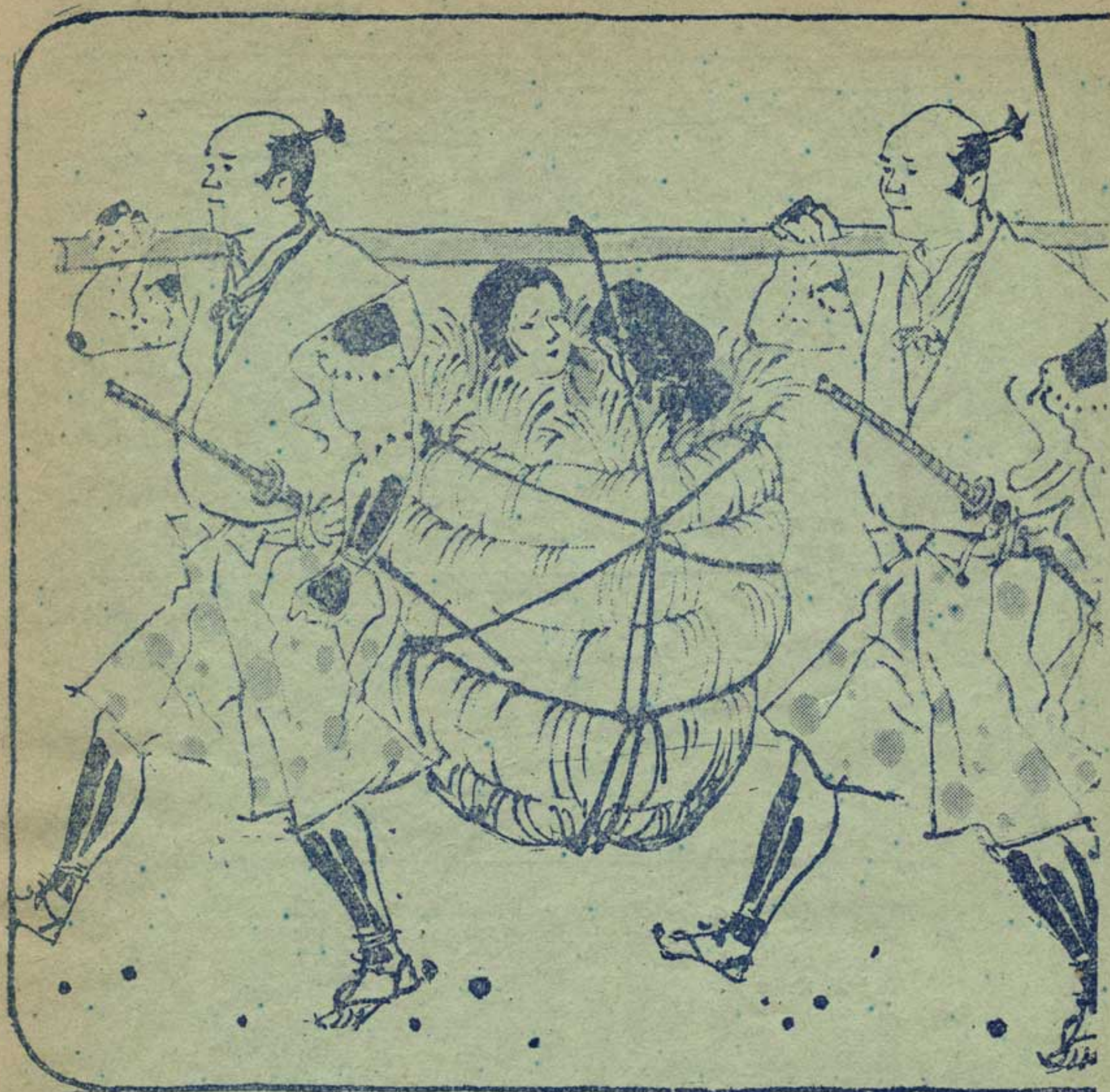
キリシタンの迫害については『切支丹宗門来朝実記』に次のような一節がある。

「……関東より大久保相模守切支丹吟味役として上洛あり、かの宗門のものどもをことごとく捕え、俵に入れ縄にて結び、首ばかり出し、四条五条の河原に出し、改宗するものは助くるなりと、役人ども申し聞かせよと申しつけらる。その後改宗のものはお助けなされ、かようにしてもころばぬ者（改宗しない者）三人あり。うちひとり富田にて、飾り屋七兵衛さかさハリツケ、八右衛門同罪。京都にはころばぬもの四人、うちふたりハリツケ、ふたりは火あぶり。泉州堺にてころばぬもの三人、うちひとり石打ち、ふたりは牛裂き……」

これはほんの一例だが、このほかにも、寛永年間に、キリシタン宗門の男女を各国でか



らめとって江戸へ連れてきた。これを品川の波打ちぎわに、さかさまに吊るしておいたり（つまり水ハリツケ）、ノコギリびきにしたりした。また、肥前（今の長崎）では、改宗しない宗徒を、温泉岳（今の雲仙岳）の熱湯に



沈めて煮殺したという。生きながらの地獄の刑に処したのだが、こうした例は、各地で見られたことも少なくない。

キリスト教は、天文年間にわが国に伝わった。時の権力者は織田信長で、信長は、僧徒への反感からキリスト教を保護した。

しかし、次の権力者豊臣秀吉は、天正十五年六月十九日に、キリスト教追放の命令を下した。

そして慶長元年に至って、朝鮮征伐が思うにまかせず、世継ぎの秀頼はまだ幼く、豊家の行く末を心配して、キリシタン弾圧の命令を出した。そのため、長崎で、イスパニア人のフランシスコ会士六人、日本人のヤソ会士三人、キリシタン宗徒十七人、合わせて二十六人をハリツケにした。

キリシタン迫害の序幕である。

加藤清正の迫害

わが国のキリシタン宗徒にとって、重大な岐路となったのは、天下分け目の関ガ原の役である。

関ガ原の合戦で徳川家康が勝利を得たということは、同時にキリシタン大名の石田三成



や小西行長、明石掃部らの滅亡であった。

その結果は、わずかに家康に味方した有馬、大村の二大名が、キリシタンの保護者として残されたにすぎなかった。

なかでも、石田、小西らと仲の悪かった加藤清正は、自分が熱狂的な法華宗の信仰者であっただけに、公然と、しかも苛酷にキリシタンを弾圧していた。

したがって、宣教師の領内居住を

許さなかったし、家臣に対しても、ころび証文に署名させて、厳重に、キリシタンを禁止した。

それと同時に、信者に家を貸すこと、商取引引きをすること、物を売ることなどを、重刑をもって厳禁した。キリシタン信徒は、無一物となって山奥に逃げ、ワラ小屋をつくって生活した。

しかし、こうした食糧責めにもかかわらず、信徒たちは潜行的に広まっていった。ついに清正は、報復的に刑罰をもって臨むこととなった。

次の宣告文は、その間の事情をよく物語っている。

「南五郎左衛門、武田五兵衛、このものどもは、ひとたびころび、他宗を信すべきむね誓詞を出しながら、その誓いを履行せず、依然キリシタンたり。よって、みせしめのため、主計（加藤清正の名まえ）の命により、おのおのその一族とともに斬首に処するものなり。十一月七日発令」



俵づめの刑罰

キリシタン信徒に対する迫害は、手をかえ品をかえて残酷に行なわれた。

そんなとき、慶長十九年一月二十七日に、家康は、諸大名に禁令を出した。その結果、各大名は、その領内に居住するキリシタンを

すべて長島に送り、天主堂を破壊しなければならなくなった。

まず京都では、所司代の板倉勝重は、市内のキリシタンの名簿をつくり、改宗しないものは、真冬の雪の中に追放した。

女たちは、米俵に詰め込まれて、二俵ずつを棒に吊るして市中を引き回し、夕方、市外の川岸にのぞむ畑の中の刑場に、さらしもの

にされた。

九州の小倉でも、頑強に改宗しないものにひどい迫害が加えられていたが、二組の夫婦と三人の子供は、着物を脱がされて丸裸にされ、町の中を引き回された。そのあげく、俵につめられ、街道に沿った矢来の罅みの中に積み重ねられ、そのまま一昼夜をほっておかれた。

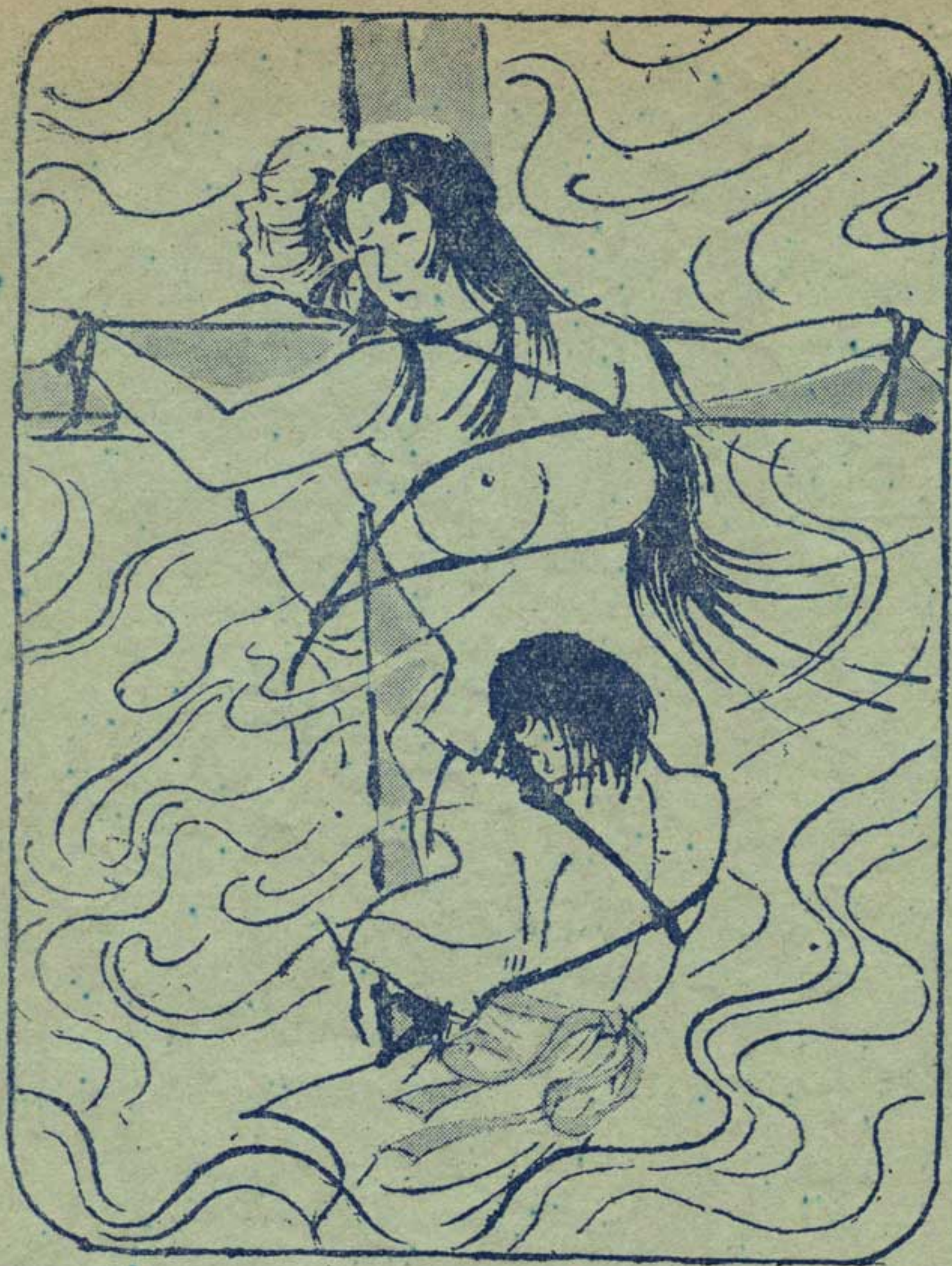


首カセをかけられ、竹のノコギリで首をひかれたものもある。

越ノ津の大残虐

同じく慶長十九年十一月には、越ノ津で七十人という大量処刑が行なわれた。

ここでは、キリシタン迫害のために、天主堂をこわしたあとに役所をつくり、奉行の長谷川佐兵衛が弾圧の指揮をとっていた。



囲いがつくられ、そのまわりを役人が幾重にもとり囲んでいた。そこには、いろいろの責め道具が用意されていた。

そこへ、キリシタン信徒が五人ずつ呼び出された。そして、囲いのまん中に進んだところ左右からふたりの役人が両手をもって引きすえた。そうして身動きできない状態にしておいて、大ぜいの役人がとびかかって、なぐるけるの極みを尽くした。

骨をくだかれ、目、鼻、耳からは血がふき出し、顔をふみつけられたりしたあげく、額に十文字の烙印を焼きつけられた。シリシリと煙をあげて皮肉が焼けただれる悪臭が、あたりにたちこめた。

なかには、大きな石を胴中にゆわえつけられたまま二時間もさかさに吊り下げられた男があった。この男は、両眼がとび出し、全身がはれあがって絶命した。

手足の指を一本ずつ切られたものもあったし、足の筋を抜かれたものもあった。もちろん落命したものの数も少なくなかった。

橋本市左衛門という五十二歳の信者は、石をつけて吊るされたうえ、指を切られ、十文字型の焼き印を押され、足の筋を抜かれ、わぎの下に杖を通して引き立てられた。

火責めのむこさ

京都の、俗に「天主町^{デウス}」とよばれた信者の多く住んでいた町の住民のおもなものの三十六人が、所司代の役人に召しとられ、大八車に積みこまれて、伏見の刑場に運ばれた。

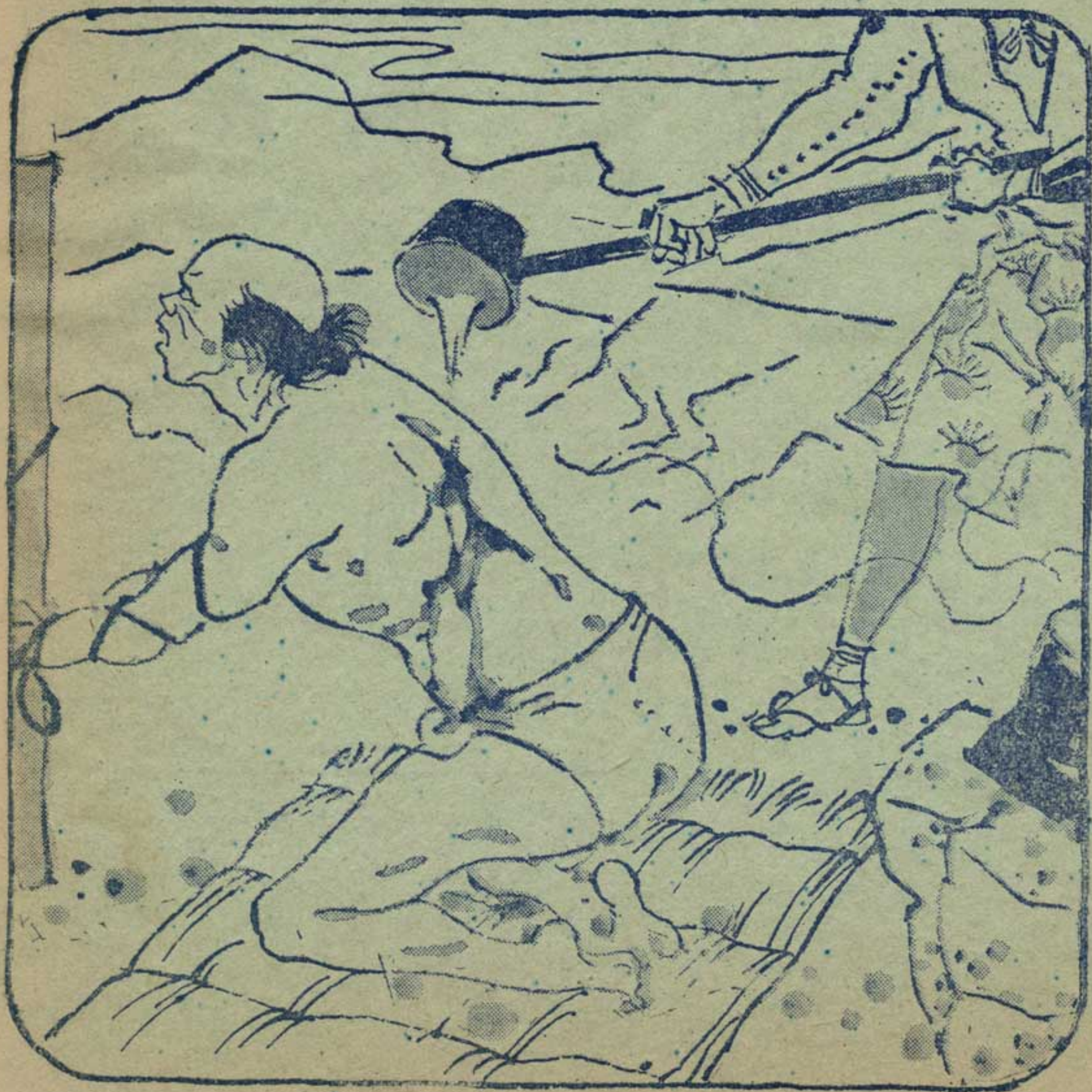
刑場には大きな十字架が立ち並び、信徒たちはふたりずつ背中合わせに、縛られた。

やがて足もとから火がつけられ、煙と炎のなかから、かれらの祈禱の聲が高らかに聞こえてきた。苦難にたえてハライソ（天国）を願う信者たちの声は、このくらいでくじけはしなかった。

なかでもいたましいのは、子供を連れた母親たちで、三人の子供といっしょに縛られ、そのうえ、すぐかたわらの十字架には、あとふたりの子供がくくりつけられ、五人の子供とともに苦痛にあえいだ母親があった。

母親は、子供をしっかり抱きしめていたので、息たえたあとでも、子供は母親にひっついたまま離れなかったというくらいだ。

九州でも、レオ林田助右衛門の妻マルタは次男のヤコボを抱いたままハリツケの火刑になったことは有名である。





そのほか、火責めでひどかったのは、温泉岳の硫黄責めであろう。男三十七人、女二十七人の計六十四名を温泉岳に連れていき、背中を割って、煮えたぎる硫黄を流しこんだ。

雪責め・氷漬け

寛永元年、仙台藩の伊達政宗も、將軍の命に呼応して、信徒を取り締まった。仙台には、ジダコ・カルワリヨという伝道

師が住みつき、熱心な信者も多かった。かれらは、下嵐江村のオロコの谷間に隠れ住んでいたが、役人にみつかったしまった。

襲撃をうけたジダコら六十人は、着物をはぎとられ、おりからの雪の道をハダシで歩かせられた。

信徒らは、手を縛られ、キリシタン人と書いた紙のぼりを背負わされて、さらしものの道中を続けさせられた。老齡のアレキシス幸右衛門とトミニコ道斎は、あまりの寒さに倒

れたところを、役人によって、ずたずたに切り刻まれた。

寒風と雪の中の行進は、二日間つづき、広瀬川の川岸に着いた。そこには、深さ四尺ぐらいの穴が掘られ、川水が流れこんでいた。着物をはぎとられた信徒たちは、この凍りつく水に漬けられた。水漬けのあとでは、石のごろごろした川原をひきずって歩かされた。

マルコ嘉兵衛と妻のマリアは、寒風の中を裸で引き回されたうえトロ火で火あぶりになった。ヨハネ浅井と妻のアンナは、氷水の中に三時間つけられたのち市中を引き回され、辻々で冷水を注ぎかけられて凍って死んだ。

キリシタン迫害の歴史は、言語に絶するだけでなく、おびただしい数にのぼる。しかし、責め苦の中に神の幻を描き、一種の恍惚状態に身をおくかれらに、わたしは、マゾヒズム的な快楽を感じるのだが――。

俄然人気沸騰!

第1回忽ち売切れ……

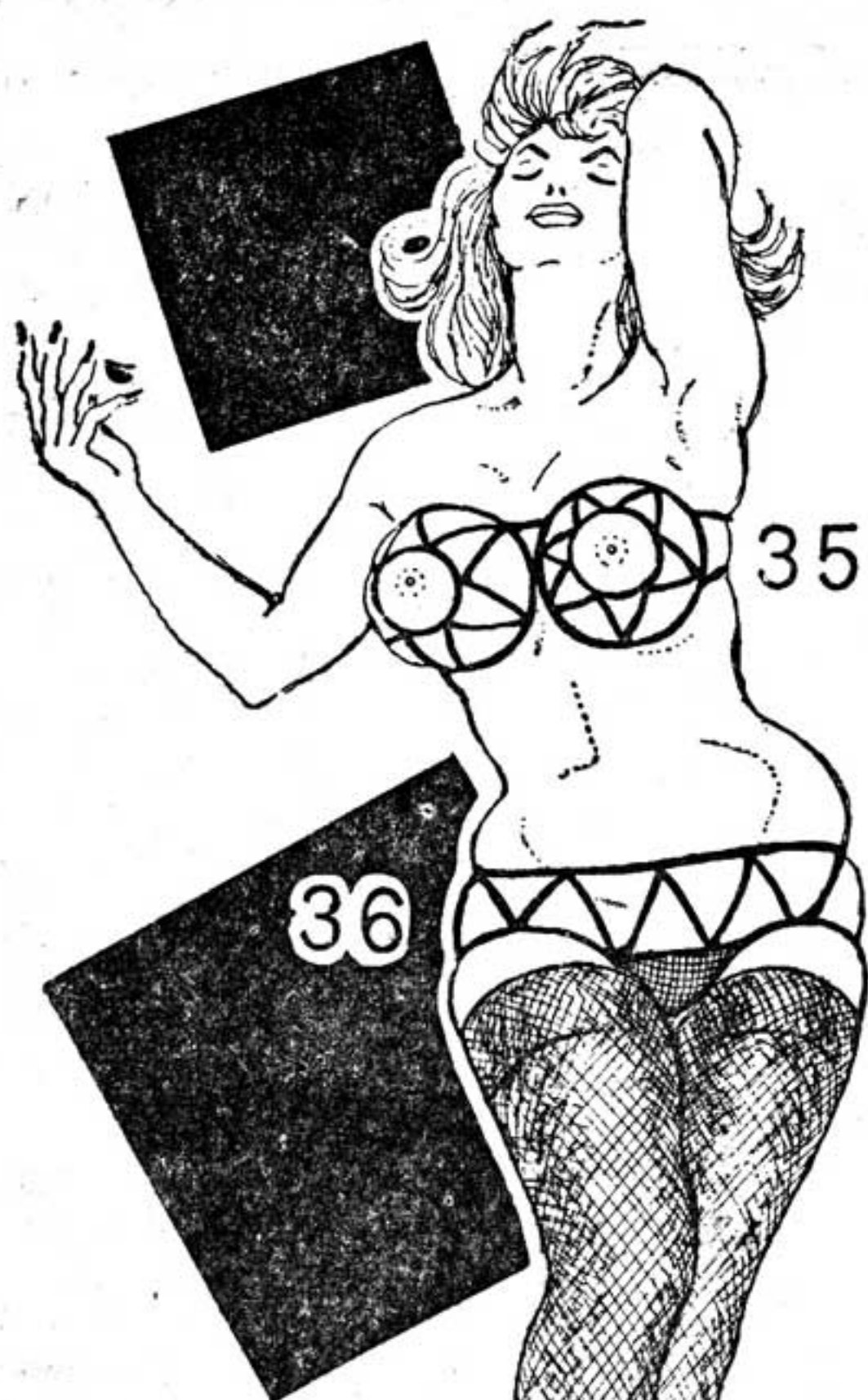
只今第2回特別申込受付中

豊満な肉体に、グーッと食い込む太紐! 何の操作もなく、はいた瞬間にググーッと、ブラジャーは乳房に、パンティは下腹部と太腿に思い切り食い込んで、柔肌の魅力が妖しくのた打つ、読者待望の「ネオ・エキサイト・アブ・パンティとブラジャー」

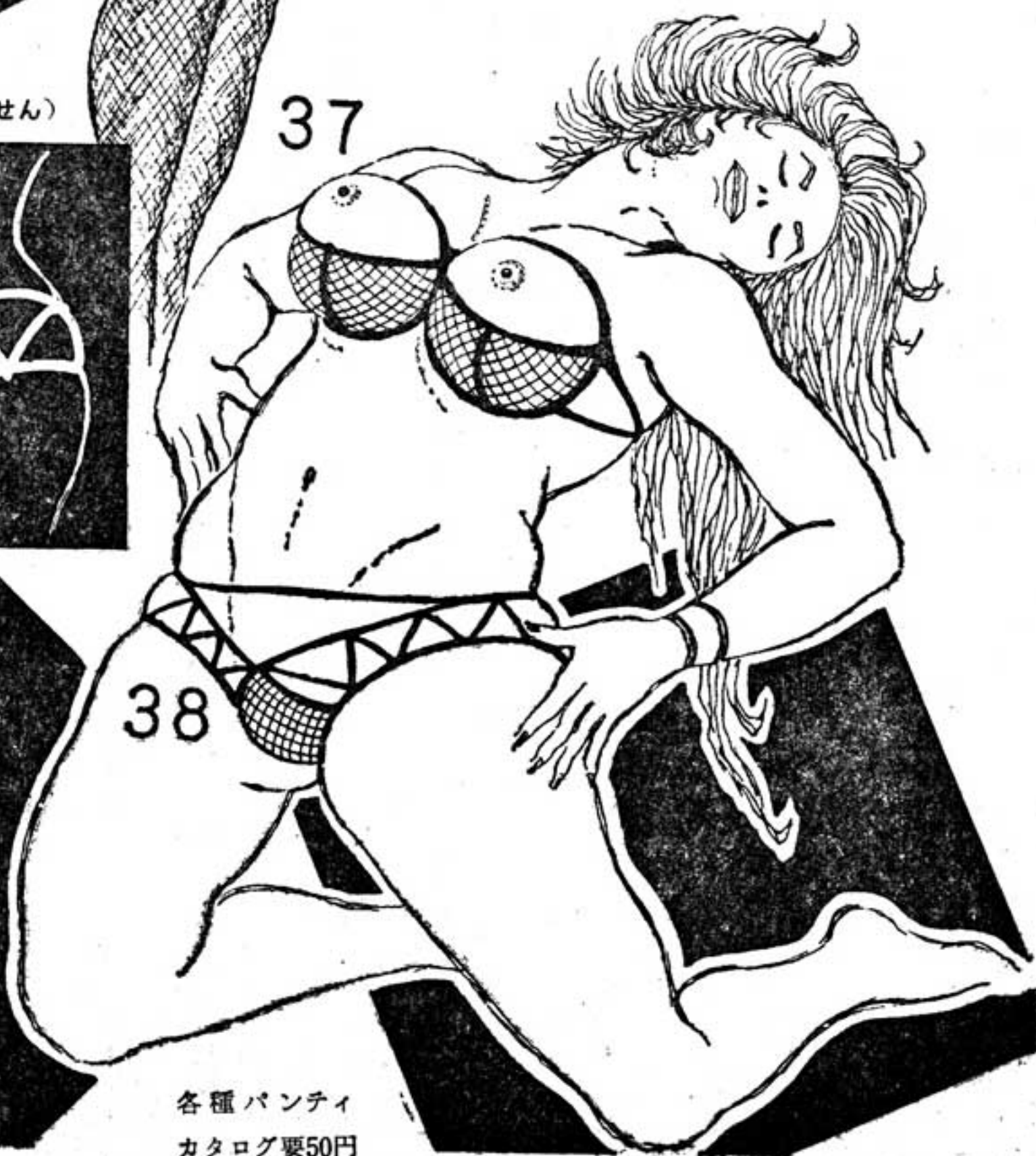
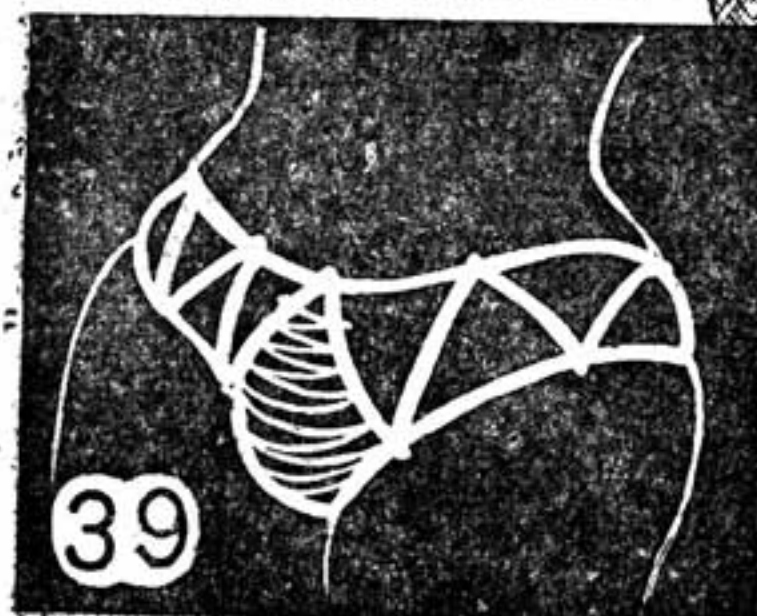
☆本誌愛読者に限り特別頒布

35・37=ブラジャー 36・38・39=パンティ (いずれも 黒・赤・白の3色あり) 価送共 各700円
ご注文は品番号に尻まわり寸法を記しご希望色をご指定の上、現金または小為替で、必ず書留便で下記へご送金下さい。

シャープ舞台衣裳通信販売部
東京都世田谷区玉川奥沢町3~74



(一般市販はいたしていません)



by
Sharp

各種パンティ
カタログ要50円

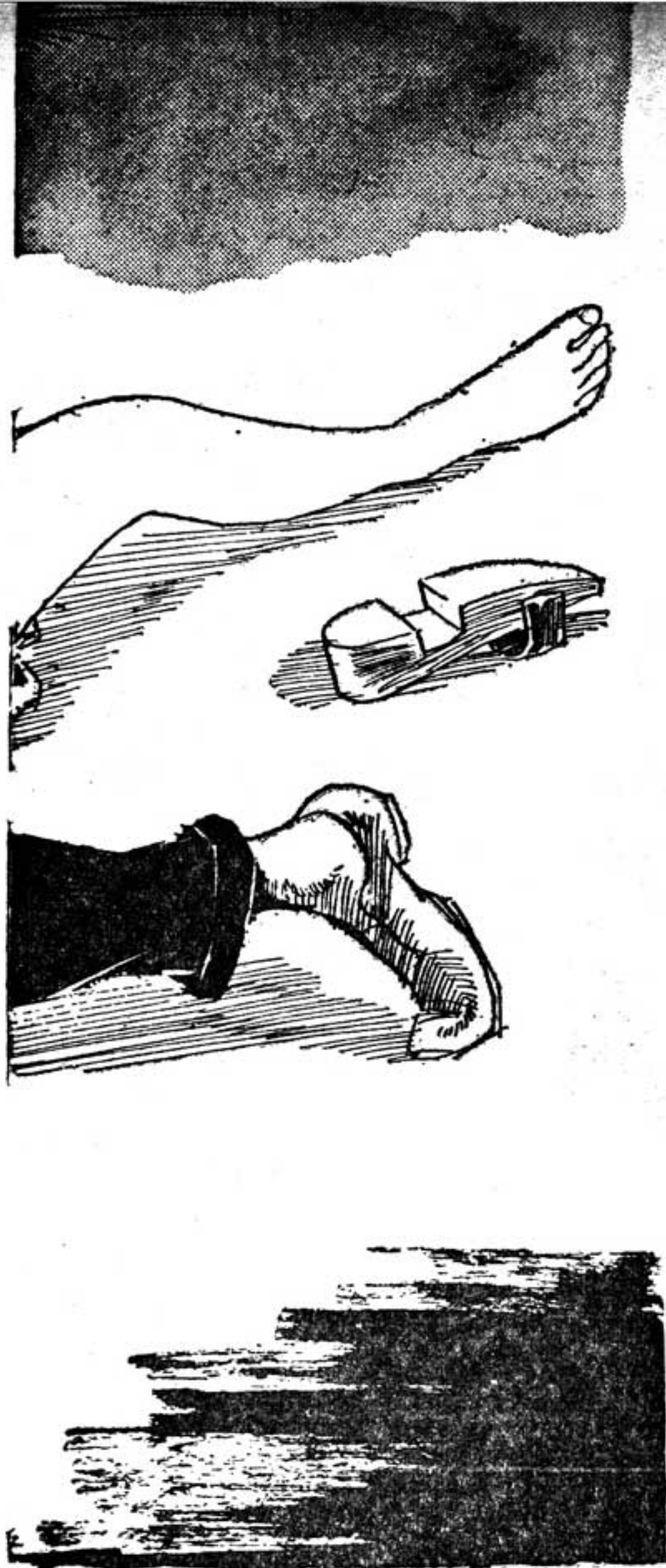
愛読者券

女のサラサラした髪にハサミをあてると、ジヨキジヨキと切り落とした瞬間、おれはエジャクレートしたノ

盗髪日記抄

羽井 鯨 亭

江馬 美 久・え



ばおけ大会で
B・Gの髪を

八月某日

きやッ……きやーッ……きやきやーッ……

…

くらやみのなかのそこから、しっきりなしに悲鳴のような叫び声がきこえてくる。

女が痴漢やオイハギに襲われてるンじゃねえ。お化け大会の中なんだ。そしておれはオバケになって、客の通る



道筋のとある木かげに身をひそめている。
頭は芝居の法界坊のような蓬髪のカツラ、
顔じゅう赤や青の色で隈どり、目は左のま
ぶたの上にセロテープをはりつけて片目の
見立て、口はコンニャクでつくった長い舌
をペロリとたらし、身にはオンボロの袈裟
ころも、地にひきずるくらいにながながと
まどつてる。つまりはコジキの幽霊という
わけだ。

年よりはもちろんだが、アメリカかぶれ
したいまの若いモンでも、オバケとくれば
西洋風の妖霊や悪魔の姿ではピンとこず、
やはり日本風の幽霊や妖怪の格好のほうが
こわがるらしいというのが、興行主側の意
向なんだ。

S興行——といっても、歴然たる香具師
だが——で働いてる友だちの金井が、この
話をおれのところへもってきたのは三日前
だった。

おれが浅草の軽演劇団バカス座で下ッ
端三枚目をやってるので、扮装も演技もシ
ロウトよりはマシだろうから、おぼけ大会
に出てみないかというんだ。

ギヤラは十日間で三万円だすという。三
万といえ、おれがバカス座でもらって

る一ト月分の給料の倍のわけだ。

「ヨシ、そいつをいこう」

とおれは即座にひきうけた。

ひきうけたのは、ギヤラの関係ばかりじゃねえ。おおっぴらに女子供を驚かしほうだい驚かせるというのが、いっぷう変ったサディズムに憑かれてるおれには、願ってもねえ仕事だったからだ。

おれはさっそくバックス座のほうへ十日間の病欠届けを出して、このおばけ大会に幽霊役で出た。

そしてきょうが初日——。

おっと、だれかこっちへ来るらしいゾ。おれはくらやみのなかへ目をとめた。女がひとり歩いてくる。ちかづいた。

立ち木のうえて、ひとところ据えられた、うすぐらい青い灯の光にすかしてみると、勤め帰りらしいB・G風の二十一、二、ほそおもての、目にちょっとケンのある顔だが、すごく美しい。

——あたしはひやかしに見にきたのよ。つくりもののオバケに驚くなんて、チャンチャラおかしいわ。

といった表情で、ゆうぜんと歩いてくる。

そのとりすましたようすが、おれの神経にコッソときた。こいつめ、いまにほえづらくなよ。おれだけはそこのオバケとオバケがちがうんだぜ。

女がおれのまんまへのあたりに来たとき、おれはそっとちかよるやコンニャクの舌のさきを彼女のあごへくっつけるよりはやく、ペロッと頬のあたりまでなめあげた。

「きゃーッ……」

と悲鳴をあげて、女は逃げようとする。それ見たことか、おれはそ

の前にたちふさがって、女の格好のよい鼻のあたまを、またペロリ。女はまたも呼び声をあげて、うしろへ倒れかかった。

ずっと、そんなところへひっくりかえると、だいじなお洋服がババツチクになりますわよ。おれは女の背をかかえて、だきとめた。とたんおれは、二の腕あたりに、ふさふさした髪の毛の感触をかんじた。

おれは思わず、うーんとうなった。もう、イケません。

片親で育てられたおれは、幼時、母親に抱き寝されて、彼女の好きな洗い髪をなでたりこねくったりしながら、眠りについたことを覚えてる。それがとてもこころよかった。そんなことが因子となってるのだろう、成長してから、女の長いふさふさした髪や日本髪などをみると、モロに興奮してくる。さわったりなでたりすると、それだけで遂情した。いまでは、そうしたFばかりでなく、髪にたいするSが加わってきてるんだ。

おれのあいた右手は、おれの腹巻きのなかにひそめたハサミをつかみ、ソロリソロリととりだしてた。

女はおれにかかえられたまま、まだハアハア……と驚愕の吐息をついてる。

このときとばかり、おれはハサミの刃先を女のサラサラしたたれ髪のはしにあてると、じょきじょきじょきとひとつかみの髪の束を切りおとした。おれはエジャクレートしていた。女はちっとも気づかぬらしく、グッタリとおれにもたれかかったままだ。

が、髪切りをやってしまえば、女には用のないおれだ。

「さあ、お嬢さん、しっかりして、お帰んなさい。幽霊がこんなことをしてたンじゃあ、しょうばいになりませんや」と女を追い帰した。

水禍の部屋で若妻の髪を

九月某日

おとといの夕刻ごろから、豪雨をともなうて東京中を荒らしまわっていた台風も、昨夜半にやっとやんだので、トロトロと眠りについたおれは、早朝、アパートの管理人にたたきおこされた。

荒川の堤防が決潰したらしく、この一帯（東小松川）にも早曉から出水しはじめて、すぐ床上につくくらいになったから、階下の人たちを二階に避難させるというんだ。

「そいつあ、たいへんだ」

とおれはとびおきた。が、けっして驚いたわけじゃねえ。ひとりものの風来坊の気楽さで、本心はむしろこんな異変をよろこんでいるんだ。

おれが夜具ふとんをかたづけろひまもなく、

「すみません、おねがいします」

といいながら、若い女がふたり、洋服ダンスをエッチラオッチラとかついで、おれの部屋にはいつてきた。

年上の二十二、三のほうには、見覚えがあった。おれの真下の部屋にいる勤め人の細君なのだが、亭主の好みか、長い髪の毛をまん中から二つに分けて、肩の上までたらしめている。おれはその髪にひかれて、前々からガンをつけていたんだ。

「さあさあ、どうぞ……」

とおれはさっそく手をかして、適當の場所に洋服ダンスをおかせた。おれはなおもふたりの女といっしょに階下において鏡台やら、机や

ら、いろいろの家具や調度品を二階へ運びあげるてつだいをしてやった。

ふと気がついて、おれは、

「ご主人は？」

とワイフのほうにきいた。すると彼女は、

「それがあいにくと、三日ばかり前から大阪のほうに出張してるんです。それで留守中さびしいもんですから、この妹にきてもらってたんですが、まさかこんな目にあうとは思ひもかけませんでしたわ」と、おわりは女らしい述懐だ。ふん、亭主が不在とはあんばいがいゾ、とおれは腕をなでた。だが、ビートらしい、この妹がじゃまだナ。

女たちの道具運びがすんだころには、水は床上三寸くらいまでに達し、なおどんと水かさをましていく。

「こいつはことによると、大した洪水になるかもしれませんよ」

おれはそう女たちをおどしておい、部屋の雨戸を二、三枚ひっぱずし、即席のイカダを組んだ。

そして妹のほうにいった。

「さあ、いまのうちにうちに帰るんなら、水でないあたりまで、これで送ってあげますよ」

だが、彼女は窓の前に立って、みわたすかぎりの汚水の海をながめながら、

「いいわ」

と首をふるのみだ。

こりゃあ、ダメだ。おれはあきらめちまった。

正午ごろには、階下の庇すれすれくらいまでに出水してきた。トラ

ンジスターのニュースも、刻々と東京下町方面の出水の状況を知らせてくるのに、救艇一つ渡ってこず、そのほかどこからもなんの連絡すらない。まるで孤島にとりのこされてるようだ。

朝からなにも食っていないおれは、だいいち腹がへってきたので、とりあえず食う物を仕入れてこようと、窓からイカダをおろして、ひとりで汚水の河をこぎだした。

大通りへ出ると、ぼつぼつイカダや小舟が水を渡っているのがみえてきた。

そここの二階や屋根上から、女たちが声はりあげて救いをもとめている。だが、すでに人を満載してるそれらの舟は、これ以上はダメだというふうに、だまってゆきすぎていくのみだ。

こんな木ッ葉のようなイカダだが、おれもひとりふたりは乗せてやらねばなるまいと、あたりをみまわしながらイカダを流していくと、とある小さな平家の屋根から、しきりに手をふってるひとりの女の姿が、おれの目にはいった。

朝寝をしてて、寝ごみをでも出水に襲われたのか、ピンのネグリジエ一つ、腰のあたりまである洗い髪をふりみだして……。

おれは一直線に、その家のひさしへイカダをこぎすすませた。

「さあ、早いとこ乗ったり」

そういうと、女があぶなっかしい足どりで、屋根をおりてきた。年のころ二十一、二、からだつきがオメカケのよくな感じの女だ。

おれは手をのばして、女をだきとめた。女の洗い髪が、

サラサラとおれの腕をくすぐる。おれはしっかりと女をだきしめたまま、しばしその感触に陶然とする。とつぜん、その髪をかきむしりた衝動におそわれた。おれは片手を女のからだからはなして、洗い髪のさきをつかんだ。

とたんに、女のからだがおれの腕からすりりとすべった。はずみで彼女のネグリジエの裾がホーズキのようにまくれあがり、腰のまわりの膚がむきだしにされた。シャムハールの真っ黒いかたまりが、一瞬おれの目をかすめた。穿いてなかったんだ。

「やあ、うっかりしてて、ごめんごめん」

とおれはいった。

「いいえ、こちらこそ助けていただいてありがとうございます」

と女はあたまをさげる。髪のことには気づかなかったらしい。おれは安心してイカダをこぎだした。

女を水の出ない小松川橋のてまえまで送りどけると、おれは近



くの食料品店でパンやカンヅメなどを買いもとめたのち、イカダをひきかえした。

アパートにもどると、おれの部屋には姉のほうしかいなかった。きいてみると、妹もとうとう心細くなったとみえ、あれからまもなくやってきた自衛隊の救艇に乗って帰っていったと、というんだ。

おれはさっそく、買ってきたカンヅメ類を開いて、自分も食い、彼女にもすすめた。

夜になった。

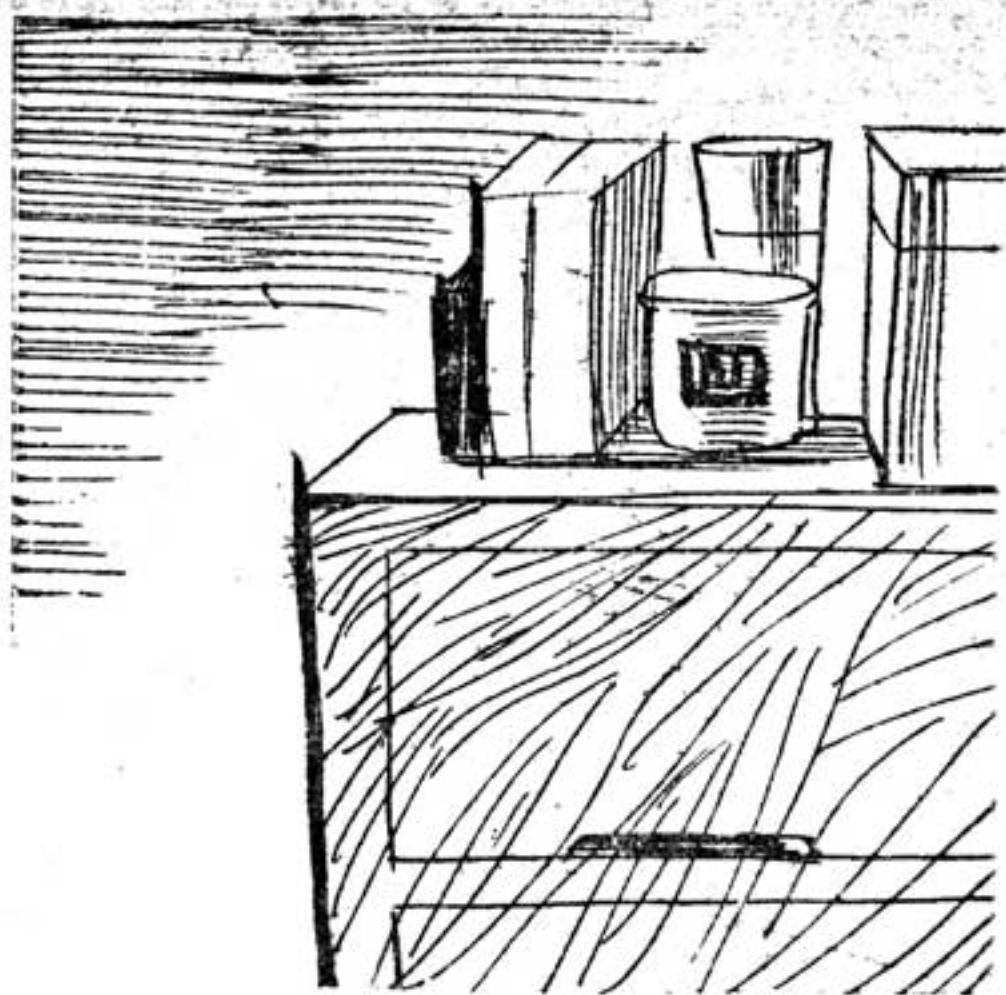


と、ふと彼女が、

「すみませんが、ちょっとのあいだ、むこうむいてくださらない」とドアのほうをあごでさした。

どうしてだときくと、なんでもいいからあっちをむいててくれのいってんばりだ。そのようすがとても色っぽい。

おれはわけがわからないままに、ドアのほうにむきなおった。と、彼女が走るように窓のほうへちかよっていく。ハハア、生理的要求だなとおれははじめて気がついた。



「水にでも落ちたらいへんですよ。ぼくにつかまりなさい」
 そういいながら、おれはたちあがり、ドアのほうをむいたままの形
 で、窓べにあとずさりすると、うしろに手をのばして、窓の上に乗っ
 てるらしい彼女の後頭部あたりをおさえた。

くるりとスカートをまぐるけはいがして、彼女の片手がおれの腰の
 あたりをしっかりとつかんだ。

と思うや、しゅるしゅるっと排尿の音がきこえ、それがたちまち激
 しいいきおいの音とかわった。

汚水の川にむかってほとぼしる放尿の音をうつつにききながら、お
 れはやたらむしように彼女の長い髪をかきむしった。

人なき土手で

2号の髪を

九月某日

ぶきみな夜が明けた。増水の不安が
 あって、おれも彼女もほとんど一睡も
 しなかった。

女のはずかしいことを、おれの前—
 —いやうしろだが—に開陳したとい
 うことで、彼女は急におれに親しみを
 もってきたようだ。

夫婦でもないふたりは、夫婦のよう
 に膳にむきあい、夫婦のように食べ物
 をわかちあって、朝食をすませた。

十時ごろ、劇団の丹下先生が、船を

雇って水見舞いにきてくれた。作者で演出もやってる人だが、みずか
 ら悪魔派と称してるだけに、いつも好んでアブノーマルなことを書く。
 「ねえ三ちゃん、ぼくはこんど、きみを主演とする脚本をかいてみよ
 うと思ってるんだ」

先生はこういって、おれの顔をじいっと凝視した。

「トンでもない、あたしなにかまだとても主演なンぞ……」

「いいや、そうじゃない。主人公がきみでなきゃできない役なんだよ」
 先生はおれの目から目をはなさない。おれは心の奥底までみすかさ
 れちまうような気がした。先生はおれの異常な性癖や行動を、もう観
 破してるんじゃないか。

「いったい、どんなテーマのものです？」

「そりゃ、いわぬが花さ」

こんどはニヤリと笑った。

先生は、汚水の川の中に孤立したこの奇妙な部屋の、奇妙な男女の
 とりあわせがよほど気に入ったとみえ、おれと彼女を相手に、夕方ま
 でダベっていたが、船が迎えにきたのを機会に立ち上がった。

おれは先生を送っていくべく、その船に同乗した。

小松川橋のたもとで丹下先生と別れたおれは、水災者の配給がどん
 なふうかみてこようと、荒川放水路の土堤を歩きだした。

土堤の上には、多くの避難者が、ムシロ作りのコジキ小屋を作っ
 てわずかに雨露をしのいでいる。

おれのわきを給水のトラックが砂ほこりをたてて通りすぎていっ
 た。すると、小屋という小屋のなかから、両手にバケツをさげた男や
 女がとびだしてきて、トラックのあとを追う。トラックが一定の場所
 に止まると、ひとびとはそのわきに列を組んで、順々に飲用水の配給

を受けるのだ。

おやっとおれは目をみはった。その

列の一番先で、バケツを高くかがげて、トラックのタンクから流れ出る水を受けてるのが、きのうの午ごろ、おれがイカダに助けに乗せてやった女なんだ。

印象深いあの洗い髪は、きょうは中ほどを紐でくくって、おさげふうに背にたらしてる。痩せた腕に重そうにバケツをさげていく女のうしろから、おれはもしもしと声をかけた。女はふりかえって、おれをみるより「あらッ……」とはでな声をあげた。

「きのうはほんとにどうも……あのときは夢中でお名まえもお所もうかがわずにしまっただの、ちょっとおまちくださいましたね」

きれぎれに早口でそんなことをいうと、女は急ぎ足で、とある小屋の内にはいつていったが、すぐまた出てきた。

「こんなどこじゃなんですから、そのへんまでまいりましょう」

女は先にたって、ずんずん歩いていく。小松川を渡って、町筋に出ると、女は一軒の飲み屋におれを伴った。

酒がはこばれると、女はなれた手つきで酌をする。女は則子と名のった。想像してたとおり、ある商人の二号で、その旦那がきょう金をもって見舞いに来たということだ。どうせタダのお金ならと、おれは遠慮なく馳走に

なることにした。

やがて、おれと則子はほろ酔いで飲み屋をでた。

戸外は夜になっていた。夜は月になっていた。

おれたちは小松川橋の中ほどから中土堤^{なかどて}に曲がって、川風に吹かれながら歩いていった。

中土堤には避難者の小屋がないので、人ッ子ひとり通らず、荒川の濁流の音だけがものすごく聞こえる。

歩きながら。おれの目はともすれば、則子の髪に走る。彼女の背でくねくねと揺れてる洗い髪。月の光でへんになまなましくおれにいでんてくる。

おれは思わずフラフラとなって、則子の髪をつかむと、ぐいと引いた。

「あらっ、なにさるの」

則子はうしろへよろけながらさげんだ。その陰のある声音が、おれの坎にひっかかった。

酔いのためか、大胆な気もちになったおれは、則子にとびかかるとその場に押し倒した。

「乱暴なさらないでも、ほしいものは、あげますわ。からだ？ それともお金？」

いいながら、則子は起きあがろうとする。おれはおさえつけて、まとも彼女の髪をつかんだ。

「そんなもんほしいンじゃねえ、おれのほしいのはこれンだ」

おれは則子の髪をめちやめちやによごしてやりたかった。片方の手で彼女のからだをおさえながら、片方の手で彼女の髪を土になすりつけた。

則子はなにがなにやらわけがわからぬために、よけい気味がわるいのだろう、身をもがきながら、大声で助けを呼びつつける。

「うるせえっ」

おれは則子のほおゲタをなぐりつけた。あっと声をのむ女。すかさず、おれは彼女の髪を土足で踏みつけた。

初日の舞台で相手女優の髪を

十月某日

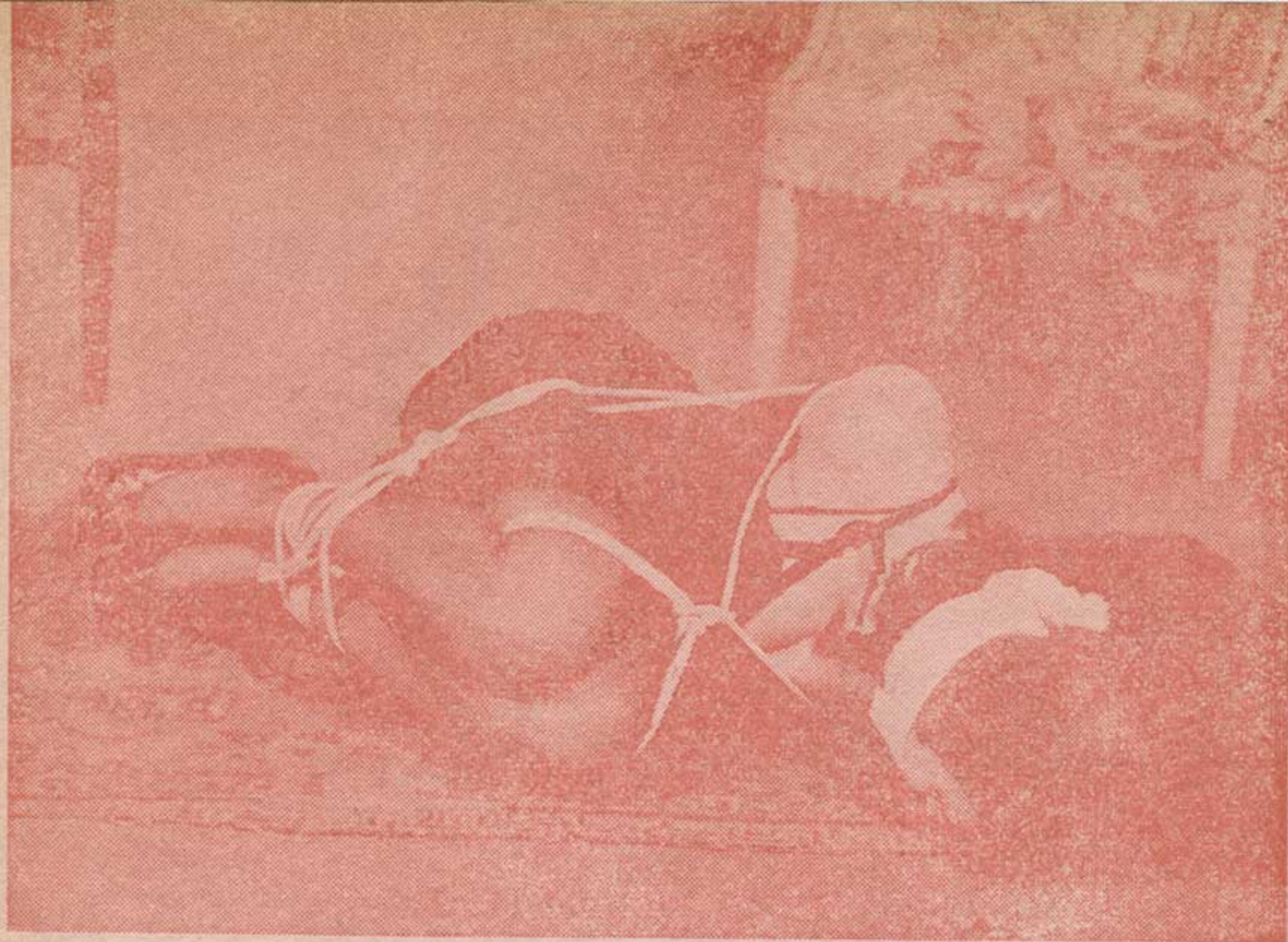
きょう、おれはバックス座をクビになった。いや、そんなことよりこの世からもうお払い箱になるかもしれないんだ。

ことの起こりは、丹下先生がおれのために書きおろしてくれた『髪に憑^つかれた男』という脚本^{ほん}だ。

おれ自身のような髪フェチストの男が、町でみる女の髪にひかれていろいろ失敗をやらすが、さいごに理解ある女に会い、彼女の髪を愛撫しながら、接吻して幕という筋の喜劇。

その初日のきょう、おれは地で演じて、観客の拍手と笑声を浴びながら、トントンと舞台は進んでいったが、さいごのおれはこらえこらえた興奮のあまり、相手役の小貝サクラという女優の長い髪をほんとうにハサミで切ってしまったのみか、ほんとうにキッスをしたため、相手から舌を噛み切られてしまった。

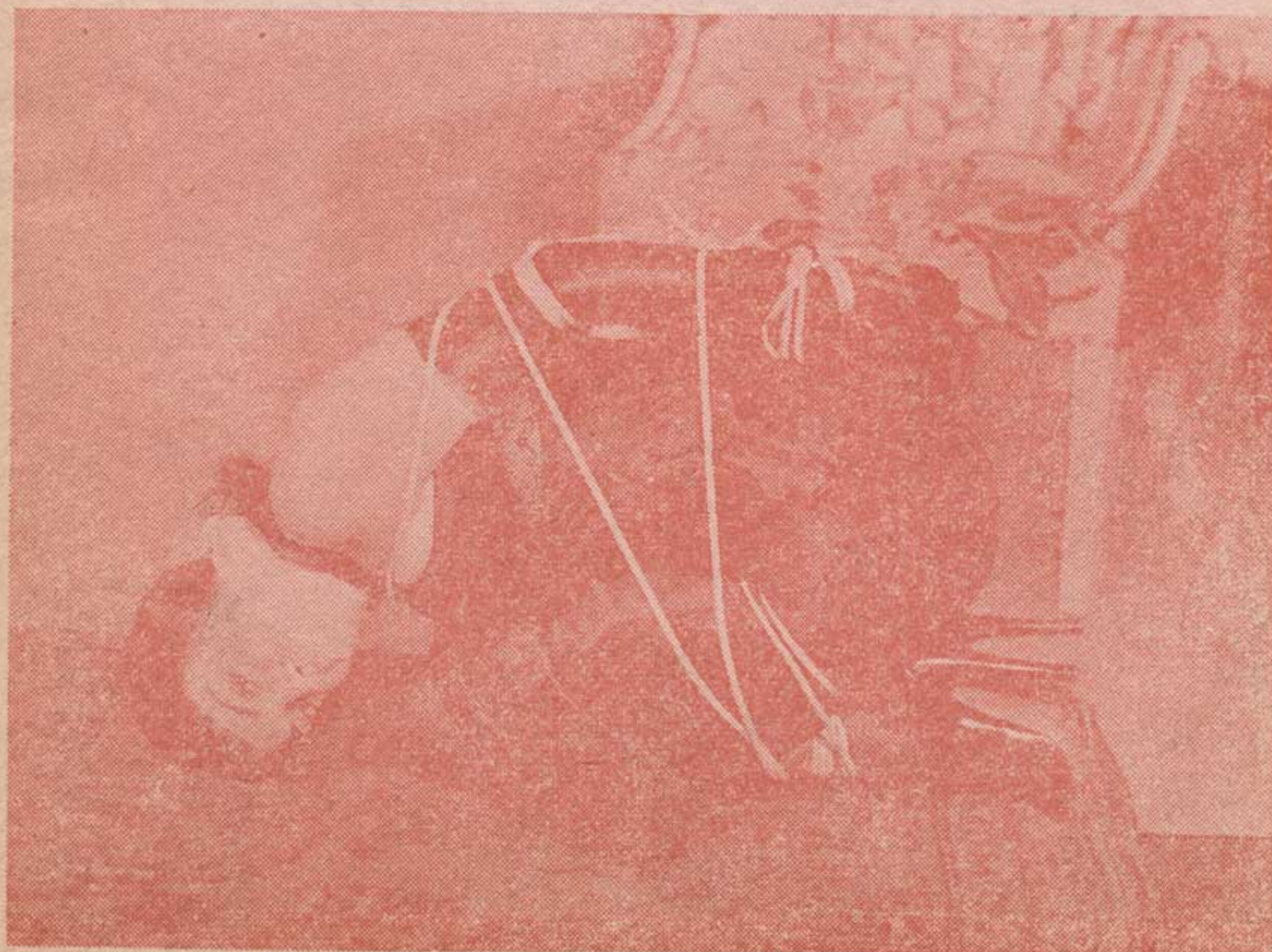
すぐに医者の治療を受けはしたが苦痛はひととおりでない。おそろく、遠からず死が来るだろう。かまわねえ。征服の秋、歓喜の果てで死ぬのなら、髪サディストの本望でござあます。生き長らえて老醜をさらすより、青春のいま、火花となって敗ちまえ。



NUTRIX-QT-F573

マゾの女王ベティ・ペイジ

ヌートリクス
コーナ

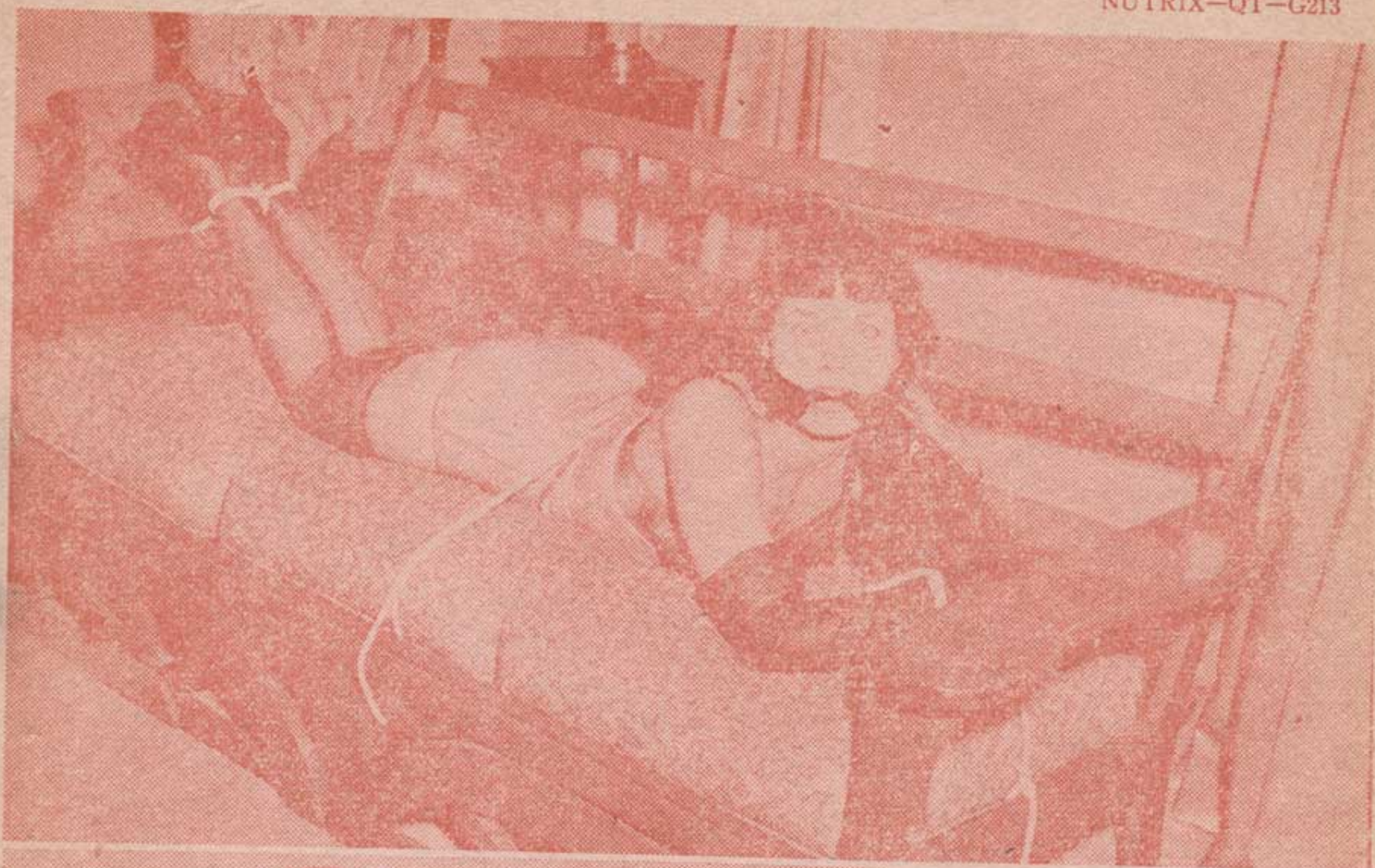


NUTRIX-QT-F574



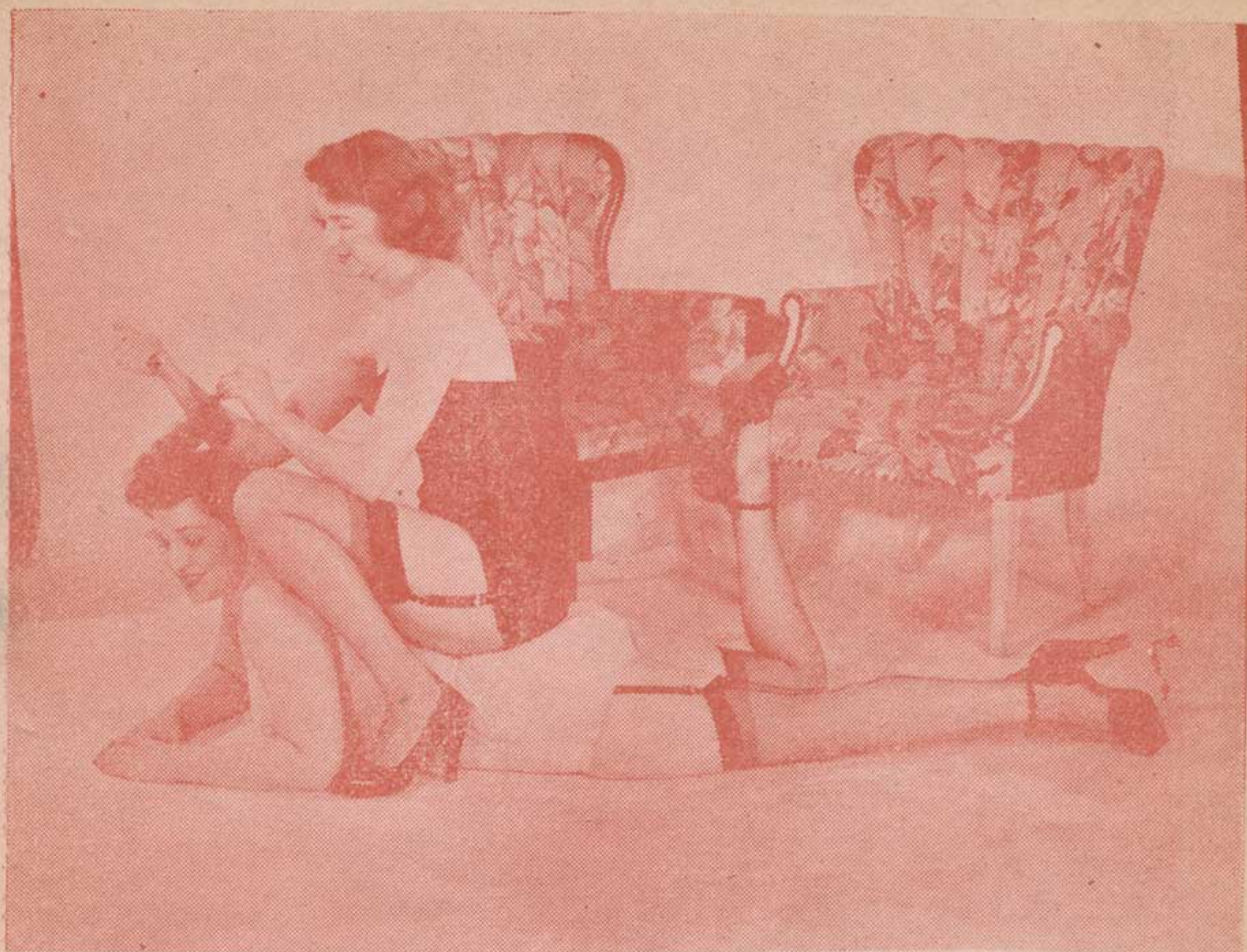
ベティ・ペイジは、ブロードウェイで人気のある踊り子である。そして「この世界」のモデルとしてもトップ・クラスにランクされている。ここに紹介した写真は、1954年ごろ、現在のヌートリクス社が、アービング・クラウと称していたころのものであるが、彼女の演技は、そのころから卓抜のものであった。



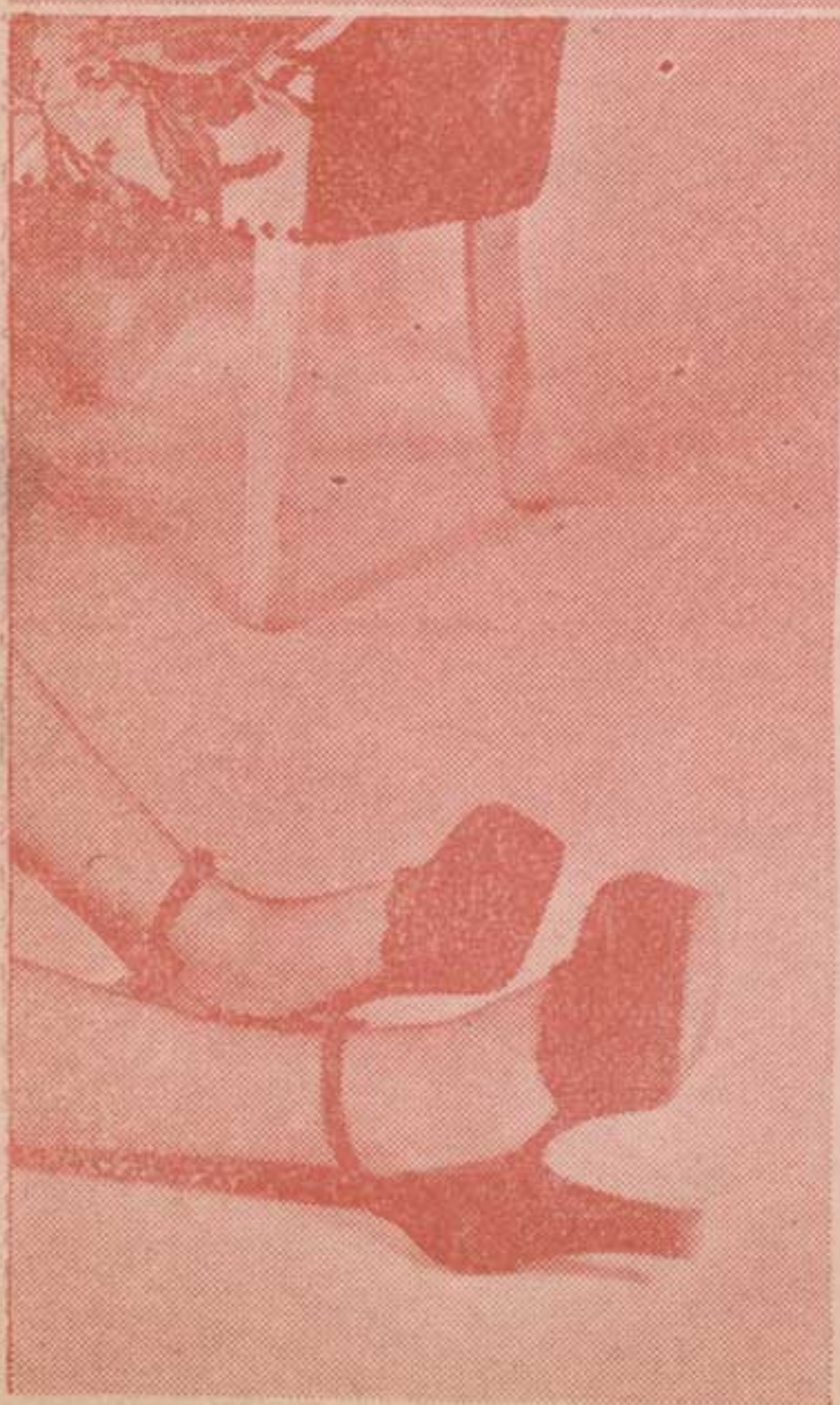


漆黒の髪が、われわれに親近感をよぶベティ・ペイジの演技は、恐怖の表情といい、苦痛を現わす全身のこなしといい、いつも、迫真の境地を現出する。それだけに、ファンも多く、今なお、この世界の女王として君臨している。





UTRIX-QT-BB35



格女
闘の

女の格闘はすさまじい。ひっかき、つねり、髪の毛をひっぱり、はては、かみつく。上になり下になり、組んずほぐれつ、あられもない姿態をさらして、ヘトヘトになるまで戦う。そこには、女の執念がこり固まり、女のどす黒い欲望が、火をふきあげて燃えている。

2 NUTRIX-QT-BB34





NUTRIX-QT-BB36

これらの写真は、すべてアメリカのヌートリクス社の
提供によるものです。日本の総代理店西出版資料会社
(代理店名・谷豊太、横浜市中央区北方町1の67・電話2-
313)で予約分売しております。小社の代理店でもお取
り次ぎいたしますから、お申し込みください。

〈サルダナパール王の大虐殺〉

血

潮

の

饗

宴

及

川

滉



死の道連れ

王宮の高い楼上の一室――。

大きく開いた窓のはるかかなたの宮門では、いましも敵味方の軍勢が盛んに凄惨な死闘を繰り返している。両軍の鐘かねやときの声がたえず潮さいのようにこの窓から室内へひびいてくる。

窓の前の広い、豪華なダブルベッドには、王宮の主サルダナパール王が、ひとりゆうぜんと片ひじついて頭をささえながら、寝そべっている。かたわらのテーブルには、重臣のカンが、王のグラスになみなみと酒を満たした。

王の寝台から一メートルばかり間隔をおいて、やはりそれと同様の超デラックスのベッドが二つ、左右に並んでいる。この二つのベッドの向こう——つまり、この室の片すみには、王の愛妾が二十数人、みんな美しい顔を蒼白にして、うずくまっている。彼女らを囲



んで、
七、八人の黒んぼの
奴隷と数人の
兵士とが、鞭や
白刃を手にして厳
重に監視してる。
長いガウンをまとった王

は、依然としてベッドに下片ひじついたまま、
愛妾たちを見すえ、

「そちたちは、きょうまで、忠実に余を慰安
してくれた。厚く礼を言うぞ。ほれ、この窓
からも見えるように、反乱軍は宮門まで攻め
よせおったわい。残念ながら、いまの余に

は、かれらを撃破するだけの力がない。たとえ降参しても、反乱軍が余の生命を奪うのは必定。そこで重臣たちのアリに火をかけさせて、余はこの宮殿とともに滅びるつもりじゃ。だが、そのあとに残るそちたち、余の情けをうけたアッシリヤ一流の美人が敵の手に渡るかと思えば、余は、死んでも死にきれぬ。まず、かわいいそちたち全部の命をもらって、それからおもむろに死んでいきたいのじゃ」
——エジプト、シナ、インドとともに、人類最初の輝かしい文明を創り出したメソポタミア地方（現在のイラク国）に、シリヤ王国が栄華を誇ったのは紀元前二千年代のこと。だが、それから一千二百年、十三代めのサルダナパール王の世になると、連綿と続いた栄華もついに行きづまってしまった。
かつて征服された国々の人民は、王の飽きることない豪奢と淫蕩に怒って、諸所に反乱を起こした。反乱軍は連戦連勝、きょうは首都ニネベ市へ侵入したばかりか、王宮を包囲して、ついに宮門に肉薄した。
ここにおいて王は、最期の覚悟をきめたものの、王宮や愛妾を憎い敵の手に渡すのがくやしい。重臣のアリに、宮殿の要所に火をかけさせる一方、カンに命じて、後宮の愛妾を

残らずこの室に監禁させたのである——。

王の声明を聞くや、二十数人の愛妾たちは、いずれもぎょっとして、化石したように息を飲んだ。だが、たちまち室内は、彼女らの哀願と泣き声とで、ハチの巣を突ついたように騒然とした。

「王さま、どうぞ命ばかりは……」

「あたくし、死ぬのはいやです」

「お願いです、逃がしてください」

すると、黒んぼや兵士の鞭が、生き物のように高くはねおどる。

がぜん、彼女らの泣き声は苦しげな悲鳴に変わった。だが、それも鞭音が高まるにつれて、しだいに静まると、がっくり彼女らは虚脱したように床に身を伏せてしまった。

ところが、ひとりの美姫がすくと立ち上がると、なまめかしい紅唇をほころばせて、

「では、王さま、あたくしを一番に血祭りにあげてくださいまし」

「おう、オナニ、そなたは、おとなしく余の命令に服するというのじゃな」

「はい」とオナニは、即座に答えたものの、つぶらなひとみは、さすがに涙をためている。

年のころ二十七、八歳、まさに脂肪ののった女盛りで、肉づき豊かな大がらの女性だ。

半月の眉に、彫刻的な高い鼻、きりっと締まっただけの唇、厚い大きなくちびる、心持ちしゃくれたあご——。

肉体の十字架

オナニはもと、ニネベ市の郊外の貧しい百姓の若い妻だった。夫が近所の地主に借金したのが返せないで、強欲な地主は、その代償として、オナニを強奪して、かれの家で働かした。彼は強欲なうえに、加虐趣味の持ち主で、しばしばオナニを責めさいなで、悦に入った。

ある日、微行姿のサルダナパール王が、三人の供を連れて、この地主の家の裏手を散歩していると、ときならぬ若い女の、悲鳴ともうめきともつかぬ、声がもれてきた。

「アレー。フ、フ、痛、痛い。うーむ。後生です、だんなさま、もう勘弁して——」

おやと立ちどまった王が耳をすますと、いまにも絶え入りそうな若い女の声。それがきれぎれにひびいてくる。

「あ、あ、いけません、死にそうです。許してください」

ちらと王は、かたわらの家来に目くばせすると、やにわに身をひるがえして家の裏門へ

走った。どうやら裏門のわきの納屋がくさい。かまわず王がそこへ飛びこんでみたが、敷居ぎわに釘づけになってしまった。

ぶらりと天井の梁に垂れ下がった一本の太い綱に、女中らしい、若く美しい女が、金髪をふり乱し、両手を縛られて、床にのた打ち回っている。ゆで卵のからをむいたみたいに、上半身はヘソのあたりまで一糸おおわぬ裸。すべすべした白い肌には、がんじょうな綱がむっちりした首筋、熟れたリングのような双の乳房、豊満な腰に食いこんでいる。

若い女は、美しい目を三角に釣り上げて、恨めしそうに、彼女の前に鞭を握って立ち上る。だか四十一年配の男を見上げている。たぶん、それがこの家の主人らしい。女の苦しむ姿を見るのが楽しくてたまらないのか、にたと満面にうす気味の悪い微笑を浮かべ、片方の口もとには、よだれさえたらしている。

この美しい女の異常な姿態は、生来淫蕩な王の好奇心を、少なからずそった。思わず見とれていると、主人はその気配に入り口をふり返った。が、まさか相手が王とは気づかない、せっかくの快楽を中断された腹立ちまぎれに大声あげてどなりつけた。

「おまえさんはなんだね、いったい？ 黙っ

て他人の家へ踏みこんできやがって！ とつと出てうせろ、さもなきやこの鞭が——」

鞭をふり上げて王につめよると、王の背後の三人の家来がはいってきた。いずれも刀に手をかけて、はったと主人をにらみつけると、「ひかえろ、百姓。このおかたをどなたと思う？ かしくもこの国のサルダナパール大王さまにおわすぞ。無礼なまねをするからには、素っ首たたき斬るぞ！」

地主は驚いた。はっと鞭を投げ捨て、王の足もとにひざまずいて、ペコペコしながら、「これはこれは大王さま、存ぜぬこととはいえ、失礼いたしました。どうか、お許しなさせていただきますませ」

王はおうようにうなずくと恥じらいに身をうつ伏せたオナニに視線を走らせて、

「きょうのところは許してやるが、早くその女のいましめをといてやれ。余はその女が気に入った。後宮へ入れてやろう」

それいらいオナニは、後宮で王の寵姫のひとりとなったのだった。

「王さま、まずあたしを——」

彼女は、深紅の長い裳裾を引きずりながら、王のベッドに進みよってひざまずいた。「うむ、あっぱれな態度、余もうれしく思う

ぞ。そちの最期のさまを、とくとこの目に楽しむとしよう。衣服をはいで、あれに横たわるがいいぞ」

王は微笑をたたえて、左右に二つ並んでいるベッドの左側のほうを指さした。

「はい」

オナニは、ためらうようすもなく、その均勢のとれた姿態を、ベッドに長々と横たえろと、静かに深紅の裳裾をはぎ取った。

雪白の肌にこんもり盛り上がった二つの丘、その頂に輝く淡紅色の乳首、ふっくらと張りきった楕円形の腹、その中央にばかりと微笑する、かわいらしいへそ、かすかに波立つ下腹、愛の泉をおおう黄金色のなまめかしいジャングル地帯、ぴたりと密着した、長い二本のすべっこい脚。

水を打ったように静まった一座が、かたずをのんでオナニの寝姿を見守っていると、さすがに彼女も恥ずかしいのか、顔を赤らめて、

「ひあ、どうぞ——」

「いい度胸だ、それ！」

低い王の声が、室内の沈黙を破ると、ふたりの黒んぼが、彼女の左右の手をつかんで、ぐっと肩の線まで広げた。白いわきの下には金髪がふさふさとそよぐ。続いて、ほかのふ

たりの黒んぼが、オナニの二本の脚のくるぶしをつかんで、彼女を身動きできないようにベッドにおさえつけた。頭を頂点にしてすばらしい肉体の十字架だ。

美女のわき腹

王は楽しげにそれをながめながら、テーブルへ手を延ばしてグラスの酒を口へ持っていく。そのとき、もうひとりの黒んぼが、ぎらぎら光る短刀をさか手にして、彼女に近づきさま、満月のように美しい左わき腹めがけて、ぐさっとばかり突き刺した。ぱっと飛び散る鮮血！

「ひえっ！」

オナニは裸身をよじらせようとしたが、四人の黒んぼの手に妨げられているので、動けない。柳眉をゆがめ、くちびるをかみしめて激痛をこらえていると、黒んぼの短刀は容赦なく厚い脂肪の層を勢いよく切り開いて、ぐぐっとへその真下に近づく。

みるみるまっかな血潮がどくどくあふれ出したかと思うと、白い腹を一面にひたして両ももの頂点のジャングル地帯へ流れこみ、真紅と黄金色の妖しい階調に輝く。

「あっ、つ、つ……」

彼女はじっとり額にあぶら汗を浮かべ、目

をひきつらせて苦痛にあえぐと、双の乳房やあばらが大きく波のようにうねる。黒んぼが朱に染まった短刀をさらに右わき腹のほうへ引き回そうとしたとき、王が声をかけた。

「これ、奴隷、こんどは場所を変えてみぞおちからヘソの上まで切って見ろ。オナニ」

「はい。王さまの仰せならば——」

金髪を両肩にふり乱したオナニの首がかすかにうなずく。黒んぼは、血だらけの短刀を引き抜くが早い、ぷっすとみぞおちの凹みへ空き刺した。

「——」

彼女は目もくらむ苦痛に悲鳴も出ず、ただ豊満な腰を上下左右に動かすだけだ。

それを見て、王は、夜のベッドでかれに愛撫されるとき彼女の悩ましい動作を思い出した。あの、言うに言われぬ恍惚感が、かれの全身に満ちあふれて、にたりとほおに残忍な微笑を浮かべると、強烈な酒を一息に飲み

ほした。

黒んぼの短刀は、もののみごとに彼女のみぞおちからヘソまで断ち割った。すでに彼女は虫の息、もがく力もない。

「黒んぼ、オナニの手足を楽にしてやれ」

王の命令に、四人の黒んぼは彼女を放して引きさがった。オナニは、左手をまげて血潮のみぞおちにあてがいながら、のろのろと半身を斜めに起こして王のほうへ向き直り、

「王さま、一思いに殺してくださいまし。オナニはもう、く、苦しくて——」

と、哀願するうちにぱたりうつ向けに倒れて、全裸の血まみれ姿をへびみたいにくねらしたが、すぐまた顔を上げて、

「王さま、ど、どうぞ早く——」

「よし、息の根をとめてやれ」

短刀を持った黒んぼが、彼女をあおむけにして、ひくひくけいれんする左の乳ぶさめがけて、柄も通れとばかりに刀を突き通した。

吊るされた狂婦

王は、血走った両眼をかつと見開いて、

「次はスージーだ。ここへ連れて参れ」

その声に応じて、四人の黒んぼが、スージーと呼ばれる愛妾を、むりやりに王のベッドの前に引きずりすえた。彼女は、オナニとは違って、ほっそりした美人で、切れ長の憂いをおびた目にいっぱい涙をたたえて、なよやかな肩を震わせ、

「王さま、あたくしだけはお許しなさってくださいまし。実は、王さま、あたくしは、王さまの大事なお胤を宿して、はや四月、無事に生み落とすまでは——」

「なに、余が胤とな？」

血に飢えた王も、これにはやや顔色を変えたが、首を振って、からからと笑いながら、

「わがアッシリヤ王朝は、余をもって滅亡するのじゃ。そんなものはいらぬ」

「ま、王さま、なんとしたことを仰せられます。こ、これ、この通りです。ご慈悲を——」

いどみかかるように立ち上がったスージーは、いきなり薄い絹のドレスを上半身から脱いで、その肌を王の眼前にさらした。痩せているので、ドレスをまわっているときにはわ





からなかったが、こうして見ると、細い首や腕にくらべて、統ひとのような白い下腹がむっくり異常にふくらんでいる。

「これはおもしろい。ただちにわが子に見参するでしょう。それ、この女を天井から吊り下げる」

「王さまの人でなし。鬼、鬼だ。よくもわが

子を——」

スージーがヒステリックにわめき立てるのを、数人の黒んぼが手取り足取りして取りおさえて、太い綱で両手を縛ると、天井から王のベッドの前に吊り下げた。

「アレ、助けて！」

彼女は、小さいながら形のよい乳ぶさもへ

ソもむき出しにして、金切り声をたてる。両足をばたつかせてもがくので、ドレスが細い腰のまわりからはずれて、両足にまつわりついていた。

「まずヘソの下から割ってみろ」

王のさしず、黒んぼがオナニの血を吸った刀をかざして、ヘソの真下に突き刺すと、だらだらと血潮が、腹からドレスへしたたり落ちる。

「あ、つ、つ、つ……」

彫りの深い、艶麗な細面に、ぞっとするようないれんが走って、小さなくちびるがきゅっとゆがむ。

やけに両脚があらわれるので、ふたりの黒んぼがそれを左右からつかんだ。

斬り役の黒んぼは、突き刺した刀を、金髪きんぱうの密生する恥骨まで切り下げると、ぐいとねじって左へ三センチ、ここで刀を引き抜くと右方へもまた同様の長さ(おちうた)に切り開いた。ぞろりと血まみれの腸(ちうた)がのぞく。

「王さま、く、苦しい。王さま——」

それをどこ吹く風と王は聞き流しながら、グラスの酒を口に含んで、

「どれ、余の子はどこだ？ まだ見えぬぞ。そうだ、あそこをやってみろ」

王があごをしゃくると、黒んぼは、血まみれなドレスを無慈悲にはぎ取って床へ捨て、金髪におおわれた、両ももの頂へ太ももの間から刀を刺し入れた。こぶし大の血の塊が、ぼとぼと一つ二つ、太ももを伝って落ちる。彼女は、細長いからだを弓のようにくねらし、切れ長の目が飛び出すほど見開いたまま頭をたれて失神した。すると、王は、もはや興味を失ったのか、第三の寵姫を指名する。

こうして、王は、左右のベッドやその付近で次々に七、八人の女を、殺して、かろうじて、滅亡の悲哀をまぎらわせた。それは、最初のオナニから、時間にすれば、まだいくらでもなかったが、宮殿の要所々々にかけた火は、早くも勢いよく燃えてきた。もうもうと立ちのぼる煙は、窓から室内へ流れこみ、あたりは薄暗くなった。

夜の牝豹

そのとき、紫のガウンをまとった、中肉中背の端麗な美女が、王のかたわらに進みよる。

「王さま、あたしを、お忘れになったんですか？ お恨み申しますわ」

これは、かつて王が攻め滅ぼしたメジヤ地方の貴族の娘で、名まえをセンナという、後宮

でも最高級の美女だ。オナニなどとは全くタイプの違う、雨にそよぐシユウカイドウの花といった趣の可憐で上品な女性。

だが、夜の寝室では、忽然としてメヒヨウとなつて、なまめかしいたくましさを発揮して、いつも敷布をしわだらけにする。だがその一面、交情の最高潮のおりには、いまにも絶え入りそうなすすり泣きをもらす不思議な女性だ。王には、そのすすり泣きが、まるでしめやかな音楽のように深く胸にしみこんでいた。

「センナか。そちを忘れたのではない。最後の楽しみにわざと残しておいたのじゃ」

「いやですわ、王さま。早くお願いします。あたくし、臆病者おびやうもと思われるのがいやでございますわ。きょうこそは、あたくしも昼間の羞恥心を忘れさせていただきます。あとう、一度きりでけっこうです。今生の思い出に皆さまの前で、しっかりとあたくしを抱いてくださいまし。そして、あたくし、いさぎよくあの世へ——」

「では、ここへ上がるがよい」

王がかたわらを指さすと、彼女はいそいそとベッドに上って、一瞬の間、見ている前で、なれなれし／＼王の右側に寄り添った。

元東京中野病院外科部長 上谷文一著

慢性淋疾短期根治

★新薬盲信の害即ち慢性淋疾の本態尿道側管淋の病理を明らかにし側管壁に生成される防壁の為薬剤は菌に到達不能となり根治至難再発する理由★現行全療法の慢性淋根治至難の理由★難治淋を一回淋糸消滅十日以内絶対根治の合理的無痛無害直接殺菌の一方方法説明★全国根治患者礼状集

価送料共百円

発行 東京都中野区宮園通り四の五

上谷外科医院

発売

東京都中野駅前20番地（南口大通百米左側） 宮園書店

「王さま、きつくきつく、あたくしを抱きしめて」

「遠慮はいらぬ。さ、そのガウンを脱いで裸になるがよい」

「は、はい——」

いざとなるとセレナも恥ずかしいのか、からだを堅くして、かれのかたわらにもじもじしている。

「これ、センナ。早く脱がぬか。きょうこそは、夜のメヒヨウになると言ったではないか。余は急ぐのじゃ。まだ始末をつけねばならぬ女どもがうんと残っている——」

「――」
 セナは、ますます小さな頭を王のあごの下に埋めて、びたりとしなやかなからだを、王の右腕に密着させた。

「いまとなって恥ずかしがるには及ばぬ。家来どもの目はみんな節穴同然じゃ。これ、どうしたというんだ、センナ？」

王が左手を伸ばしてむぞうさにセンナの紫色のガウンをはこうとしたとき、さっと彼女は上半身を起こして半裸となった。次の瞬間、ガウンの下に隠し持っていた抜き身の短剣とともに、そのからだを王のみぞおちめがけて激しくぶつつける。

「あっ！」

ふいをくって王が、急所の痛手にひるむのを、すかさずセンナは短剣に力をこめて、ぐりぐりと深くえぐる、さきに王が美女たちを虐殺したときとちょうど同じように――。

「お、おのれ、だましおったな！」

わななく右手で王がセンナの腕をつかもうとすると、彼女は身をひる返して短剣片手に両足開いてベッドに立ち上がった。いつか紫のガウンは肩からはずれて、パンツだけのみずみずしい裸体だ。立ちこめる煙のなかに、金髪は両肩になびき、青白い顔はものすごい

までに牙えかえる。

纖手に光る血潮の短剣、返り血を浴びた、しなやかな胴、すらりと伸びきったメジカの脚。見る者を悩殺せずにはおかぬ、凄艶きわまりない風情だ。王はすでに飛びかかる気力もうせて、彼女の足下に傷口をおさえてのた打ち回る。

思いがけない異変に、黒んぼや家来たちがぼうぜんとしていると、彼女はきらめくひとみを向け、

「あたしはいま、鬼にもひとしい、この恐ろしい王を、皆さんに代って刺しました。だがあたしもメジヤの貴族の娘、皆さんの手に裁かれるまでもなく、自分の罪は自分で償います。これ、こうして――」

短剣一閃！ 彼女は、左わき腹にぐさと突き立てざま、左手を柄に持ちそえて白絹の柔肌を右斜めに切り下げたが、さらに、

「い、いえっ！」

美しいくちびるをかみしめて、額に深く縦じわ一つ、両手で腹の刀をねじりながら、こぼれる血潮のなかで、がっとうのあばらへ切り上げた。ぐらりと上体がゆらめき、ベッドに腰を落とすと、ほおに乱れる金髪を、首を振って払いながら、ほっと一息ついて、

「皆さん、まだいまのうちならここを脱出できます。すっかり火の手が回らぬうちに、早く逃げてください。降参すれば、きっと敵も許してくれましょう。さ、さようなら」

このありさまを、かたわらのテーブルで見ていた重臣のカンが、大声で叫んだ。

「もはや暴君はセンナ殿の手に倒された。恐れることはない。みんな一刻も早く、ここを落ちのびることにしよう」

かれは、黒んぼに命じてドアを押し開かせると、一同とともに室の外へ走り出る。

あとに残ったセンナは、ベッドに上半身を埋めていたが、頭をもたげると、腹ばいながら、断末魔の苦痛にあえぐ王ににじりよった。

「王さま、許してくださいまし。あたくしは心から王さまを愛して、どんなご無理でもいままでは聞き入れました。だが、きょうのことはかりは、人間として見のがすことができません。いっしょに地獄へ落ちましょう」

彼女は、震える手で、かたわらの短剣を王のうつろな片手に持たせて立てると、どうとばかりにその切っ先の上に、彼女の血だらけの裸身を投げかけた。すると、熱気をはらむ灰色の煙が、たちまち四方からふたりを押し包んでしまった。

女

枝吉
子・え

ける。そんな女を
うな尻を叩いた！

悦子の左手首の内側には、長さ三センチほどの傷跡があった。
「ずいぶんロマンチックなアクセサリーだね」と、私はそこへ目をやりながらいった。
「わかる？」

1



悦虐の彷徨 ⑤

傷あとのある

青山三

田上恵

縄が湯に濡れて、キリキリと縮みあがり、白い肌を、容赦なく締めつ
私は、うつ伏せに押えこむと、スリッパをムチの代わりに、白桃のよ

悦子は本能的な動作で、その赤紫色の傷跡をかくした。

「わかるさ」

私はいささか得意になつてうなずき、ビールのコップを口にはこぶ。わかる、
ということばには、意味があった。

睡眠薬をのみ、それからカミソリで手首の動脈を切る、という自殺の方法を経
験した女だということが、私にはなぜかピンと感じられたのだった。

悦子は、ふいにカンだかい声で笑った。そして、

「あたしにもおビールちょうだい」

と、やや乱暴にいつて、私のコップをひき寄せ、のどを鳴らしてのみほした。
自分にまつわりついている暗いかげを、バカ笑いと荒っぽいビールののみかた
でごまかしているようにみえた。そんな悦子に、私は興味を抱いた。

そこは「白夜」という名のバーだった。このバーへかようのは、私の日課にな
っていた。私には、この店での飲み食いはすべて金を払わなくともよい、という
特権があった。むろん、この恩恵には理由がある。

私はミューズ毛織株式会社の宣伝課員で、雑誌の編集をまかされている。
印刷・製本・発送の仕事は、市内の松栄印刷という印刷工場に、すべてゆだね
てあった。一般消費者むけと、問屋小売り店むけの二種類のPR誌を発行してい
るので、総部数は合わせて毎月十二、三万部になる。

これは、地方都市の印刷会社にしては、巨額の受注であった。

松栄印刷がミューズ毛織の宣伝課員と仕事のうえのうちあわせをしたり、接待
する場所がすなわち「白夜」であり、私たちに、自分たちだけでの飲み食いも、
いっのまにかタダになっていた。

黙っていても、請求書はママの手から印刷会社へまわされる。大げさにいえ
ば、これは一種の汚職であった。

したがって、独身者の私は、ひんぱんに「白夜」へかよう。ずうずうしくも、

★前号までのあらすじ

私(松平)は、大学を出たがサラリーマンになるのがいやで、花村駒代一座という旅まわりの女剣劇一座の裏方に雇われた。

娘形の花村あやめは、座長の駒代の妹だがマゾヒストである。秋田県のある小都市で興行をうったとき、彼女は、私をある旅館へ誘った。そして、用意してきた縄を取り出して縛ってくれという。緊縛の中であやめは陶酔し、愉悅して、私と結ばれた。

そんなところへ、座長の旧友のむすこの阪東紅也という十七歳の少年が入座した。ある日、私は、芝居がハネて旅館へ帰ってから忘れ物に気づいて楽屋に戻った。そこで、駒代が紅也を責めている姿を見たのだが、私のうしろにはあやめがいた。

それが刺激となって私は、紅也を連れ出し女装の彼を縛りあげ、鞭でさいなんだ。あとをつけてきたあやめが、その場にとび込んできて、嫉妬の刃を私にふるった。

花村一座にいにくくなった私は東京へ舞い

戻って、場末の芸人アパート共楽荘にころがりこむ。女漫才春風さくららの、若いツバメになったのだ。

その隣室に、浪曲家東家不二丸が住んでいたが、彼は夜ごと女房を縛って楽しむサド趣味の人物だった。

私は、その奇妙な情事をのぞき見していたが、ある日、同じアパートに住む少女歌手南条マキを縛りあげてさいなむ現場を目撃した。マキが海老責めにされて尻をたたかれる光景は、私の嗜虐性を堪能させた。

やがて芸人たちは地方の夏祭りに買われて行き、私はまた雇い主を失う。そこで大学の先輩西条を頼って、東海地方の中都市にあるミューズ毛織会社の宣伝課に勤めることとなった。

仕事の上で知り合った三沢京美というモデルは、ロングヘアのエキゾチックな女。私は彼女と結ばれ、縄の味を教えこむ。そのうえ彼女のアパートで加虐の快にあえぎ、彼女が大切にしている髪の毛で、彼女自身の排泄した尿をふきとりさえしていじめた。

朝晩の食事まで、そこでとるようになった。ママにわがままをいって、味噌汁までつくらせた。

悦子は、東京から流れてきた女だった。流れてきた、といういい方はややキザだが、いかにもそんな感じがあてはまるふんい気をもっていた。

しかし、すすんでいるとか、くずれているとかいうのではなくて、ちょうどその一步手前のところを、りこうさと理性で踏みとどまっている、といった感じだった。人なみ以上の苦勞のひだや、ナゾめいた過去の陰影が、ふとした表情ににじみでて、私を惹きつけた。

年齢ももう二十五をすぎているのだろう。客の前にいても、ふいに

沈んだような目の色になって、白い指さきを酒で濡らし、テーブルの上に字とも絵ともつかないものを書いている。

私と悦子は、どこかウマの合うところがあって、いつのまにか、どちらからともなく、妙な関係にはまりこんでいた。

そのころ私は、仲よくしていた女と離れて、心に空洞があいていた。ファッション・モデルの三沢京美と別れたのだ。

京美は、彼女の全生活のめんどろをみてくれる豪勢なスポンサーがついて、モデルをやめ、私には手のとどかない女になっていた。テレビやラジオなどをつくっている某電機メーカーの部長さんが、そのスポンサーということだった。幸福そうな顔で彼女は私にさようならをいった。

2

私は、悦子といっしょにいるとき、いつも安らぎに似た気もちをおぼえた。年齢も人生経験も私よりだいぶ上の女という意識があって、しぜんにあまえるような心になる。

——どうせ結婚するのなら、こんな女がいいかもしれない。あねさん女房というやつで、なんでもまかせられる。

私はそんなことを思った。

土曜の夜から日曜を利用して、私と悦子は、よく私鉄にのって、市内から一時間ほど離れた町へ行った。そこは陶器の産地として知られ、アユで有名な川の流れに沿った景観のよい町だった。

旅館はいつもすいていて、よけいな気がねをせずすむ。はじめて悦子に縄をみせたとき、

「へんなことするのね」

低く静かに彼女はいった。嫌悪の表情はなく、くすぐったそうな微笑をうかべた。そしてなんの抵抗も忌避も示さずに、すなおに縛られた。

「前にもこんな遊びをしたことがあるのかい？」

私はひょうしぬけだった。いくら私がその場のムードをつくるテクニクになれているとはいえ、あまりに反応がなさすぎた。

「まさか——」笑いながら彼女はこたえる。

「あなた変わってるわ、縄まで用意してあったのね。でも、おもしろそうだわ」

おどろかないのが、私にはものたりなかった。

「ようし」

私は、力をこめて縄をしごいた。女のからだをうつ伏せにして、肩からあらわにむきでた両腕を背中になまし、手首からぎゅちりと縛りつける。つぎに前へまわし、胸に縄をかける。まるで死んだように無抵抗なからだを、じゅくりと力をいれて縛りあげた。

悦子はかすかに、うめくような声をもらしながら、まだ無言だった。二の腕のやわらかい筋肉や乳ぶさのなかに縄が沈みこむ。

第一回めにしては、すこし強く縛りすぎたかな、と私は思った。

「痛くないかい？」

心配になってきいた。

「痛くないわよ。平気よ」

ふとんに顔をうめたまま、悦子はつぶれたような声で返事する。ふてくされたような、投げやりな女のからだだった。

私が汗をかくほど力をいれているのに、縛られながら女の心は、ど

こか遠くを思っている、といった感じだった。私はムキになって、まるでこも包みの荷物でもくくるようにして、悦子をぎりぎり縛りあげた。

「どうだ、恥ずかしいだろう。こんな格好に縛られて」

私は息をはずませていった。

「べつに恥ずかしくもないわ。あなたと私とはもう恥ずかしいなんて仲でもないし」

負け惜しみでもなさそうだった。

たしかに、このふたりだけの部屋には、なまめいた夜の体臭が満ちていた。縄をまとった悦子には、昼間とはちがった異常なエロチシズムがうごめきだす。

「ようし、スリルを与えてやる」

私は一計を思いついた。縄じりをつかんで、女のからだを引き起こした。悦子は下着もつけていない。

「さあ、起きて、このままでもう一度風呂へいくんだ」

私の命令にさすがに悦子はあわてた。

「いやよ、こんな格好で」

肩をふってしりごみした。風呂へ行くには、この部屋を出て、廊下をかなり歩かねばならない。

「ゆかたぐらいは着せてやるさ」

旅館のゆかたを、悦子の肩からかぶせてやった。帯紐もゆるやかにむすんでやる。悦子の両腕は背後に縛りあげたままである。

私はドアをあけて、彼女の背を廊下へ突きだした。

「あッ」

声をあげそうになるのをこらえ、悦子は室内からよろめき出た。ゆ

かたの裾前が、しどけなくひらいた。
「だれかに会ったかどうかするのよ」

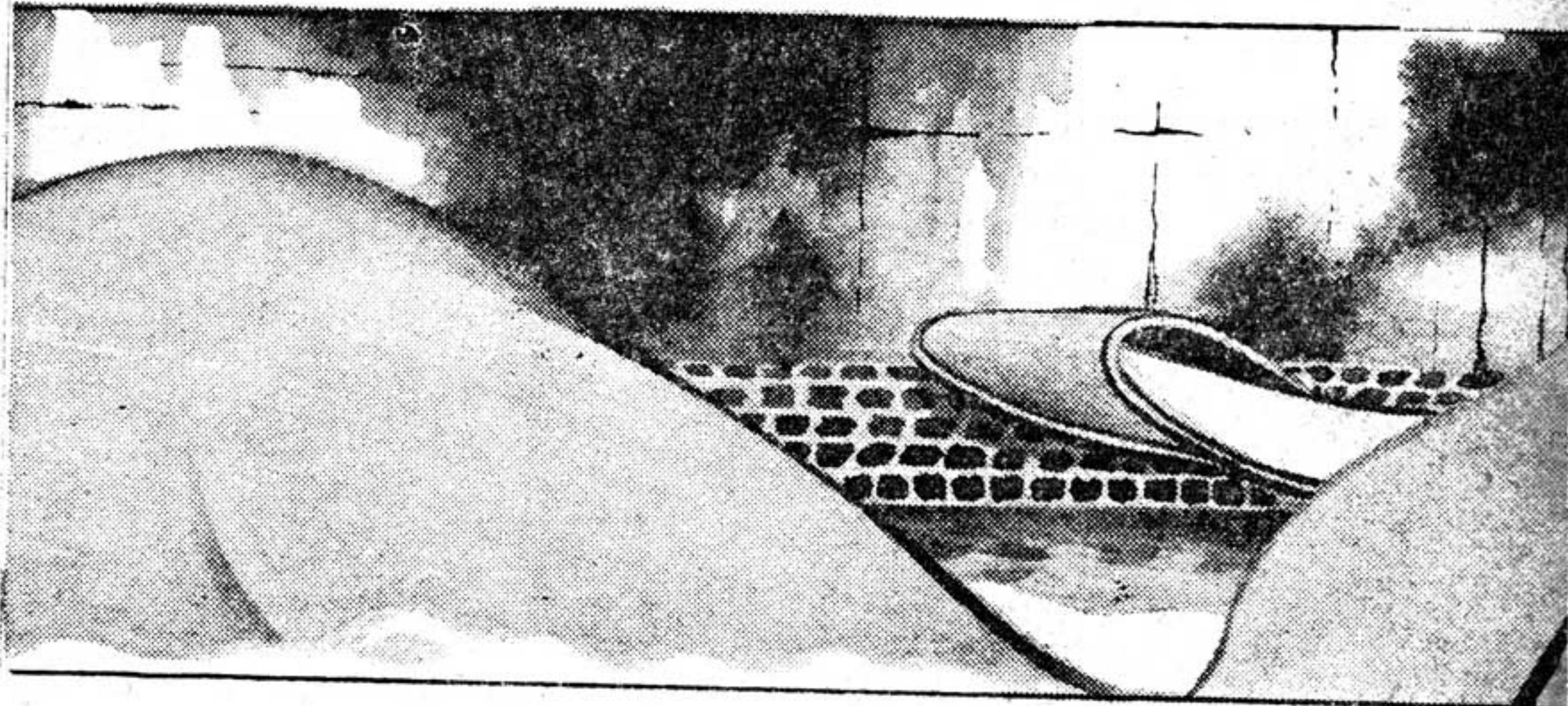
悦子はうろたえていた。

縄目はゆかたに隠れているが、ふわふわとふくらんで、だらしのない不自然な着方だった。他人が見たら、すぐ怪しむだろう。

「わかりやしないさ。人がきたら、うまくごまかしてやる」

愉快的な遊戯だった。

団体客でもないかぎり、旅館の廊



下をそんなに人が往来するものではない。しかし、油断はできない。

私は縄じりをとって、女囚のように悦子をひきたてた。こんなところを他人に見られたら一騒動になる。人けのないのを見すまして、縄じりの余りでびしッと女の尻を打った。快感が閃光のように、私の背骨のあたりをつらぬいた。

「どうだ、恥ずかしいか」

「恥ずかしいわ、女中さんにでも見られたらどうしよう。弁解もできないわ」

泣き声で、すなおにいった。だが、悦子も、このスリルに富んだ遊戯に、興味をおぼえたらしい。大きな抵抗はみせないのだ。

私は、縄じりのムチで、馬か牛でも追うように、悦子の尻を軽くたたきながら廊下を歩かせた。

ふいに、行く手の曲がりかどから、男女一組の客があらわれた。こっちへ歩いてくる。

ぎくりと、悦子の足がすくんだ。

「どうしよう」

かすれ声で、肩をすくめた。

「あわてるなよ。平気で歩くんだ」

私は彼女の背へ片腕をまわし、寄りそって歩いた。

先方の男女は、私たちから目をそむけるようにして、うつむきかげんのまますれちがった。

「ふふふ、スリルだったな」

うれしくなり、私は笑った。

「ひざがガクガクしたわ。いじわるね」

もうそこは家族風呂でガラス戸の前だった。私は戸をあけると、悦子のからだを押しこんだ。

3

浴槽も流しも清潔なタイル張りだった。岩の刻んだシシの口から、湯はもったいないほど豊富にあふれていた。

「縄をといて」

ここまできたら当然解放してくれるつもりで悦子がいった。

「ダメだよ。そのまま湯へはいるんだ。きみのからだは、ぼくが洗ってやるよ」

私はさきに湯ぶねのなかへとびこみ、タイルの上に足をすくませている悦子をながめた。わざとじろじろ、執拗にながめまわした。

「いやッ、いやッ」

悦子は流しの上に、ぺたりと腰を



おろしてすわりこんだ。こっけいな姿だった。うしろ手に縛られ、二つの乳ぶさがくびれるほど胸にも縄を巻かれた裸身が、立つことも動くこともできずに、タイルの上になぞくまっている。

「いい湯かげんだぜ。はいれよ」

のんびりとあごまで湯にひたりながら、私は声をかける。

「ひどい人ね」

「きみの本性をみてやるのさ」

「自分の本性のほうが、さきにあらわれたわ」

悦子も負けていない。私は湯ぶねから出ると、また女の縄じりを手にとった。

「さあ、立ちなよ。いっしょにはいるんだ」

「いやッ」

私は悦子をひきずり、抱きあげるようにして、むりやり

浴槽のなかへ沈ませた。

いきおいよく湯があふれた。

「こわいわ。すべったら溺死^{できし}しちゃうわ」

「だいじょうぶだ。縄じりをしっかり握っていてやる」

私は悦子のからだを湯のなかに置いたまま、タイルの上で自分の背中を洗った。

そして、女の肌をいましめた縄が、水分を吸って縮むのを待った。痛くも恥ずかしくもないと強情を張った女が、どんな悲鳴をあげるか、それをにやにやした思いで期待した。

の重役は因循姑息、とうていこんにちの流行センスを理解しがたい頭の持ち主であった。そのくせ、宣伝課のこまかい仕事の内容にまで干渉し、隙あらば予算を縮小させようとする人物であった。

中小企業には珍しくないタイプの重役である。西条課長は若いし、血の氣が多いから、ひごろのふんまんをついにバクハツさせたのであった。

西条は、放浪の私を救いあげてくれた恩人である。私はいさぎよく西条と行動をとみにした。

ミューズ毛織を退社したあとの西条の計画する事業は、新鮮味があって、いささか魅力あるものだった。

東京へもどって、新しくPR雑誌の編集を専門に請け負う会社を設立しようというのだ。私は両手をあげて賛成した。東京で仕事ができるというのもうれしかった。

準備期間をへた三カ月後、西条は神田駿河台に事務所をもって「経営指導宣伝センター」という小さな、しかし活気にあふれた会社をつくった。

むろん私もこれに加わり、編集者をもうひとりと、女子をひとり雇い入れて、仕事はぼつぼつ軌道にのっていった。

半年ばかりたったある日の午後、校正刷りに目を通して私の横で、卓上電話が鳴った。無意識に腕をのばして受話器をつかむ。

「はい、宣伝センターでございます」

先方は私の声をすぐききわけたらしく、

「ひさしぶりね。あたし、悦子です、ほら、白夜の」

といった。

「いつ東京へ出てきたんだい？」

「もう半年ばかり前よ。白夜はやめちゃったの。いま池袋のほうのアパートにいるのよ」

「だったら、もっと早く電話してくればいいのに。薄情だな」

「あら、薄情はどっちなしら」

私は、悦子と別れのことばらしいことばもかわさずに、東京へもどってしまったのだ。あとから手紙に書いて事情を知らせたが、すくなくとも、七、八度は孤独な夜をなぐさめあった仲だった。

もっと情緒をこめた別れかたをしてもよい女だった。

「お忙しいんでしょ。お仕事うまくいっているの？ 西条さんもお元気？」

「元気だよ。電話にだそうか」

「いいわよ、わるいわ。いまはもう西条さんも社長さんなんでしょ」

「社員が三人しかいない会社の社長さ。前のかれと変わりないよ」

「でも、恥ずかしいわ、なんだか」

悦子の声をきいているうちに、私の鼻さきに、彼女の愁い^{うれ}がちの白い顔や、肌のおいが、よみがえってきた。さすがに、なつかしい思いがした。

その夜おそく、私と悦子は、あまり上等でない温泉マーク旅館の一室にいた。

その部屋の窓からは、東京タワーが意外に大きく、夜間照明に浮きあがって見えた。赤や青や黄色の電球を飾りたてたエレベーターが、鉄骨の塔の中心部を何度も上下に往復している。そんなおもちゃのような都会の夜景がベッドの上に寝ころんでもながめられた。

「今夜は、あの、へんなこと、しないの？」

悦子は私の耳にささやいた。

「へんなこと？」

ききかえしたが、すぐにわかった。

「思いだすわ、スリッパの味^{あじ}」

悦子はつぶやいた。

「味^{あじ}はよかったな、ははは」

私は声をあげて笑った。

「痛かったから、いつまでもきのうのようにおぼえているのよ」

「痛いなかに、おれの愛情がひしひしと感じられただろう」

「感じたところではなく、きざみついちゃったわ」

冗談めかしている、のどを鳴らして悦子は笑った。

「今夜も縛ってもらいたいのかい？」

私はきいた。女は黙って笑っている。

「このつぎにしようよ。今夜はおれ、疲れてるんだ」

実際、私は疲れていた。

「また会ってくれるの？」

「きみさえよければ」

「あなたもそろそろお嫁さんをもらわなけりゃいけないわねえ」

ふいにそんなことをいった。そして、ものうげな、

やつれたような顔をみせた。目のしたが、すこし黒

ずんでいるようだった。

「からだのぐあいでも悪いんじゃないか」

「べつに、そんなことはないんだけど」

悦子は、ふいにカンだかい声をあげて笑った。空

虚なひびきをもった声だった。

以前、左手首の自殺未遂の傷跡を私にみとがめられたときに発した笑いかたと同じだった。私はその手首のほそく肉のもりあがった傷跡を自分の胸もとにひき寄せ、なんということもなく、愛撫した。

5

それから二度、東京タワーの見える二階の部屋で、私たちは夜をともにした。

悦子のほうから電話をかけてくる。私は彼女の過去や現在の生活をたずねることはしなかった。悦子も語らなかった。私がそのほうに触れると、ことばを濁らせる。この恋愛は、世間的な常識からいってたら、ふまじめなものにちがいない。私たちは合意の上で、いつときの情事だけをたのしんだ。それ以外のわずらわしいことは、お互いがいっさい避けあった。卑怯^{ひきょう}で臆病^{おくひょう}だったともいえるだろう。

三度めに電話で誘われたとき、私は縄を用意した。

「縛ってよ、うんときつく。うごけないほど。息もできないほど。このままいつまでも縛られていたいわ」



その夜、悦子はうわごとのようにいった。なにか、ヤケになっているとも思えた。

いつもの部屋はふさがっていて、その夜の窓からは、なにも見えなかった。窓をあけると、カレーライスのおいがただよってきた。妙にわびしくそれがにおった。

私は窓をしめ、悦子の望みどおり、念入りに縛った。

「やさしい人ね、あなたって、あなたと結婚したかったわ」

縛られながら、そんな珍しいことをいった。結婚などという語句を口にするのは、はじめてだった。

「こんな乱暴な、いやらしいことをする男を、きみはやさしいって言うのかい」

私は苦笑した。

「あたしにはべつにマゾッ気^けなんてないけれど、あなたの縄の意味はわかるわ。愛情が強烈なのよ。だから相手を縛ってしまうのよ。男性的な愛情だわ」

私は苦笑をつづけた。この性癖に、こんなうれしい理解をしてくれた女はいない。悦子は酔っているのだろうか。酒の強い女だった。いくらのも顔にでない。

「きみはもともとマゾらしいな」



「ちがうわ。だって縛られたって、ちっともいい気もちじゃないもの。苦しいだけよ。でも好きな人になら、なにをされてもいいの。こんな気もちがマゾッていうんなら、女なんて、惚れた男に対して、みんなマゾよ」

きれぎれの息をつきながら、悦子はそんなことをいう。やはり酔っているらしく、うるんだような目つきである。

私はゆっくりと時間をかけて、女の両腕を高手小手という形に縛りあげた。

両手首を肩のあたりまでしぼりあげておいて、堅くとめた。

「苦しいだろう」

「苦しいわ。死にそうなくらい。このまま死んでしまいたいわ」

悦子は目をとじ、顔の色が白くなった。

「殺してやろうか」

むろん、冗談だった。

悦子のまぶたがふるえた。

「うん、おねがいするわ」

電灯の弱い光線のかげんか、くちびるの色まで青ざめていた。

「苦しければ縄をゆるめてやるよ」

私は心配になっていった。縄に締めつけられた筋肉が、縄と縄のあいだから、ぶっくりとはちきれそうにとびだしている。背中にねじまがった腕はつめたくなっていた。

「いいのよ。このままにしておいて」

悦子はなおも目をとじたまま、じわじわと肌身に噛みこんでくる縄の感触を味わっているかのようだった。

そんな女の哀れっぽい姿態をみているうちに、ひとつの感動が私の

胸底から、青いガスの炎のように突きあげてくる。

「それじゃ、今夜はたっぷりといじめてやろう」

室内に小さなテーブルが備えつけてある。水さしやら茶わんやら灰さらがのっている。それらのこまかいものをかたづけて、テーブルを中央にひきだした。

ベッドから悦子のからだを抱き起こし、そのテーブルの上に腹ばいにさせた。うしろ手のままだから、不自然なかなり苦しげなポーズになった。

「なにをするの、つめたいわ」

テーブルの上に、水がこぼれていたのだ。悦子は自分の重みで自分の乳ぶさをおしつぶし、男のような声をだしてうなった。

腰から、だらりと床にたれさがっている二本の白い足を、足首からテーブルの脚に縛りつける。ひざの上あたりも固定させる。

すると、臀部がたかく上につきだした格好になった。猟師にいけどられた白いみだらなものののように、ぶざまな姿だった。西欧の国の、昔の刑罰の絵を想像させた。尻打ちの刑である。

むろん私も、その目的をもって、テーブルの上にはわせたのであった。

「スリッパがいいか。ベルトがいいか」

私は芝居めいた口調でいった。

「スリッパがいいわ。ベルトはいやよ。痛そうだわ」

たたかれるのを待つ女の口から、スリッパがいいわ、などという願望がでたことは、嗜虐者の心をいたく刺激し、たまらなくかきたてる。

それは絶対的な屈従の運命にあきらめた女奴隷のことばなのだ。

この旅館のスリッパは、妙にあつぽたい、ぽてぽてした安物のビニールでできていた。じょうぶ一点ばりのスリッパである。これなら長もちするし、盗まれもしないだろう。

私はそれを片手につかんだ。

はじめはやさしく、尻をたたいた。軽い音と柔軟な反応があった。

ころよい弾力に、私の手はしびれそうだった。

つぎに、やや強く打ちすえた。

ベタンッという、重い音がはねかえった。まるい白い尻に、スリッ

パの底のよれがついた。

嗜虐的ながめだった。

腕をふりあげ、強く打ちおろした。

「うッ」

と悦子はうめいた。胴がくねり、背中に縛られているのひらが、痛みを握るようにこぶしをつくった。左右の肩が、せつなげな呼吸をはじめた。

胸のふくらみも腹も、テーブルの上にぴたりと密着し、足を縛られているために身動きできないのだ。

ベタリ、ベタリ、ベタリ！

いやに卑猥な音がでた。その音にこたえるかのように、むくむくと白い隆起がうごめいた。

「痛い」

私はようすをうかがった。

「うッ、うッ」

という、うなり声が返事だった。

私は次第に興奮していった。太ももと尻を交互にたたいた。あつい

肉はぷりぷりとはずみ、ふるえた。そして、赤みを増していく。

子供が祭りの太鼓をたたくように、私は夢中でたたきつづけた。思えばひさしぶりに没頭する遊戯だった。

やがて私は疲れ、スリッパを投げだした。長いサディズムの時間が過ぎたと思ったが、せいぜい七、八分だったろう。

悦子はぐったりとうつ伏している。

「おい」

私は悦子の顔をのぞきこんだ。

女の目も鼻も口もぬれていた。涙だった。テーブルまでをぬらししていた。

「どうしたんだい、だいじょうぶかい？」

私はびっくりしてきいた。

痛くて涙をこぼしたのか、それも私の興奮に調子を合わせて泣いたのか。

「ううん」

悦子は顔を横にふった。そして、ぐっしりとぬれた涙の顔で、私に笑ってみせた。

6

それから三日後の新聞の夕刊で、私は悦子の自殺を知った。

同棲していた二十七歳の男と、池袋のアパートの自室で、服毒心中したのだ。

男と女のまるい小さな顔写真がのっていた。

私は信じられなかった。ぼうぜんとして、いくども記事を読みかえ

した。

女の名は、塩満悦子とでている。珍しい姓だから、同姓異人ということもない。

第一、写真の顔が悦子である。その顔は柔和な微笑をうかべていた。

相手の男は、〇〇組の幹部とかいうやくざだった。りこうな悦子が、どうしてそんなやくざの男と同棲するような境遇に落ちこんでいたのか。

心中の理由は不明、と新聞にはでている。どちらから心中なんかをもちかけたのだろうか。私は想像に苦しんだ。

考えてみれば、私は悦子の身の事情を、いいや、彼女の心のなかの一片すら知っていなかった。

けっきょく、私は彼女をおもちゃのようにしか、とり扱っていなかったのだ。

私は悦子との最後の夜の、あのぐっしりとぬれた涙の顔を思いうかべた。

あのとき、すでに死を決意していたのだろうか。一度自殺に失敗した人間は、二度と自殺をしないという話をきいたことがあるが、ウソではないか。

私にはなぜか、この心中は、女のほうからもちかけたのではないかと思えてならない。やくざなんかに、自殺をする勇気があるだろうか。

過去、私は数人の女と知りあい、異常な交遊を経験してきた。いろいろな女がいた。しかし、悦子こそがほんとうの被虐の女ではなかったか、と私は思うのだ。

サド・マゾ・フェチシストにひそかに贈る 泰西出版資料の2大コレクターズ・システム



第1類 ヌートリクス社出版物の中から
最上の選択で毎月定期的にお手元に
最低の費用で資料をおとどけます。

全30回 30カ月にわたる月ぎめ
コレクション

初回 5000円、以後毎月 2000円

第2類 ヨーロッパの同好者が贈る個人作品の
分割20カ月にわたる大集成
初回 5000円、以後毎月 2000円

○ゴルドン社版短期収集会

5カ月で各種の収集全部がそろふ。

初回 10,000円、以後毎月 2000円

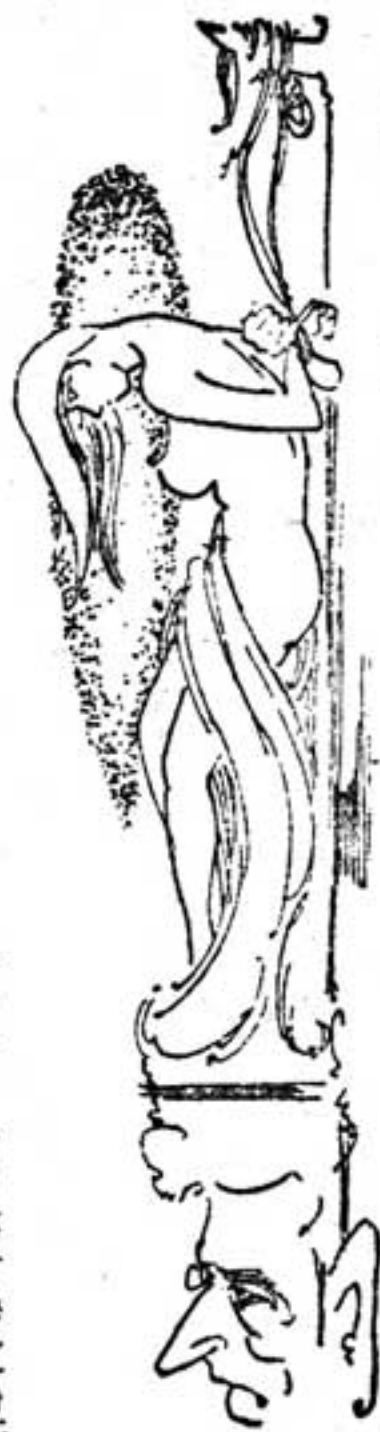
○夏期特別予約

ヌートリクス社小冊子3冊1組の廉価集

(いずれもくわしくは返信料添付のう
えで本社あてお申し出てください)

泰西出版資料会社 横浜市中区北方町 1-67
Sitten-Bild-Verlag KG. TEL (2) 9313

読者サロン



愛禪家との交際を

初めて投書する一愛読者です。どうぞよろしく。

さて、小生二十五歳の国鉄職員ですが、熱烈な六尺禪のマニアです。わたしは多少露出趣味があるため、職場の浴場や銭湯などで禪をゆうゆうとしめるた

びに集中する視線が、たまらなく快感をさそいます。さらに祭りには、きまって参加、禪一本の姿でみこしをかつぎます。ですから東北各地のおもな「はだか祭り」にはほとんど出るため、禪男で有名になりました。

しかし、なかなか同好の士がいなため、語り合う機会にめぐまれません。どなたか勇士はおられませんでしょうか。愛禪家との交際を求む。

(仙台・六尺禪熱愛生)

Y・Tさまに一筆

茨城にお住まいのY・T様に一筆。

先日の夏祭りでサルマタを購入しました。前部のふくらみを盛りあげ、ぴったりと太ももにくいこむ感触は、たしかにあなたがいわれるように、なかなかよいものですが、やはり小生は六尺禪を好みます。

雄器を誇示し、尻にきりつしめこんだ六尺フンドシにまさるものはないと思います。やはり六尺禪のあの緊縛感にまさるものはないと思うのです。

この点、サルマタでは、六尺禪の爽快さはえられませんでした。しかし、サルマタには禪とべつな魅力があることをボクは発見しました。そこで「サルマ

タ・ファン」であるあなたにうかがいたいのです。

というのは、サルマタを着用する場合、あなたは禪をしめてからサルマタをおはきになるのか、または素肌じかに着用するのか、この点が小生にはわからないのです。

たとえば、祭りなどで若い衆がサルマタをはくときは、かならず禪をしめてからサルマタを用いるものです。とすると、どちらが正式なのか疑問が生じるのです。

ぜひ回答をいただきたく、お待ちいたします。

(東京・F・T生)

ときには時代劇も

近所の書店で8月号を入手しました。が、禪ポーズが少ないためちょっと気抜けしました。

なにしろ、男性の禪美を掲載されている雑誌は貴誌だけなのです。したがって、今後は女性の縛りフォトよりも、数多い男性の禪写真を編集してもらいたい。

またときには、時代劇のコマを扱ってほしいと思います。たとえば、浪人者が足をふんば

ったところ、裾が割れて、そこから白い禪が見えるのは、裸以上の色気を感じさせるものです。この案を、ぜひ、ご採用ください。

(東京・上島生)

苦痛ある浣腸責めを

浣腸マニアの皆さま。わたしはいままで、卵、ピンポン、ソーセージなどいろいろ試みてまいりましたが、現在、季節のものとしておナスがあります。これはヘタを切りとり、プレイをするのですが、細いほうから挿入するときはやさしいのですが、排泄するときはとても苦しいものです。また、太いほうから挿入の場合はその苦しさは大変なものですが、排泄のときは大した苦痛はありません。

そこでマニアの皆さまにお願いがあるのです。なにか苦痛を味おう道具をご存じでしょうか。もしありましたら公開していただきたいと思います。ぜひ参考にしたいと思っています。

石田弘美様、山梨の学生さん(お名まえを忘れて失礼、五月号の読者サロンにご投稿されたかた)、お返事おそくなり申し訳ありません。おふたりとも、わ



夜の浜で、少年は二つの影を見た。ひとりには少年の兄であり、もうひとりには村の一青年だった。月光を浴びてふたりの肌が妖しく輝いていた。〈東京・川本ジョージ〉

たしを誌上で思いきり責めてください。

また浣腸の部屋の設立にご協力ください。かさねて編集部にお願いいたします。一ページでもいいから、設けてください。

(夏川絹子)

僕らの友情は本から

愛禪党の皆さん、お元気ですか。ボクは二十二歳の禪マニアです。中学生のころから、夏祭りや海水浴でみるたくましい六尺禪の若者にあこがれ、ひそか

に愛用していましたが、どうも勇気がなく、銭湯などで六尺禪を誇示することができず、越中フンドシやもっこ禪などでごまかし、六尺はもっぱら家にいるときにしめていました。

ところが、偶然にも「FK」を知り、読者サロンをみて感激しました。以来、毎月かかさず愛読していますが、先日、友だちの家に遊びに行ったとき「FK」6月号をみつけて驚きました。さらに隣室からはいつてきた

友人に二度ビックリ。きりたてのサラシの六尺禪だったからです。

あとで聞いた話によると、かれも熱烈なマニアであることがわかりました。こうしてかれとの友情が生れたわけです。

あらためて、ふたりを結んでくれたわれらの「FK」に大いに感謝をささげます。

(東京・斎藤 隆)

同性との付き合いを

わたしが、風俗奇譚のあることを知ったのは、五月初旬でした。以来、毎月の発売日を楽しみにしています。

さて、わたしは、女性には興味をもてません。そこで、どんなか同性のかたとの交際を希望しています。また、グループがありましたら、お教えください。お願いします。

(東京・川井 博)

どしどし男性緊縛を

近刊の「風奇」「画報」ともに全くすばらしい限りです。なかでも男性緊縛を多数編集されファンとして感謝にたえません。

禪一本の裸身で縛られる男たち、まったくたくましく雄々しい壮観美です。とくに貴社の男性モデルによる大和氏の「そり責め」と市川氏の「ポイント」は禪のポーズは、すばらしいものでした。

また読み物では「炎帝廟」と「お銀親娘しほり」も楽しく読ませていただきました。さらに7月号の小田先生の風早中尉のさし絵は美しく、思わず興奮しました。

禪一つのまま後ろ手に緊縛されている美男の中尉の姿は、妖しい官能が忘我の夢に誘って続きます。紳少佐も捕虜として縛ってください。

「お銀親娘縛り」も縛られたい四十男の悲しさ、いやらしさがじゅうぶんでいきます。どしどし男性緊縛を掲載してください。

(金沢・沖 正夫)

鈴木三郎様をお願い

「読者サロン」を通じて鈴木三郎様に一筆したためました。わたしは恋人を失った女でございます。思えば、わたしが恋人により、あなたが望んでいる浣腸プレイを行なう寸前でし

だ。

それまでのかれはわたしを縛り、いろいろな方法で責めました。一年ぐらいたったでしょう。かれはわたしの後庭をいじめることをおぼえ、ほとんど毎日といってよいくらい、わたしは縛られ、いたぶられながら、かれの責めにこたえました。

だが、そうしたかれも、結核が悪化、

「残念だ。紅子、おまえに浣腸をしてやれず」

と言いつつ残して昨年死去しました。

その後、わたしは恥じらいもあり、きょうまでひとり胸に秘めてまいりましたが、ふと近所の書店に立ちよったとき、風俗奇譚のあることを知り、買い求めました。そしていまは亡きKと同じご趣味をもつ男性の多いことを誌上で知ることができました。そのうちのひとりである鈴木様になんとなく心がひかれました。

お願いです。このようなわたしでよろしかったらあなたさまのお役に立ちたいと思い、はしたないお便りを誌上をかりて書きました次第です。

恋人Kとの間に浣腸はまだ一度も経験しておりません。そこで鈴木様のご指導に従いたのです。

お返事は「読者サロン」へお寄せくださいますよう。また、ご住所へご連絡してもよろしい

でしょうか。お返事お待ちしております。
(東京・紅子)

手錠責めフォトを

貴誌のグラビア・フォトを毎月楽しみにしています。そこでわたしのアイデアを参考まで

完成された男性でなく、10代のかわいらしい美少年への責めもまた、魅惑を誘う。〈大阪・無名氏〉

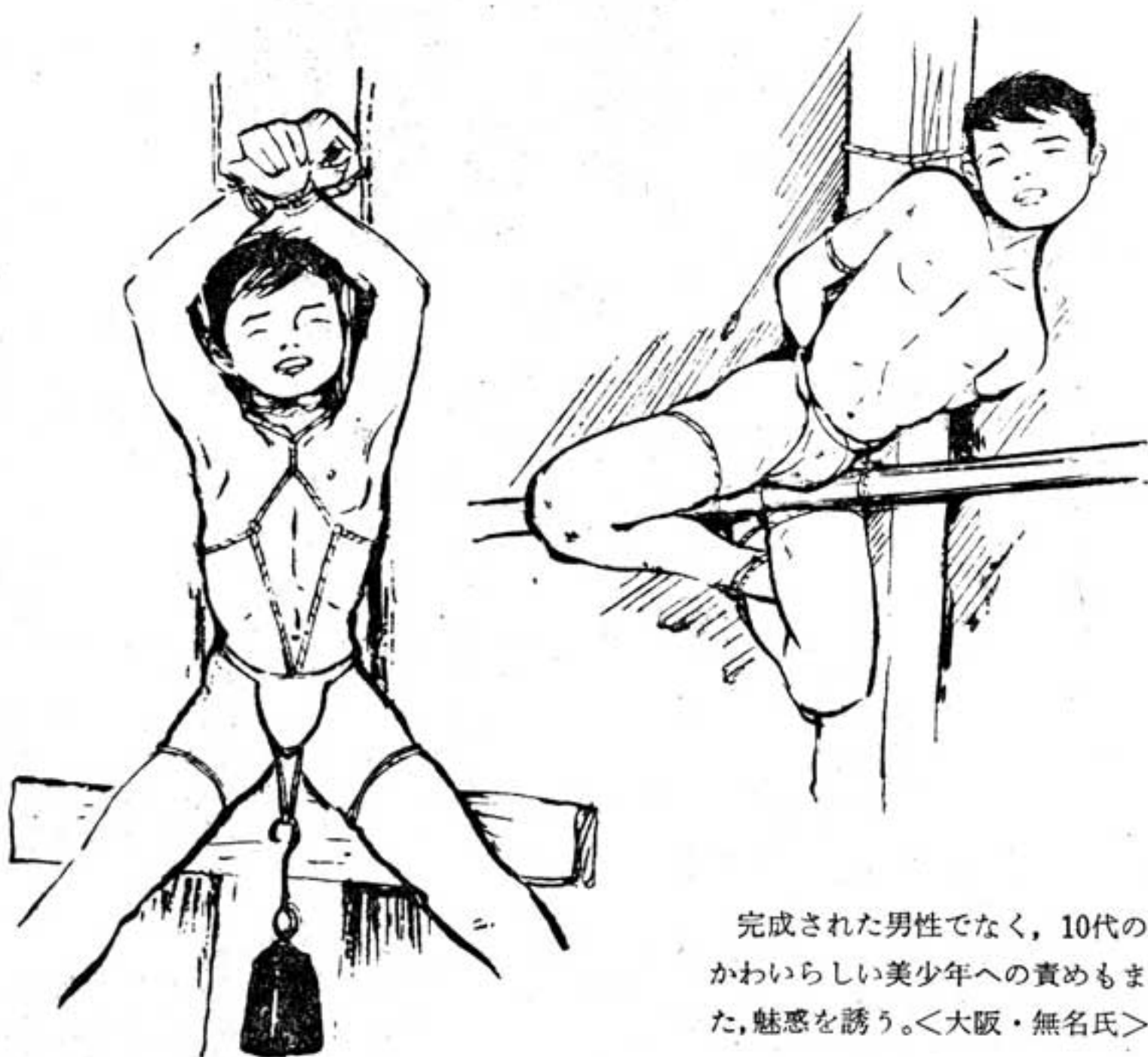
にのべてみました。

①金属手錠を使った構図
手錠(オモチャ)をモデル嬢につかった立ち姿、前手錠、相互手錠(モデルふたり)

②手錠組み写真
この場面は、やはり男性より女性のほうがよいと思う。手を出させて手錠をかけるところから、片手手錠、後ろ手手錠などを連続フォトとする。(注・もたえ、苦痛などに焦点をおく)

③注射を使った構図
これは、できたら看護婦さんの服装がよい。女患(純情型)の腕に強引に注射をする。針をうたれたときの表情、または注射寸前の観念。さらに女患がまくらをかかえ、ペニシリンを臀部に突き刺される場面などがおもしろい。

④浣腸を使った構図
ベッドの横でパンティーをぬぎにかかっている遠影にはじまる。(注・そばで看護婦が浣腸器の準備をしている)
さらにベッドに横たわったときの女のあきらめ、羞恥、挿入のさいの苦痛などを連続写真にする。
以上の案を、ぜひ、誌上で扱



つていただきたいと思ひます。

(東京・増田 生)

S様方から引越します

同志の皆さまからT様方にお電話をいただき、ありがとうございます。二日間に約五十人という電話のため、T様方にもいずらくなりしました。そこで近日ちゅうにS様方に引越すことになりました。

お電話をいただいたお友だちには、またなんらかの方法で連絡します。お待ちください。

(大阪・H・Sマニア)

禪の特集号も

小生は、貴誌6月号からの愛読者です。とくに六尺禪に熱烈な関心をもつ禪マニアで、はじめて貴誌を拝見したときの興奮は、われながらすさまじいものでした。

なぜ好きなのか、自分でもはっきりわからないのですが、とにかく禪につかれた男です。

さて、読者欄を見ますと、投稿のかたたちが、いずれも愛禪家であることを知り、うれしく思いました。また貴誌を通じて、六尺禪への認識が高められ

ていることは事実です。

六尺禪の愛好者こそ、真の日本男子といえるのではないのでしょうか。その意味からも、できれば臨時増刊号を刊行していただきたいと思うのです。

たとえば、禪をテーマにした読み物。禪の研究(発生、禪史、考察、風習)などを特集していただきたいのです。

(東京・白禪好)

裸女の流血沙汰も

女禪狂様のお便り、大いに興味ふかく読みました。フンドシ一つの裸女が演じる無残絵模様は、けっこうなアイデアです。

平素はツンとすましている女たちが裸体になんぞしていただけを、めて、みえも羞恥もすてて、命をまともに相争う血みどろな場面は、グッとくるものです。

その一例として3月号の「白亜楼・血の紅白試合」は、この種の最初のころみだと思ひました。

わたしも時代劇が趣味です。で、古風な髪型の女が禪一つで命をはるような読み物を、こんごも掲載してほしいと思ひま

あらゆる角度から「悩み解消の自宅療法を教ゆ」小冊子・楠山栄三著・コンドーム一個・すりもの・希望の方は100円送金・

SEX

◎ 早く終る・女性かなげく・手軽に治療・五〇〇円送金せられよ・クスリとズバリそのものを書く性愛の本・進呈
◎ 太く恥づかしくない・立派に育てる療法器・コックリ使える・カタログ無代進呈・臭・御自由・素人でも扱える・副業通信販売・方法伝受す・一県一店代理店・乞書面

愛慾の炎をもやす……木の実

ガラナ……の実はそのままでしたべられな酒・ウイスキーなどにソツと一パイ・男も女も・ボケツト瓶十回分・五〇〇円・特用千円

東京葛飾区本田中原町三五六番

白水荘

(どなたにも個人名で密送)

優生相談室

す。

また女禪狂氏のアイデアである娘と姐御の血闘の組み絵もぜひ実現させてください。

(大阪・ヒキノ)

男性モデルの併用を

貴誌発行の「風奇」「画報」の二誌を拝見、小生も愛読者のひとりです。

ところで、編集部にお願ひしたいことは、男性モデルの責めですが、まだまだ男の急所を責めるまでにいたっていないのは残念に思ひます。もっとスレス

レのところまで露出させて責めるフォートを掲載してほしいです。

またモデルも、ボディビルなどをやっている男性に、フンドシをさせてみるのも一興と思ひます。とにかく、禪愛好者が一堂に集まり、大いに語りあう機会を貴誌でぜひ奨励されるようお願いいたします。

(京都・マスコット禪男)

夏川嬢を責めたい

夏川絹子さん、あなたのすてきな浣腸プレイを拝見いたしま

した。それはボクという一個人の心をとらえました。以来ボクは、プレイの相手になることをあれこれ空想の世界でみずから慰めております。

夏川さん、失礼とは思いますが、あなたというひとりの女性を、ボクの想像のなかにひきずり込んで、思うままにいじめてみたいのです。

まず、恥ずかしがるあなたを全裸にして、机の足に左右別々に手足をしっかりと縛ります。

あなたを縛りおえたボクは、その机を押し倒します。そのときあなたの姿は、ちょうど赤ン坊がオムツをかうときのような格好になります。からだをくの字に曲げて、イヤイヤをするあなたをよそに、ボクの目の前には美しいあなたのツボミ（肛門）があまるところなく露出することでしょう。

ボクは、泣いて哀願するあなたの前にすわると、おもむろに拡張器を差し込み、ツボミをジワジワと開かせるでしょう。さらにボクは、特大の綿棒にワセリンをたっぷりつけ、これをあなたのツボミの内部に静かに挿入させます。これで準備完了です。

了です。

ボクはいやがるあなたにボクの好きな食べ物をゆっくり時間をかけて与えます。

さて、食後の遊びの時間です。ボクの周囲には、いろいろの道化た人形や、美しい色彩の玉（いずれも塩化ビニール製）がころがっています。ボクは、それを順々にあなたのツボミに挿入させます。そこでボクはあなたに命じます。

「さ、出すんだ！」

あなたは一つ一つ、挿入した道具を排出するのです。そのときボクは「ムスンデひらい」の童謡を歌います。あなたは、そのメロディに合わせてながら、押し出すのです……。

次は犬とソーセイジ遊びです。ボクの家には愛犬ロツテがいます。あなたにソーセイジを差し込み、徐々に出させるのです。首を出しているソーセイジを、ロツテは大喜びで食べるでしょう。

第三は、ボクの考案した浣腸器で、これも考案した液体を注入します。この液は、五分ぐらいもちます。その間、ボクの指はあなたのツボミをピタリ押

え、ラタをしなければなりません。

やがて、あなたは涙を流して排泄をガマンするでしょう。それは、あなたの体内から汗をふき出し、美しいあなたの顔は羞恥と苦痛にゆがむことでしょう。うめき、もだえ。

それらが、ボクの指にヒクヒクとあなたの女性の動きが感じられるでしょう。

しかし、どうあなたが堪え忍ぼうとも、ボクの考案した薬品のまえには忍耐もくずれさるでしょう。

あなたの苦痛な顔に紅がさした時、ボクは、あらかじめ用意した大型便器をあなたの下半身に、置きます。

そこで、ボクの指のフタをすばやく抜きとるのです。

と同時に、あなたの体内の食べ物、かわいいツボミを押し開き、いき流れ出るのです。

ボクは、それをゆっくり觀賞します。カメラにおさめるのも自由です。夏川さん、あなたは恥

じらいから、ククククとおえつすることでしょう。

やがてボクは、泣きじゃくるあなたを湯殿につれてゆきまします。あなたをいませたまま、よごれたあなたのかわいいツボミを洗います。

こうして洗い清めたあなたをソファに横たえます。そこでボクは、叫びます。

「夏川さん、ボクはしあわせ」と、彼女の苦痛と羞恥の代償として、ボクはキスの雨を美しきツボミに贈るでしょう……。

（黒木 竜）

飛び出す！ノーパンティンショー

★今迄誰も手がけなかった女性の秘密をあます所なく描き出したステレオ界前代未聞のズバリポーズから若き女学生達の温泉場面を秘密撮影！濃みきった湯に映るむっちりとした魅力のモモきゅんとくびれたたまりない腰は見るに堪えない禁断の神地！思わずふりふりしたステレオの魔力！情事に身をくねらせたり泣く身ももどろける様なセクシーなドの体当り演技！男子禁制のまばゆいばかりの桃源境を貴方の眼前で再現！他秘密撮影演出撮影等各種豊富！今評判のステレオも大半が雑誌の口絵写真程度ですが本品は当会員の特別頒布品の中よりや、平凡な物を選んで一般分譲す！本品お買上げの方は準会員とし、特典あり正会員は準会員中より厳選し個人のご希望に必ず市販のステレオに不満の方始めの方でもぜひ当会にご加入下さい

7組入千円 20組入二千円 40組入三千円

右は特殊眼鏡一台付千円の価格必ずお買得にて型録ナシ会員の皆様へお安くお渡し致します。此のたびは営業停止期間が過ぎましたので、新しい新に発足致しました何卒引き続き宜しくお願い致します。従前通り会員特報隔月発送ご通信は必ず私書簡宛え。大宮局私書函第二十三号（ステレオクラブ改め）ステレオ趣味の会

『風俗奇譚』在庫のお知らせ

ご注文は現金書留か振替為替が便利です！

△36年度V八月号(一五〇円)

多色口絵Ⅱ白い肌をよこしてや
るんだ……
グラビアⅡ裸身痛まし・海辺の
ふたり緊縛・椅子の残虐・床
の間も責め場・緊縛の表情・
足を責めるほか……
特集Ⅱフェチズムの人たち
珍奇収集館主人……
わが愛するお尻……
ふんどし・マニアの女……
レザ・フェチの女たち……
写真・残虐なるサディズム
ハンブルグの血に狂うインゲボ
ルグ……
あたしはレスボスに命を賭ける
ムチに生きる令嬢……
ほも禁秘帖⑩男色者の異性関係
女装者の告白手記……
浣腸とお灸と縛り……
中世紀の拷問諸刑具のいろいろ
田上恵子女体責め絵画集……
全裸美女の凄艶切腹図絵……
連載小説・炎帝廟・虐殺指令・
悦虐の彷徨……
サロン・マソキスチカ・ホモの
窓・女装愛好の部屋ほか……

七月号(一五〇円)

多色口絵Ⅱ赤いハイヒール……
グラビアⅡ縛悦の姿態・魅虐の
世界・足責めのポーズ・受縛
の白い人魚・女学生サディス
チン・うしろ方形縛り・木馬
上の六尺姿・ポイント白禪
特集Ⅱ責めさいなまれる女と男
お銀母娘しぼり……
乗馬服を着てのプレイ……
夫のお仕置きがうれしい……
女体を責める……
アブの世界のプライバシー……
サロン・マソキスチカ……
悦虐の果てに……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
わがいとしき友に……
ほも禁秘帖⑨初会の生態……
マゾヒストの手紙から⑫……
浣腸ふたりプレイの記……
ノーマルとアブノーマル……
私の好きな被虐の見せ物……
ハイヒールのワンダ……
女装講座・女の肌をつくる
続・ある完全女装……
イギリス近着フォト……
犬を連れた若奥さん……
白と黒の交感……
連載小説・炎帝廟③・虐殺指令

悦虐の彷徨③(一五〇円)

多色口絵Ⅱ美しきいけにえ……
グラビアⅡ妍を競う艶縛姿態集
しごきで縛られて・寝乱れ縛
姿・全裸に縄が・縄の悶悦・
縛られたボリユーム・男の縛
りプレイ・踏んづけ海老責め
六尺と縄の魅惑……
特集Ⅱ女装に陶酔する男たち
ああ女装の夜はふけて……
男性の心の底に眠る女装願望
女装する男たち……
女装のあたしを誘惑した男……
女装花ひらくとき……
限らない女装へのあこがれ……
私の女装のお師匠さん……
ある完全女装……
マゾヒストの手紙から⑪……
ふたりのマゾヒストの女……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
ホモ禁秘帖⑧……
フアンタジック・ショート
夜行動物……
女性の残虐なる責め場集……
怪奇人形館の秘密と恐怖……
浣腸のある風景……
豊満な白いお尻の魅力……
女体に加えるウナギ責め……
連載小説・虐殺指令・炎帝廟②
悦虐の彷徨②……
五月号(一五〇円)
多色口絵Ⅱムチをふるう女

グラビアⅡふたり縛り、制服は
嘆く・狼藉の一瞬間・荒縄が
肌を噛む・どうされるのかし
ら？・悦虐の時が来る・羞恥
のなかから・首輪につながら
て・縛られた男・ムチ打つ
女……

特集Ⅱ鞭に憑かれた男と女
鞭よ、愛しておくれ……
鞭打の魅惑……
鞭は生きて……
だれも持っていない鞭の関心……
ムチで鍛えられた女……
あたしの鞭打の獲物……
ムチと皮紐の一夜……
ふくよかな処女の尻に……
愛と復讐と鞭と……
6人の受難の女……
灼熱地獄・冷水地獄・生きて
いる的・ふたりさらし……
ほも禁秘帖⑦狂崇の対象……
同性マゾヒストとの会話……
ヌートリクス画廊……
乗馬マニア9人の女たち……
ヌートリクス・コーナー……
女騎手強制調教所……
サロン・マソキスチカ……
ホモの窓・女装愛好の部屋……
あたしは肉体まで女になった……
猫責め地獄……
連載小説・炎帝廟・悦虐の彷徨
四月号(一四〇円)
多色口絵Ⅱ赤い靴のドミナ……
グラビアⅡ太鼓しぼり・木にく

くられて・荒小屋を背に・石の階段は冷たい・古雅の中庭で・緊縛悶姿・早く叩いて・冷蔵庫の上に・シャツも破れて・ひじ曲げの拘束ほか
 特集・東西古今刑罰残酷物語
 刑罰にひそむサディズム
 世界残酷刑罰の生態
 刑罰と拷問のいろいろ
 江戸封建社会の刑罰
 昔の刑罰は残酷だった
 花井お梅の獄中日記
 申城残酷記
 マグダレナ殉教秘史
 尻打ちの世界泰西名画集
 責められる女の姿態
 晴雨流女のしほり方・伊藤晴雨
 マゾヒストの手紙から⑩
 鼻の穴がピコピコうごく
 ほも禁秘帖⑥
 サロン・マソキスチカ
 ホモの窓・女装愛好の部屋
 私がマニアになったのは
 私のいけにえになった処女
 鞭打浣腸小説・鞭魔ロベール
 三月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ雪の露台・村上ユキ
 グラビアⅡ雪の女・雪にころがされて・妖艶切腹の図・制服椅子責め・裸身ながたと
 特集・マゾヒストの世界
 マゾ小説・でんすけ地獄
 赤禪斬り込み隊
 絵物語・毛皮を着たヴィナス

K氏自虐帳(告白小説)
 妖異の世界
 乳房・尻・頭髮フェチシズム
 サディストの使用したムチ
 職業サディストの女
 女体責め画集
 グラインダー地獄・また裂き
 変型責め・車責め・納屋の首
 吊り・あやつり責め
 江馬美久・田上恵子の傑作画集
 ほも禁秘帖⑤妖美なる野郎たち
 私の女装告白体験記
 私の女装半生記
 二月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ縛愁・囚花・制服は悲しからずや・乳房をかむ縄ハリツケ縛り・緊縛・拘束の写真と責め絵画集
 妖美なる女体責め絵集
 三人のソドミア
 鞭打悦虐小説傑作特選集
 一月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ血を好む大公妃
 責め絵特集Ⅱ空中緊縛ほか
 色刷写真Ⅱふたりプレイ・オンパレード・レザー・フェチシズムほか
 グラビアⅡ妖美吊り艶姿・ころがし責め・ハリツケとさか立ち・閨怨のポーズほか
 特集・ソドミアとレスボス
 八35年度V十二月号(一四〇円)
 特集・伊藤晴雨責面写真自選集
 多色口絵・野ざらし

責め絵スケッチ集
 晴雨女体緊縛写真集
 伊藤晴雨さんのプロフィール
 晴雨さんの雪責め
 グラビアⅡ石段の緊縛裸女・め
 しい鳥・石垣の前で・長じゅばんも乱れて
 十一月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ水地獄・土井啓子
 女体責め絵Ⅱ丸太小屋の惨・岩場ハリツケ・竹しほり責め・射撃のマト・ほか
 グラビアⅡ艶麗無残・はなやかな足吊り・犬の首輪のブラジャー・吊るし責め他
 特集・戦争残酷の記録
 十月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ女体知恵の輪
 色刷写真Ⅱ美しき囚虜・あかりも淡くほか
 グラビアⅡ白衣の佳人・長椅子と女・白衣も乱れて
 特集・サディストの乱れ
 九月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ空中鞭打
 原色写真Ⅱ巖頭の裸女・つるされた白魚
 グラビアⅡ落花の景・裸女無残二人しほり
 特集・女装する男たち
 八月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ受縛二重奏
 口絵Ⅱスレ小屋の残酷
 グラビアⅡスタンドの美女



<B5判>

280 円

風俗奇譚5月臨時増刊
 マゾヒストの天国特集号



<A5判>

250 円

風俗奇譚8月臨時増刊
 サド小説とマゾ読み物特集号

特集・レスビアン生態
 七月号 (一四〇円)
 多色口絵Ⅱ落花図
 グラビアⅡ恋慕受縛・姐上の白魚・肌もあらわに
 特集・食人症
 六月号 (一三〇円)
 多色口絵Ⅱ痛ましき祭壇
 グラビアⅡ樹間のニンフ・密室の呪縛・足づり裸女
 特集・フェチシズム(淫物症)
 夏の臨時増刊号(一八〇円)
 法悦特集五月号(一四〇円)
 悦虐特集三月号(売り切れ)
 春の臨時増刊号(二〇〇円)
 艶妖特集二月号(一四〇円)
 創刊臨時特集号(売り切れ)



画報風俗奇譚

〈在庫のお知らせ〉

各号とも在庫が少なくなつてまいりました。お申し込みは、お早めに。現金書留か振替が確実です。

〈36年分〉

画報風俗奇譚・第15集

8月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱふたり責め八田上恵子・古正英生Ⅴ
グラビア①魅縛縄飲の姿態Ⅱ岩場の縛姿・慕情の姿態・ある受縛のポーズ・クサリでつなぐ・セロファンつつみ・ネグリジェ一枚で・さか立ち足吊り・セーラー服の縛姿・木の股しぼり・女の切腹絵巻Ⅲ他
グラビア②男妖の園Ⅱたたずまい・野原にひとり・受縛のなかの禪・男ふたり・禪一本のポーズ・ボクは犬だⅢその他
責め絵集Ⅱ田上恵子・古正英生SMふたりプレイⅡ西ドイツのエクスプロ提供Ⅲ……
男の楽園Ⅱ欧米おとこの画集Ⅲ……

画報風俗奇譚・第14集

7月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱ女責め火と水とⅢ
グラビア①緊縛競艶悦虐の肌くらべⅡ縄のデュエット・寝巻き乱れて・首をひっぱる・野の縛姿・T字型に・悦悶のポーズ・タヌキしぼり・木馬は痛い・女のレスリングⅢほか
グラビア②男性悦虐ポーズ集Ⅱ鎖しぼり・つんのめった裸男・はだかのポーズ・ふたりし

画報風俗奇譚・第13集

6月号(一八〇円)

色刷り口絵Ⅱ責められる女責める女八田上恵子ほかⅤ
グラビア①Ⅱ木馬責めの少女・艶美なる切腹・受縛の置き物・つい立て責め・ハシゴしぼり・艶縛のひと・恥ずかしい姿態・緊縛の背面と正面・白い縛魚・縄が呼ぶ陶醉Ⅲほか
グラビア②男性緊縛悦虐のポーズ集Ⅱ縄と足の加虐・二つの性向・男の魅力・縛られ男・

画報風俗奇譚・第12集

5月号(一八〇円)

名彩写真Ⅱ自己陶醉・ふたり愉悦・ひとり燃えてⅢ……
グラビア①Ⅱ緊縛二重奏・セーラー服乱れて・制服落花・草はらで・魅縛の白魚・碁盤いじめ・裸の羞恥・杭が背中に痛い・陶醉の寝姿Ⅲ……ほか
グラビア②妖美の花園に咲く姿態Ⅱ縄の妖美・柱しぼり2態・靴のまま・あたしを愛す・

ばり・首と足と一緒にⅢほか
画集Ⅱ男の世界ⅡマックレンⅤ
女を責める画集Ⅱしぶき責め・木馬責め・階段の責め・野原の杭にⅢほかⅡ古正英生・江馬美久・田上恵子Ⅴ
ルイス・アピラとその作品Ⅲ……
(マゾ絵物語) 踏んでちょうだい
(絵物語) 処刑無頼Ⅲ……
(絵物語) 美少年はオレが頂くぜ
(絵物語) ムチをふるう売春婦Ⅲ……
(絵物語) 江戸城大奥の無残地獄
諸国責めばなし・男責めの巻④
緊縛協会の奇妙なショウⅢ……
ヌートリクス・フォート・ギャラリⅢ……その他

足引きの責め・あたしの犬Ⅲ……
ルイ・アピラ・シリーズⅡ鞭をもつ女・縛られた女3態Ⅲ……
凄艶責め絵4人集Ⅱクサリをまとして・谷川づけ・美しき人間椅子・背中を焼くローソク
八田上恵子・古正英生・江馬美久・小田利美Ⅴ
妖美な展覧会Ⅱ便器のそばの少女・女騎手ⅡゴダールほかⅤ
(絵物語) 悪魔作家の仕事部屋Ⅲ……
(絵物語) 復讐される女たちⅢ……
(絵物語) お仕置きされる美少女
(絵物語) 処女タナへの成人式Ⅲ……
諸国責めばなし・男責めの巻③
サド女性に縛られた女装男Ⅲ……
楽しきかな足の魅力Ⅲ……その他

ふたりしびれ・そり責め…他
白い肌無残絵Ⅱさかさ縛り・歯
車責め・油地獄ハ古正英生・
江馬美久・田上恵子Ⅴ

女装紳士銀…
ヌートリクス画廊…

(絵物語) 騎れる美少女ドラ…
(サド絵物語) 黒眼鏡の野獣…

(時代絵物語) 若武者裸の出陣…
諸国責めばなし・男責めの巻②

グエンドリンの降伏と冒険…
パラダイス・イン・スパンキング

風変わりな展覧会Ⅱ奴隷市場・
レスボスの花園・ムチを持つ

女・男たちを支配する女・サ
ディストの夢・淫楽殺人ハ藤

田嗣治・モロオほかⅤその他

画報風俗奇譚・第11集
4月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ野外受縛4態…
グラビアⅡ石どうろう縛り・蝶

蝶しぼり・屈辱の姿勢・首吊
りのポーズ・棒で責める…他

口絵Ⅱ無残ノ責められる女八態
(絵物語) アゾンの会の男性征服

(絵物語) 女子同性愛クラブ…
(写真物語) ロープと鞭のプレイ

諸国責めばなし・男責めの巻①
もう一つの世界Ⅱ女サディスト

・女装コンテスト・女のレス
リング・処刑の部屋・サド女
とマゾ男・ホモの恋人…ほか

女は何を考える?Ⅱロックス・マ
トウシエックらのアブ名画集

女装紳士録…その他

画報風俗奇譚・第10集
3月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ艶縛クワルテット…
グラビアⅡ雪中縛女・残酷な耳

責め・艶治吊り姿・緊縛立像
・浣腸のとき・縛囚のひと・

おむつの代用・人間風…ほか
口絵Ⅱ哀艶無残責められる女…

伊藤晴雨責め写真集…
(絵物語) 男はあたしのしもべ…

(絵物語) 天道白蛇教異聞…
(写真集) 尻打ちの世界…その他

画報風俗奇譚・第9集
2月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ肌もあらわに・制服
無残・裸姿の緊縛…

グラビアⅡ女性刑罰史絵巻…
女体責め悦虐画集…

アブチックな世界への招待…
異常な性風俗展覧会…

(絵物語) 女を責める5態…
(絵物語) 山小屋のいけにえ…

(写真物語) 深夜の危険なショー
(絵物語) 皮ハギ小屋…その他

画報風俗奇譚・第8集
1月号(一八〇円)

色彩写真Ⅱ女体羞姿・縛虐重奏
グラビアⅡ盛装無残・腹切り悶

悦・縄とおんな・支那服の縛
女・縄にもたえる・乳しぼり

・禪姿の男・クモしぼり…他
口絵Ⅱ女体責め絵巻…

鞭打10のア・ラ・カルト…
ピグマリオン4態ハバイロスⅤ

自分を愛すハヘーゲマンⅤ…
女装マニア・愛されるよろこび

(絵物語) 縄と鞭に魅入られた女
(絵物語) 女の責め絵巻…

女をいじめる5景…その他

画報風俗奇譚4月臨時増刊
緊縛女体150ポーズ・女性責
め絵巻物集(大判)二八〇円



△35年分Ⅴ
画報風俗奇譚・第7集
(一八〇円)

画報風俗奇譚・第6集
(一八〇円)

画報風俗奇譚・第5集
(一八〇円)

画報風俗奇譚・第4集
(一八〇円)

画報風俗奇譚・秘蔵版
(二〇〇円)

画報風俗奇譚・第2集
(一八〇円)

画報風俗奇譚・第1集
(売り切れ)

秘蔵版風俗画報・第2集
(三〇〇円)

秘蔵版風俗画報・第1集(売切)

画報風俗奇譚1月臨時増刊
凄艶女体緊縛写真・責め絵
悦虐秘画集(大判)二八〇円

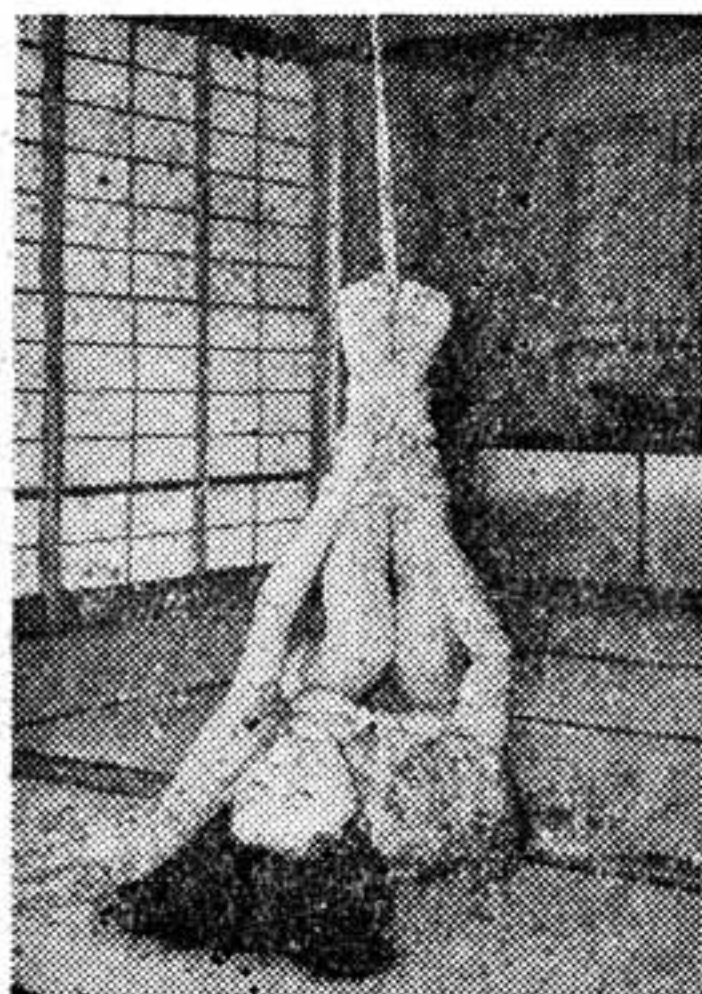


代理部の分譲写真 一覧

ご注文は略号を明記のうえ
振替か現金書留をご利用な
さるとご便利で確実です！

女体責め悶悦の姿態！

★女囚緊縛ポーズ(略A6)	三枚三〇〇円
★野 外 縛 り(略A7)	三枚三〇〇円
★凄絶切腹六態(略A8)	六枚八〇〇円
★全裸緊縛ポーズ(略A9)	三枚三〇〇円
★腎 部 責 め(略A10)	三枚三〇〇円
★水責め・湯責め(略A11)	三枚三〇〇円
★本格鞭打プレイ(略A12)	三枚三〇〇円
★豊満なる緊縛女体(略C6)	三枚三〇〇円
★海老責め地獄(略C7)	三枚三〇〇円
★眼 帯 の 女(略C8)	三枚三〇〇円
★さるぐつわ艶姿(略C9)	三枚三〇〇円
★制服の乙女縛り(略C10)	三枚三〇〇円
★裸女棒しばり(略C11)	三枚三〇〇円
★密室の呪縛(略D6)	三枚三〇〇円
★全裸変形地獄図(略D7)	三枚三〇〇円
★無残二人しばり(略D8)	三枚三〇〇円
★浣腸悦虐フット(略D10)	三枚三〇〇円
★浣腸陶酔ポーズ(略D11)	三枚三〇〇円
★力つきた処女(略P1)	三枚三〇〇円
★蛇が白肌を(略P2)	三枚三〇〇円



モデル別お好みポーズ集

☆舟木喜代子のBG緊縛

- ▼大の字縛り(略F5) 三枚三〇〇円
- ▼ハダカ男馬のり(略F6) 三枚三〇〇円
- ▼豊艶乳房しばり(略F7) 三枚三〇〇円

☆風早由美子の妖美緊縛

- ▼樹間のニンフ(略H1) 三枚三〇〇円
- ▼嘆きのセーラ服(略H2) 三枚三〇〇円
- ▼死のベルト誘い(略H3) 三枚三〇〇円

☆井神せい子の豊満縛姿

- ▼窓ぎわの残虐(略I1) 三枚三〇〇円

☆村上ユキ特選緊縛フット

- ▼全裸後ろ手縛り(略M1) 三枚三〇〇円
- ▼お灸灼熱地獄(略M2) 三枚三〇〇円
- ▼本格縛り責三態(略M3) 三枚三〇〇円
- ▼豊 麗 切 腹(略M5) 三枚三〇〇円
- ▼閨房股間縛り(略M6) 三枚三〇〇円
- ▼凄絶雪責め(略M7) 三枚三〇〇円
- ▼古風な緊縛(略M8) 三枚三〇〇円
- ▼椅子の上の無残(略M9) 三枚三〇〇円

☆西牧えり子の悦虐縛り

- ▼中国服悦虐姿態(略N1) 三枚三〇〇円
- ▼いたぶられ姑娘(略N2) 三枚三〇〇円
- ▼乙女の祈り(略N3) 三枚三〇〇円
- ▼全裸いたぶり(略N5) 三枚三〇〇円

本誌独占ノ男性緊縛の魅惑ノ

★迫るローソクの炎(略P3)三枚三〇〇円
 ★全裸責めの魅惑(略P4)三枚三〇〇円
 ★晴れ着もあらわに(略P5)三枚三〇〇円
 ★股裂き三人選(略P6)三枚三〇〇円
 ★肌くらべ全裸縛り(略Q1)三枚三〇〇円
 ★花ひらく受縛天国(略Q2)三枚三〇〇円
 ★血みどろのリンチ(略X8)五枚五〇〇円
 ★悦 虐 の 表 情(略X9)三枚三〇〇円
 ★本格吊るし責め(略X10)三枚三〇〇円

☆禪姿二人プレイ(略B18)三枚三〇〇円
 ☆禪姿一人プレイ(略B19)三枚三〇〇円
 ☆禪姿ふたりの男(略B20)三枚三〇〇円
 ☆全裸の男性美(略B21)三枚三〇〇円
 ☆禪姿一人緊縛(略B22)三枚三〇〇円
 ☆青竹十字背負い(略B23)三枚三〇〇円
 ☆禪姿股間ポーズ(略B24)三枚三〇〇円
 ☆変形縛り責め(略B25)三枚三〇〇円
 ☆純白の禪姿(略B26)三枚三〇〇円
 ☆虐げられる禪男(略B27)三枚三〇〇円
 ☆三角木馬責め(略B28)三枚三〇〇円
 ☆竹を背負って(略B29)三枚三〇〇円
 ☆禪姿開脚の図(略B30)三枚三〇〇円
 ☆全裸の男(略B31)三枚三〇〇円
 ☆変わり海老責め(略B32)三枚三〇〇円
 ☆緊縛悦虐境(略B33)三枚三〇〇円
 ☆踏んづけられて(略B34)三枚三〇〇円
 ☆男を責める男(略B35)三枚三〇〇円
 ☆おれのエモノ(略B36)三枚三〇〇円



☆西条さくら豊艶緊縛

▼鼻責め嗜虐(略N6)三枚三〇〇円
 ▼哀花受難(略N7)三枚三〇〇円
 ▼制服の少女虐め(略N8)三枚三〇〇円
 ▼悦虐の園の女(略N9)三枚三〇〇円
 ▼棒責め立ち姿(略N10)三枚三〇〇円
 ▼棒責めの伏姿(略N11)三枚三〇〇円
 ▼乳房地獄責め(略S1)三枚三〇〇円
 ▼腹部への嗜虐(略S2)三枚三〇〇円
 ▼悶姿の祭壇(略S3)三枚三〇〇円
 ▼ゴムひもの責め(略S4)三枚三〇〇円

☆高月まゆみの縛悦姿態

▼砂浜荒縄しぼり(略T5)三枚三〇〇円
 ▼あばらやの恋縄(略T6)三枚三〇〇円
 ▼碁盤責め三態(略T7)三枚三〇〇円
 ▼野外十字架縛り(略T8)三枚三〇〇円
 ▼犬になった女(略T9)三枚三〇〇円
 ▼車中の拘束(略T10)三枚三〇〇円

☆島崎ユカ魅縛のポーズ

▼裸身は嘆く(略U1)三枚三〇〇円

△サデイスチンのポーズ▽

☆女王様としもべ(略W1)三枚三〇〇円
 ☆ドミナのムチ(略W2)三枚三〇〇円

いずれも三枚一組です

■読者原稿募集

本誌では愛読者各位の原稿をお待ちしています。左記の要項にしたがい、どしどしお送りください。

☆創作（四百字25枚以内）

S・M・H・Fなどアブチックな世界にテーマを求めたもの。

☆告白体験記（四百字20枚以内）

あなた自身の体験、またはあなたのまわりに秘められたアブの世界に関するもの。

☆アブ・ニュース（3枚以内）

「ホモの窓」「女装愛好の部屋」「サロン・マソキチスカ」に収載する、町に落ちていくニュー・スなど、その他、サド、マゾ、流腸などに関するもの。

☆口絵・カット（枚数制限なし）

かならず墨描きのこと。筆でもペンでもかまいません。ただし折れないように送ってください

☆編集上の企画・アイデア

表紙をはじめあらゆる面に対する企画・アイデア。詳細なもの、ヒントだけのもの、いずれも可。

★採用の分には、規定の謝礼をお送りします。なお、応募原稿は採否ともにご返却いたしません

今月の新作写真

男責めの粹！

☆首しばり3態（略B37）

四つに畳んで首と足を縛る
無残さ（三枚一組）三〇〇円

☆無残、男責め（略B38）

足をもって折り曲げ竹で首を突く（三枚一組）三〇〇円

☆縛られた禪男（略B39）

後ろ手に縛られてつきころがされ（三枚一組）三〇〇円

☆禪姿の悦虐境（略B40）

加虐の中でもだえ喜悅する
禪の男（三枚一組）三〇〇円

☆女に虐待される男（略W3）

禪の男を棒で責め縄でいじめる女（三枚一組）三〇〇円

★：男性の責め写真は、本誌の独壇場です。他誌のゼツタイ追隨を許さない魅惑一〇〇パーセントのものです。その粋を抜いておくりする写真にご期待ください。

■編集室だより

▼：巻頭言で大達氏も指摘しているように、だれの心にも、SなりMなりの性向は、多かれ少なかれひそんでいるものである。そういった人びとが、同好の士と相知ってプレイをできれば、モヤモヤは発散できるが、そういったパートナーをもたない人たちは、本誌などによって、想像の世界で、その鬱を晴らすことになる。そういうところに本誌の使命があるとすれば、われわれは、それだけ重大な使命を負っているとして懸命にならねばならない。そのためにも読者各位のご支援ご叱正を願いたい

▼：最近、ある類誌や実話系統の雑誌に、小社が特約している、アメリカのヌートリクス社の版權に属する写真や絵がいくつか見られた。小社としては、正当な契約のもとに掲載しているものと同種のもものが他に転載されるのはまことに遺憾である。しかし、わが国の総代理店から、本社へ通報済みだそうであるから、近い将来には、小誌以外でそういったものを見ることはできなくなるだろう。

■月ぎめご購読の方法

風俗奇譚（各送料とも）

一カ月（一冊）一五〇円

三カ月（三冊）四五〇円

六カ月（六冊）九〇〇円

一カ年（十二冊）一八〇〇円

画報・風俗奇譚（各送料とも）

一カ月（一冊）一八〇円

三カ月（三冊）五四〇円

六カ月（六冊）一〇八〇円

一カ年（十二冊）二一六〇円

★本社に直接ご注文の場合は、現金書留か振替が確実で、ご便利です。ただし、振替は日時がかりますゆえ、あらかじめご了承ください。

風俗奇譚 九月号

定価一五〇円

昭和三十六年八月二十日印刷
昭和三十六年九月一日発行

編集人 高倉 一
印刷所 刊行会印刷部

発行所 文献資料刊行会

振替東京 四二四九四番
電話東京(291)二四三〇番